

平成 28 年度年度名古屋大学大学院文学研究科
学位（課程博士）申請論文

フィンランド語の A 不定詞基本形と
受動現在分詞による修飾

名古屋大学大学院文学研究科
人文学専攻言語学専門

久保田 樹

平成 29 年 2 月

謝辞

本研究は、名古屋大学大学院博士後期課程在籍中の研究成果をまとめたものである。指導教官の町田健先生、佐久間淳一先生には、博士前期課程在学時から長年にわたってご指導・ご鞭撻を賜った。フィンランド語がご専門の佐久間先生には、チュートリアルを重ねる中で研究を導いていただき、細かな点から内容に関わる重大な点に至るまで、多くの貴重なご指摘をいただいた。ここに深謝の意を表する。

この論文を書き上げるにあたっては、他にも多くの方々にお力をお貸しいただいた。全員についてここで書ききることはできないが、心からの感謝を申し上げたい。特に、稲葉信史先生、Kirsti Siitonen 先生をはじめとする Turku 大学の先生方には、留学中、そしてアンケート調査で、大変お世話になった。また、Susanna Sankala さんと Elisa Viuhkola さんには、容認度判断に何度もご協力いただいた。さらに、例文のチェックをしてくれたフィンランド人の友人知人達、アンケート調査の回答者、その他たくさんの方々のご協力なしには、この論文は完成しなかった。

最後に、幼少期の旅行という、フィンランドへ関心を寄せるきっかけを作ってくれた両親、そして、論文執筆のよきアドバイザーかつ研究生生活の支えになってくれた夫・久保田一充に、心からの感謝をささげる。

目次

0 章 序論

1. 研究の目的と論文の構成	1
2. フィンランド語概要	1
2.1 系統, 使用状況, 類型	1
2.2 文字と音声・音韻	2
2.3 形態	3
2.3.1 名詞類の格変化	3
2.3.2 動詞の活用	15
2.3.3 不定詞	16
2.4 統語	17
2.4.1 SVO 文	17
2.4.2 存在文, 所有文	18
2.4.3 必須文	20
2.4.4 不定人称受動文	21
2.4.5 様々な名詞修飾	22
2.4.5.1 形容詞句, 名詞句, 側置詞句	22
2.4.5.2 節	26
2.4.5.3 分詞	28

1 章 背景

1. A 不定詞基本形と受動現在分詞	32
1.1 A 不定詞基本形の用法	32
1.2 受動現在分詞の用法	47
2. 先行研究	53
2.1 Penttilä (1963)	53
2.2 Hakulinen & Karlsson (1979)	57
2.3 ISK (2004)	58
2.4 Vvks	58
2.5 Savijärvi (1971)	59
2.6 Pekkarinen (2005, 2011)	62
2.7 坂田 (2010, 2015)	65

2 章 A 不定詞基本形による修飾	
1. A 不定詞基本形による名詞修飾	66
2. A 不定詞基本形による動詞修飾	71
3. A 不定詞基本形による形容詞修飾	74
3.1 〈主語+olla+形容詞+A 不定詞基本形〉	74
3.2 〈主語+olla+形容詞+時や場所を表わす名詞+A 不定詞基本形〉	80
4. まとめ	83
3 章 受動現在分詞による修飾	
1. 受動現在分詞による非典型的な名詞修飾	85
1.1 語彙化した受動現在分詞	86
1.2 サイズを規定する受動現在分詞	88
1.3 kunto「状態」を修飾する受動現在分詞	92
2. 受動現在分詞変格・様格による動詞修飾	96
3. 受動現在分詞変格による形容詞修飾	99
4. まとめ	103
4 章 A 不定詞基本形の目的語と主名詞の格	
1. 導入	104
2. 肯定文	104
2.1 全用法の A 不定詞基本形の目的語の格	105
2.2 名詞修飾用法の A 不定詞基本形の目的語の格	107
3. 否定文	115
4. 所有文・必須文的表現	121
5. まとめ	124
5 章 自動詞の A 不定詞基本形・受動現在分詞による修飾	
1. 「動詞－目的語」からの逸脱	126
1.1 不定形動詞と主名詞・関連名詞の解釈上の文法関係	126
1.2 母語話者による容認度判断	129
2. 〈自動詞＋場所格補部〉	130
3. 〈自動詞＋側置詞句〉	135
4. 〈側置詞 受動現在分詞＋名詞〉	139
5. まとめ	143
6 章 結論	
1. 研究成果	144
2. 今後の課題と展望	146

参考文献	147
略号一覧	150
アンケート用紙	151

0 章 序論

1. 研究の目的と論文の構成

本研究は、フィンランド語の A 不定詞基本形と受動現在分詞の修飾用法に関して、その特徴の網羅的な記述を目的とする。具体的には、修飾機能や被修飾要素との関係といった句レベルの問題に留まらず、当該句の統語的制約や統語的環境といった文レベルの問題も取り上げる。さらには、非典型的といえる事例も扱い、当該表現の周縁部分についても明らかにする。フィンランド語の不定形動詞には数多くの形があるが、その中で A 不定詞基本形と受動現在分詞には名詞修飾用法、動詞修飾用法、形容詞修飾用法が存在し、性質が重なるところもある。両者の修飾用法を並列して扱うことで、それぞれの特徴をより鮮明にする。

本論文の構成は以下の通りである。まず、序章である本章では、フィンランド語の概要について述べる。主に、本論の内容理解の助けとなる文法について、簡単にまとめる。続く第 1 章では、背景として A 不定詞基本形と受動現在分詞の全用法について概観し、先行研究をまとめる。第 2 章では A 不定詞基本形による修飾について、第 3 章では受動現在分詞による修飾について、名詞修飾、動詞修飾、形容詞修飾に分けて論じる。第 4 章では、A 不定詞基本形の目的語の格選択について主に論じるが、主名詞の格にも触れる。第 5 章では、不定形と名詞が本来の「他動詞－目的語」ではない、「自動詞－場所格補部／側置詞の項」といった関係にある例について論じる。第 6 章は結論で、本論で論じたことを総括し、今後の課題も提示する。

2. フィンランド語概要

本論に入る前に、本節で、フィンランド語について基本事項を概観する。2.1 節では系統、社会的使用状況、類型、2.2 節では文字と音声・音韻、2.3 節では形態、2.4 節では本論と関係のある統語について述べる。文法事項の記述は、フィンランド語最大の文法書 Hakulinen et al. (2004) (以下、書名 *Iso suomen kielioppi* から *ISK* と表記する) と、松村(1992: 672-687)を参考にした。なお、本論文では、方言ではなく、現代標準語(nyky-yleiskieli)を扱う。

2.1 系統、使用状況、類型

フィンランド語は、ウラル語族フィン・ウゴル語派バルト・フィン諸語に属する言語である。

母語話者は約 540 万人で、主にフィンランドで話されている。フィンランドの人口の約 89.7%はフィンランド語母語話者であるが、約 5.4%はスウェーデン語母語話者であり¹、スウェーデン語はフィンランド語と並んで、フィンランドの公用語である。なお、スウェーデン語は、インド・ヨーロッパ語族ゲルマン語派に属し、フィンランド語とは系統がまったく異なる。

典型的に見ると、フィンランド語は典型的な膠着語であり、基本語順は SVO である。た

¹ tilastokeskus (フィンランド統計局) 2012 年のデータ。

だし、語順は比較的自由である。

2.2 文字と音声・音韻

フィンランド語は、ラテン文字を使用している。表記に用いられるのは、a, d, e, g, h, i, j, k, l, m, n, o, p, r, s, t, u, v, y, ä, ö の 21 文字である。ただし、外来語にはこれ以外の文字も用いられる (bussi 「バス」, šekki 「小切手」)。1 文字と 1 音素がほぼ対応している。

母音は、以下の 8 種類がある。

表 0-1 母音体系

	前舌母音		後舌母音	
	非円唇	円唇	非円唇	円唇
狭	i	y		u
半狭	e	ö		o
広	ä		a	

(ISK 37)

母音調和によって、前舌母音の ä, ö, y と、後舌母音の a, o, u は同一形態素内に共起しない。i, e は、音声学上は前舌母音だが、母音調和に関しては中立的に働き、前舌母音と後舌母音のどちらとも共起する (tuoli 「いす」, säilytys 「保存」)。この母音調和は、格語尾や人称語尾、派生接辞などにも適用されるが (suu-ta 「口・分格」, syy-tä 「理由・分格」)²、複合語には適用されない (syy|oppi³ 「原因論」)。全ての母音には長短の区別があり、また、二重母音としては、ai, ei, oi, ui, äi, öi, yi, ie, uo, yö, äy, öy, au, eu, iu, ou がある。

子音は、13 種類に加え、外来語のみに出てくるものもある (下の表 0-2 では括弧に入れて表記)。

表 0-2 子音体系

	両唇音	歯音／歯茎音		硬口蓋音／軟口蓋音	声門音
閉鎖音	p (b)	t d		k (g)	
鼻音	m	n		ŋ	
摩擦音	(f)	s	(š)		h
流音		l r			
半母音	v			j	

(ISK 38)

² 以下、前舌母音と後舌母音の両方を表すときは、大文字を用いる。例えば、-tA は分格語尾-ta または-täを表す。

³ 本稿では分かりやすさのために、複合語であることを強調したい場合には、要素間に | を入れて記す。

d, h, v, j, ŋ 以外の子音には、長短の区別がある。そのうち、無声閉鎖音 p, t, k は、語が活用する際に、長短が交替、または単音が他の子音と交替したり消えたりする。この現象を階程交替(astevaihtelu)という⁴。以下に基本の規則を示す。

表 0-3 階程交替

kk ⇔ k ⇔ -	kukka 「花」 → kuka·n 「花・属格」
pp ⇔ p ⇔ v	tavata 「会う」 → tapaa·n 「私は会う」
tt ⇔ t ⇔ d	koti 「家」 → kodi·n 「家・属格」

音節構造としては、CV, CVC, CVCC, CVV, CVVC, V, VC, VCC, VV, VVC があるが、出現頻度が一番高いのは CV である(*ISK*: 45-46)。

アクセントは強さアクセントで、第一音節に置かれる。イントネーションは下降調で、これは疑問文であっても変わらない。

2.3 形態

2.3.1 名詞の格変化

名詞範疇としては、数、格があり、接尾辞によって表す。名詞を修飾している形容詞も、被修飾名詞と数・格が一致する。さらに、名詞には所有接尾辞が付く場合もある。

表 0-4 所有接尾辞

	単数	複数
1 人称	-ni	-mme
2 人称	-si	-nne
3 人称	-nsA / -Vn ⁵	

(1) iso-i:ssa talo-i:ssa-mme

big-PL-INE house-PL-INE-POSS.1PL

「私達の大きい家々で」

以下では、格について述べる。格は、主格、属格、対格、分格、様格、変格、内格、出格、入格、所格、離格、向格、欠格、共格、具格の 15 個がある⁶。対格は、人称代名詞と疑問代名詞 kuka 「誰」のみに現れ、それら以外の場合では、単数は主格または属格と同形、複数主格とは同形である。ただし、機能の違いと分かりやすさのため、本論文では、

⁴ ここではかなり単純化したけど、階程交替についての詳細は、松村(1992: 673-674)などを参照のこと。

⁵ 形態における V は任意の母音を表す。以下同様。

⁶ 所格を接格、離格を奪格とする訳もある。

単数の目的語に表れる・n⁷を属格ではなく n 対格，いくつかの構文に出現する単数の目的語の・φ を単数主格ではなく φ 対格，複数の目的語に表れる・t を複数主格ではなく t 対格と便宜上呼ぶことにする。目的語の格に関しては，2.4.3 節で後述する。欠格，共格，具格は，現代ではイディオムの表現を除き，ほとんど使用されない。表 0-5 で，talo「家」を例に，格変化を表す。今日，共格と具格には，単複の区別がなくなっている。

表 0-5 一般名詞の格変化

	単数	複数
主格 nominatiivi	talo	talo-t
属格 genetiivi	tako-n	talo-j-en
分格 partitiivi	tako-a	talo-j-a
様格 essiivi	talo-na	talo-i-na
変格 translatiivi	talo-ksi	talo-i-ksi
内格 inessiivi	talo-ssa	talo-i-ssa
出格 elatiivi	talo-sta	talo-i-sta
入格 illatiivi	talo-on	talo-i-hin
所格 adesiivi	talo-lla	talo-i-lla
離格 ablatiivi	talo-lta	talo-i-lta
向格 allatiivi	talo-lle	talo-i-lle
欠格 abesiivi	talo-tta	talo-i-tta
共格 komitatiivi	talo-i-ne-POSS	
具格 instruktiivi	talo-i-n	

(松村 1992: 675 を基に筆者作成)

人称代名詞の格変化は，以下の通りである。

⁷ フィン・ウゴル祖語では*-m であったが，歴史的変化を経て属格と同形になった(Hakulinen 1961: 67-68)。

表 0-6 人称代名詞の格変化

	単数			複数		
	1 人称	2 人称	3 人称	1 人称	2 人称	3 人称
	「私」	「あなた」	「彼／彼女」	「私達」	「あなた達」	「彼ら」
主格	minä	sinä	hän	me	te	he
属格	minu-n	sinu-n	häne-n	meidä-n	teidä-n	heidä-n
対格	minu-t	sinu-t	häne-t	meidä-t	teidä-t	heidä-t
分格	minu-a	sinu-a	hän-tä	mei-tä	tei-tä	hei-tä
様格	minu-na	sinu-na	häne-nä	mei-nä	tei-nä	hei-nä
変格	minu-ksi	sinu-ksi	häne-ksi	mei-ksi	tei-ksi	hei-ksi
内格	minu-ssa	sinu-ssa	häne-ssä	mei-ssä	tei-ssä	hei-ssä
出格	minu-sta	sinu-sta	häne-stä	mei-stä	tei-stä	hei-stä
入格	minu-un	sinu-un	häne-en	mei-hin	tei-hin	hei-hin
所格	minu-lla	sinu-lla	häne-llä	mei-llä	tei-llä	hei-llä
離格	minu-lta	sinu-lta	häne-ltä	mei-ltä	tei-ltä	hei-ltä
向格	minu-lle	sinu-lle	häne-lle	mei-lle	tei-lle	hei-lle

非生産的で使用頻度の低い欠格、共格、具格を除いた 12 個の格のうち、主格、属格、対格、分格は文法格(kieliopilliset sijat)であり、それ以外の格は場所格(paikallissijat)と呼ばれる。場所格のうち、抽象的な場所格(abstraktit paikallissijat)とされる様格と変格を除いた 6 つの格は、以下の表 0-7 のような体系をなしている。

表 0-7 場所格の体系

	内部場所格(sisäpaikallissijat)	外部場所格(ulkopaikallissijat)
静止位置 「～で」	内格：-ssA 「～の中で」	所格：-llA 「～の上（表面，近傍）で」
起点 「～から」	出格：-stA 「～の中から」	離格：-ltA 「～の上（表面，近傍）から」
到着点 「～へ」	入格：-(h)Vn 「～の中へ」	向格：-lle 「～の上（表面，近傍）へ」

(松村 1992: 675, *ISK*: 1175 を基に筆者作成)

以下で、それぞれの格の主な用法を概観する⁸。なお、名詞類に加え、本論で扱う不定詞

⁸ ここではあくまで簡単に述べるに留めており、全ての用法を網羅的に記述している訳ではない。それぞれの格の詳しい用法に関しては、*ISK*: 1182-1214)を参照のこと。

も格変化をするが、不定詞については 2.3.3 節で扱う。

a) 主格

主格は主に、主語 (2) や補語 (3) に用いられる。

(2) *Liisa juo olut-ta.*

Liisa.NOM drink.3SG beer-PAR

「リーサはビールを飲む。」

(3) *Liisa on opiskelija.*

Liisa.NOM be.3SG student.NOM

「リーサは学生だ。」

目的語にも用いられるが、本論文では上述の通り、その場合は対格 (φ 対格, t 対格) と見なす。また、OSMA (*objektisijainen määrän adverbiali* 「目的語格の量の副詞」) として、量、持続時間、頻度を表すこともあるが、これも対格として扱う。

b) 属格

属格は、典型的には所有関係を表し、補語にもなり得る。属格名詞と被修飾名詞との様々な意味的關係については、2.4.5.1 節で詳述する。

(4) *Liisa-n kirja*

Liisa-GEN book.NOM

「リーサの本」

(5) *Tämä kirja on Liisa-n.*

this.NOM book.NOM be.3SG Liisa-GEN

「この本はリーサのだ。」

不定詞⁹や、自動詞由来の行為名詞の動作主を表すこともある。行為名詞が他動詞由来の場合には、属格名詞は典型的には目的語に相当する。

⁹ 不定詞のうち、A 不定詞基本形・変格形、E 不定詞内格形・具格形、MA 不定詞内格形・出格形・入格形・欠格形は、属格と所有接尾辞による動作主標示が可能である。詳しくは坂田(2010)参照。

- (6) *Äiti anto-i minu-n opiskel-la englanti-a.*
 mother.NOM give-PAST.3SG I-GEN study-AINF English-PAR
 「母は私に英語を勉強させた。」

- (7) *väestö-n kasva-minen / kasvu*
 population-GEN increase-VN.NOM increase.NOM
 「人口の増加」

- (8) *auto-n aja-minen / ajo*
 car-GEN drive-VN.NOM drive.NOM
 「車の運転」

- (9) *Liisa-n täyty-y opiskel-la japani-a.*
 Liisa-GEN must-3SG study-AINF Japanese-PAR
 「リーサは日本語を勉強しなければならない。」

前置詞や後置詞が、属格名詞を従えることもある。以下の例(10)では、後置詞 *takia* 「～のために」が、属格名詞を従える。

- (10) *Te-i-n tämä-n Liisa-n takia.*
 do-PAST-1SG this-nACC Liisa-GEN for.the.sake.of
 「リーサのために私はこれをした。」

2.4.3 節で詳述する必須文などの構文においても、動作主を表す。
 さらに、形容詞が属格になり、副詞的に働くこともある。

- (11) *Tämä hevonen on erityise-n nopea.*
 this.NOM horse.NOM be.3SG special-GEN fast.NOM
 「この馬は特別に速い。」

主格の場合と同様に、目的語や OSMA にも用いられるが、本論文では上述の通り、その場合は *n* 対格と見なす。

c) 対格

対格は、包括的な目的語(*totaaliobjekti*)に用いられる。詳しくは 4.2 節で後述する。

- (12) *Tapa-si-n häne-t.*
meet-PAST-1SG he/she-ACC
「私は彼／彼女に会った。」

また、既述の通り、 ϕ 対格と *n* 対格は OSMA として、量、持続時間、頻度を表すのにも用いられる。

- (13) *Lue kirja tunti!*
read.IMP.2SG book. ϕ ACC hour. ϕ ACC
「本を一時間読みなさい！」

- (14) *Istu-i-n tuoli-lla koko päivä-n.*
sit-PAST-1SG chair-ADE whole day-nACC
「私は一日中椅子に座っていた。」

d) 分格

分格は、目的語 ((15)), OSMA ((16)), 補語 ((17)), そしてまれに不定量の主語 ((18)) として働く。分格目的語については、2.4.2 節で詳述する。

- (15) *Liisa juo olut-ta.*
Liisa.NOM drink.3SG beer-PAR
「リーサはビールを飲む。」

- (16) *En syö-nyt mitään koko päivä-ä.*
NEG.1SG eat-ACT.PAST.PART.NOM anything.PAR whole day-PAR
「私は一日中何も食べなかった。」

- (17) *Tämä on olut-ta.*
this.NOM be.3SG beer-PAR
「これはビールだ。」

- (18) *Ruoka-a on pöydä-llä.*
food-PAR be.3SG table-ADE
「食事は机の上にある。」

(ISK:1174¹⁰)

¹⁰ 以下、引用例文の形態素分析、グロス、訳、括弧や下線等は、本稿執筆者による。

また、1 以外の数詞の後や単位的な数量を表す名詞には、分格名詞が続く。

- (19) Lu-i-n kaksi *kirja-a*
read-PAST-1SG two book-PAR
「私は 2 冊の本を読んだ。」

- (20) Jo-i-n lasi-n *viini-ä*.
drink-PAST-1SG glass-nACC wine-PAR
「私はグラス 1 杯のワインを飲んだ。」

加えて、前置詞や後置詞が分格名詞を要求することもある。

- (21) Te-i-n se-n ilman *syy-tä*.
do-PAST-1SG it-nACC without reason-PAR
「私は理由なくそれをした。」

感嘆文や挨拶表現にも、分格が用いられる。

- (22) *Hyvä-ä päivä-ä!*
good-PAR day-PAR
「こんにちは！」

e) 様格

様格の用法は主に、時間表現 ((23)), 心境, 状況, 条件等を表す副詞的表現 ((24)), 一時的状態を表す補語 ((25)) の三つである。

- (23) Ol-i-n viime *kesä-nä* Suome-ssa.
be-PAST-1SG last summer-ESS Finland-INE
「私は昨夏フィンランドにいた。」

- (24) *Nuore-na* pid-i-n elokuva-sta.
young-ESS like-PAST-1SG movie-ELA
「私は若い頃は映画が好きだった。」

- (25) Ole-n *raskaa-na*.
 be-1SG heavy-ESS
 「私は妊娠している。」

f) 変格

変格は主に、変化の結果 ((26)), 期間・期日 ((27)), または「～として」という意味で ((28)), 副詞的に用いられる。

- (26) Liisa tul-i *tervee-ksi*.
 Liisa.NOM come-PAST.3SG healthy-TRA
 「リーサは元気になった。」

- (27) Valo-t sammu-i-vat *tunni-ksi*.
 light-PL.NOM go.out-PAST-3PL hour-TRA
 「1 時間停電した。」

- (28) Luul-i-n Liisa-n *ruotsalaise-ksi*.
 think-PAST-1SG Liisa-nACC Swedish-TRA
 「私はリーサをスウェーデン人だと思っていた。」

g) 内格

内格は、「～の中で」といった意味の静止場所 ((29)) や状態 ((30)), 時間 ((31)) を表すのが、主な用法である。

- (29) Asu-n *Japani-ssa*.
 live-1SG Japan-INE
 「私は日本に住んでいる。」

- (30) *Mi-ssä suhtee-ssa* Honda on erikoinen?
 what-INE relationship-INE Honda.NOM be.3SG special.NOM
 「どのような点でホンダは特別なのか？」

(ISK 1200)

- (31) Mi-tä tapahtu-u *tulevaisuude-ssa*?
 what-PAR happen-3SG future-INE
 「将来何が起こるだろう？」

h) 出格

出格の用法は多岐に渡っている。「～の中から」という分離を第一義とし ((32)(33)), 時間の起点 ((34)), 情報源 ((35)), 原因・理由 ((36)) も表す。

- (32) Tul-i-n *Japani-sta*.
come-PAST-1SG Japan-ELA
「私は日本から来た。」

- (33) Osta-n omena-n *kaupa-sta*.
buy-1SG apple-nACC shop-ELA
「私はお店でりんごを買う。」

- (34) Raviontola on avoinna *maanantai-sta* perjantai-hin.
restaurant.NOM be.3SG open Monday-ELA Friday-ILL
「レストランは月曜から金曜まで開いている。」

- (35) Lu-i-n *lehde-stä*, että Obama tule-e Japani-in.
read-PAST-1SG newspaper-ELA that Obama.NOM come-3SG Japan-ILL
「私は、オバマが来日すると新聞で読んだ。」

- (36) Itke-mme *suru-sta*.
weep-1PL grief-ELA
「私達は悲しみに泣いている。」

結果構文の起点にも用いられる。

- (37) *Liisa-sta* tul-i opettaja.
Liisa-ELA come-PAST.3SG teacher.NOM
「リーサは先生になった。」

また、「～について」という内容や、「～の意見では」という意見の主も表す。

- (38) Kirjoita-n *historia-sta*.
write-1SG history-ELA
「私は歴史について書く。」

(39) *Minu-sta* Liisa on oikea-ssa.

I-ELA Liisa.NOM be.3SG right-INE

「私の意見では、リーサは正しい。」

さらに, *hämmästyä* 「～に驚く」, *ihastua* 「～が好きになる」, *kiinnostaa* 「～に興味がある」, *kiittää* 「～に感謝する」, *nauttia* 「～を楽しむ」, *pitää* 「～が好きだ」などの, 心理状態に関係する特定の動詞の項としても用いられる。

(40) *Pidä-n urheilu-sta.*

like-1SG sport-ELA

「私はスポーツが好きだ。」

i) 入格

入格は主に, 「～の中へ」といった方向や時間の着点を表す。

(41) *Mene-n Suome-en.*

go-1SG Finland-ILL

「私はフィンランドへ行く。」

(42) *Raviontola on avoinna maanantai-sta perjantai-hin.*

restaurant.NOM be.3SG open Monday-ELA Friday-ILL

「レストランは月曜から金曜まで開いている。」

j) 所格

所格は, 「～の上, 表面, 近くで」といった静止場所 ((43)), 状況 ((44)), 時間 ((45)) に加えて, 手段・道具 ((46)) も表す。また, 2.4.2 節で詳述するように, 所有文において所有者を表す ((47))。

(43) *Ole-n asema-lla.*

be-1SG station-ADE

「私は駅にいる。」

(44) *Puu-t ovat hiirenkorva-lla.*

tree-PL.NOM be-3PL bud-ADE

「木々は芽ぐんでいる。」

(45) Halua-n matkusta-a syksy-llä.
want-1SG travel-AINF fall-ADE
「私は秋に旅行したい。」

(46) Kirjoita-n kynä-llä.
write-1SG pen-ADE
「私はペンで書く。」

(47) Minu-lla on auto.
I-ADE be.3SG car.NOM
「私は車を持っている。」

k) 離格

離格は主に、「～の上, 表面, 近くから」という起点 ((48)(49)), 時刻 ((50)), 計量 ((51)) を表す。また, 感覚動詞とともに用いられる ((52))。

(48) Tul-i-n asema-lta.
come-PAST-1SG station-ABL
「私は駅から来た。」

(49) Kysy-i-n opettaja-lta.
ask-PAST-1SG teacher-ABL
「私は先生に聞いた。」

(50) Herää-n seitsemä-ltä.
wake.up-1SG 7-ABL
「私は 7 時に起きる。」

(51) Maito maksa-a kaksi euro-a litra-lta.
milk.NOM cost-3SG two euro-PAR liter-ABL
「牛乳は 1 リットルあたり 2 ユーロだ。」

(52) Se maistu-u hyvä-ltä.
it.NOM taste-3SG good-ABL
「それはおいしい。」

l) 向格

向格は主に、「～の上，表面，近くへ」という着点を表す。

(53) Mene-n *asema-lle*.

go-1SG station-ALL

「私は駅へ行く。」

(54) Kerro-n *sinu-lle*.

talk-1SG you-ALL

「私はあなたに語っている。」

m) 欠格

欠格は、「～なしで」という意味を表すが，今日では決まった表現以外ではあまり用いられない。

(55) Te-i-n se-n *syy-ttä* / *luva-tta* / *vaiva-tta*.

do-PAST-1SG it-nACC reason-ABE permission-ABE trouble-ABE

「私は理由／許可／問題なくそれをした。」

n) 共格

共格は、「～と一緒に，～を伴って」という意味を表すが，文語的な表現であり，今日ではあまり使われない。共格名詞には，必ず所有接尾辞が付く。また，単複同形で，本来複数に用いられる接尾辞-i が，単数にも用いられる。

(56) Hän asu-u *vaimo-i-ne-en* Japani-ssa.

he.NOM live-3SG wife-PL-COM-POSS.3 Japan-INE

「彼は妻と共に日本に住んでいる。」

o) 具格

具格は，決まった表現以外では用いられず，単数形は，さらに限られた表現でしか使用されない。「～を用いて」という手段・道具を表す表現だが，今日では，具格ではなく所格が，その意味で生産的に用いられる ((46)参照)。

(57) Mene-n *jala-n* työ-hön.

go-1SG foot-INST work-ILL

「私は徒歩で仕事に行く。」

- (58) Katso-i-n om-i-n silm-i-n.
 look-PAST-1SG own-PL-INST eye-PL-INST
 「私は自分の目を見た。」

2.3.2 動詞の活用

次に、動詞の活用を概観する。定動詞は、人称、時制、法により語形変化する。人称には、1, 2, 3 人称の単複に加え、4 人称と呼ばれることもある不定人称受動形が存在する。時制には、現在、過去、現在完了、過去完了がある。過去の標識は*-i-*または*-si-*で、完了形は、英語の *be* 動詞に相当する *olla* と過去分詞で表す。以下に、動詞 *puhua* 「話す」を例に、直説法の肯定形の活用を示す。

表 0-8 直説法の活用（肯定形）

		現在	過去	現在完了	過去完了
単 数	1 人称	puhu-n	puhu-i-n	ole-n puhu-nut	ol-i-n puhu-nut
	2 人称	puhu-t	puhu-i-t	ole-t puhu-nut	ol-i-t puhu-nut
	3 人称	puhu-u	puhu-i	on puhu-nut	ol-i puhu-nut
複 数	1 人称	puhu-mme	puhu-i-mme	ole-mme puhu-neet	ol-i-mme puhu-neet
	2 人称	puhu-tte	puhu-i-tte	ole-tte puhu-neet	ol-i-tte puhu-neet
	3 人称	puhu-vat	puhu-i-vat	o-vat puhu-neet	ol-i-vat puhu-neet
不定人称受動		puhu-ta-an	puhu-tt-i-in	on puhu-ttu	ol-i puhu-ttu

(松村 1992: 677 を基に筆者作成)

否定形は、動詞の前に否定動詞を置く。現在では本動詞が、現在完了では *olla* が語幹になる。過去では本動詞が、過去完了では *olla* が過去分詞になる。以下に、直説法現在の否定形の活用を示す。

表 0-9 直説法の活用（否定形）

単 数	1 人称	en puhu
	2 人称	et puhu
	3 人称	ei puhu
複 数	1 人称	emme puhu
	2 人称	ette puhu
	3 人称	eivät puhu
不定人称受動		ei puhu-ta

法は、直説法に加え、条件法、可能法、命令法がある。

表 0-10 条件法, 可能法, 命令法の活用

		条件法	可能法	命令法
単 数	1 人称	puhu-isi-n	puhu-ne-n	—
	2 人称	puhu-isi-t	puhu-ne-t	puhu
	3 人称	puhu-isi	puhu-ne-e	puhu-koon
複 数	1 人称	puhu-isi-mme	puhu-ne-mme	puhu-kaa-mme
	2 人称	puhu-isi-tte	puhu-ne-tte	puhu-kaa
	3 人称	puhu-isi-vat	puhu-ne-vat	puhu-koot
不定人称受動		puhu-tta-isi-in	puhu-tta-ne-en	puhu-tta-koon

(松村 1992:677 を基に筆者作成)

2.3.3 不定詞

フィンランド語で不定詞と呼ばれるものには, A 不定詞(A-infinitiivi), E 不定詞(E-infinitiivi), MA 不定詞(MA-infinitiivi)¹¹がある。以下の表 0-11 で, 動詞 puhua 「話す」を例に示す。第 4 不定詞, 第 5 不定詞と称される形式もあるが, その使用は今日では非常に限定的であるため, ここでは表に含めていない。

表 0-11 不定詞

A 不定詞 ¹²	基本形	puhu-a	「話す」
	変格	puhu-a-kse-POSS	「話すために」
E 不定詞	内格	puhu-e-ssa puhu-tta-e-ssa (受動)	「話しながら」
	具格	puhu-e-n	「話すことで」
MA 不定詞	内格	puhu-ma-ssa	「話しながら」
	出格	puhu-ma-sta	「話すことをやめて」
	入格	puhu-ma-an	「話しに」
	所格	puhu-ma-lla	「話すことによって」
	欠格	puhu-ma-tta	「話さないで」
	具格	puhu-ma-n puhu-tta-ma-n (受動)	pitää 「~しなければなら ない」に後続

(松村 1992: 679, *ISK*: 490 を基に筆者作成)

¹¹ それぞれ, 第 1 不定詞(1.infinitiivi), 第 2 不定詞(2.infinitiivi), 第 3 不定詞(3.infinitiivi)と呼称されることもある。

¹² A 不定詞の基本形(perusmuoto)と変格は, それぞれ, 短形(lyhyempi muoto), 長形(pidempi muoto)と呼称されることもある。また, A 不定詞を TA 不定詞(TA-infinitiivi)と呼ぶ研究者もいる。

このうち、本論文で扱う A 不定詞基本形について概観する。その詳しい用法については、1 章 1.1 節で扱う¹³。

A 不定詞の標識・A は、動詞によって、-dA, lA, -nA, -rA, -tA にもなる (syö-dä「食べる」, opiskel-la「勉強する」, pur-ra「嘔む」, pan-na「置く」, nous-ta「起きる」)。A 不定詞基本形は不定詞の中で唯一格語尾を持たないが、おそらく歴史的には「～へ」という方向を表す位格(latiivi)の*-k¹⁴であり、現代の A 不定詞基本形のいくつかの用法に元の位格の機能が残っている(Hakulinen 1961: 76)。ただし、-A の元の意味については未だに不明瞭で、Hakulinen(1961: 172)は、A 不定詞と受動の標識が音韻的に同形であることと、A 不定詞が拡張的な受動の意味を持つことが、単なる偶然なのかどうかについてはまだ分かっていないと述べている。

なお、A 不定詞基本形は、引用形式としても用いられる。

2.4 統語

本小節では、本論と関係の深いものを中心に、統語を概観する。

2.4.1 SVO 文

ここでは、目的語の格標示について整理する。目的語には、分格か対格が用いられるが、無標とされるのは分格のほうである。以下の 3 つの条件が全て満たされれば対格に、一つでも満たされない場合は分格になる(松村 1992: 679)。

- 1) 肯定文である。
- 2) 行為（現象）が、完結（完了）しているか、完結（完了）することが予定されている。
- 3) 行為（現象）が、目的語の表す対象の全体におよぶものである。

(松村 1992: 679)

表 0-12 目的語の格選択

肯定文			否定文
行為が完了		行為が継続	
行為が対象の全体に及ぶ	行為が対象の一部にのみ及ぶ		
対格	分格		

以下の例文で、対格目的語の(59)は、本を 1 冊全て読み通すということが含意される。

¹³ その他の不定詞の用法については、ISK(489-514)参照。

¹⁴ 変格語尾・ksi の・k も、この位格の*-k に由来する(Hakulinen 1961: 70)。さらに、本文で後述するように A 不定詞と受動の標識が同形であるからか、A 不定詞基本形は受動現在分詞変格と置き換え可能な場合がある。

それに対し、分格目的語の(60)は、読み途中である、または本の一部だけを読むということが含意される。また、(61)は否定文なので、分格目的語が用いられている。

(59) Lue-n kirja-n.
read-1SG book-nACC
「私は本を（1冊全て）読む。」

(60) Lue-n kirja-a.
read-1SG book-PAR
「私は本を読んでいる。」

(61) En lue kirja-a.
NEG.1SG read book-PAR
「私は本を読まない。」

2.3.1 節で述べた通り、人称代名詞と疑問代名詞を除いては、対格特有の形が存在しない。単数対格（n 対格）は単数属格と、複数対格（t 対格）は複数主格とそれぞれ同形である。不定人称受動文、命令文、必須文といった、主格の主語が存在しない特殊な構文では、n 対格は ϕ 対格になる。 ϕ 対格は、単数主格と同形である。

(62) Minu-n täyty-y luke-a kirja.
I-GEN must-3SG read-AINF book. ϕ ACC
「私は本を読まなければならない。」

2.4.2 存在文, 所有文

存在文(eksistentiaalilause)は、〈場所（場所格名詞句）＋自動詞＋存在物（主格または分格名詞句）〉という形式である。動詞は常に 3 人称単数で、存在を表す olla であることが多いが, tulla「来る」, ilmestyä「現れる」, aiheuttaa「影響する」, saapua「到着する」, syntyä「生まれる」, vapautua「自由になる」, pudota「落ちる」などの、他の自動詞が来ることもある。それらは典型的には、存在や出現 ((67)), 消失 ((68)) を表す。また、否定文では、存在物は分格になる ((64))。

(63) Pöydä-llä on kirja.
table-ADE be.3SG book.NOM
「机の上に本がある。」

- (64) Poydä-llä ei ole kirja-a.
table-ADE NEG.3SG be book-PAR
「机の上に本がない。」
- (65) Poydä-llä on sakse-t.
table-ADE be.3SG scissor-PL.NOM
「机の上にはさみがある。」
- (66) Lasi-ssa on viini-ä.
glass-INE be.3SG wine-PAR
「グラスにワインが入っている。」
- (67) Liisa-lle syntyi lapsi.
Liisa-ALL be.born-PAST.3SG child.NOM
「リーサに子どもが生まれた。」
- (68) Koivu-sta puto-si leht-i-ä.
birch-ELA fall-PAST.3SG leave-PL-PAR
「白樺から葉が散った。」

所有文(omistuslause)は、〈所有者（所格名詞句）+olla+所有物（主格または分格名詞句）〉という形式で¹⁵、「～は…を持っている、～には…がある」という意味を表す。所有文は、存在文の下位分類と見なすことも可能である。存在文と同様、動詞 *olla* は常に 3 人称単数であり、否定文では所有物は分格になる ((71))。ただし、「寒気、食欲、空腹、のどの渇き、鼻水、咳、熱、アレルギー、痛み、持病」などの身体状況を表す場合には、否定文であっても、所有物は分格にならず主格のままである ((72))。

- (69) Minu-lla on auto.
I-ADE be.3SG car.NOM
「私は車を持っている。」
- (70) Liisa-lla on vihreä-t silmä-t.
Liisa-ADE be.3SG green-PL.NOM eye-PL.NOM
「リーサは緑の目をしている。」

¹⁵ 存在文と所有文を無主語構文と見なす立場と、存在文の存在物、所有文の所有物を主語と見なす立場とがある。本論文では、前者の立場をとる。

(71) Minu-lla ei ole sisko-a.
I-ADE NEG.3SG be sister-PAR
「私には姉妹がいない。」

(72) Minu-lla ei ole huono olo.
I-ADE NEG.3SG be bad.NOM feeling.NOM
「私は気分が悪くはない。」

2.4.3 必須文

「～しなければならない」というモダリティを表す形式のうちの一つとして、必須文 (nesesiivirakenne) がある。必須文では、行為者が属格で表され¹⁶, *täytyä* や *pitää* といった第一動詞が 3 人称単数で、そして第二動詞が A 不定詞基本形で続く。目的語は、もとが分格や *t* 対格であればそのままの格だが ((73b)), もとが *n* 対格であれば, ϕ 対格に変わる ((74b))。否定文になると、目的語は必ず分格になる ((75))。また、行為者が明示されないこともあるが、その場合、目的語などのほかの要素が文頭に来ることが多い ((76))。

(73) a. Liisa opiskele-e japani-a.
Liisa.NOM study-3SG Japanese-PAR
「リーサは日本語を勉強する。」
b. Liisa-n täyty-y opiskel-la japani-a.
Liisa-GEN must-3SG study-AINF Japanese-PAR
「リーサは日本語を勉強しなければならない。」

(74) a. Minä maksa-n lasku-n.
I.NOM pay-1SG bill-nACC
「私は代金を払う。」
b. Minu-n pitä-ä maksa-a lasku.
I-GEN must-3SG pay-AINF bill. ϕ ACC
「私は代金を払わなければならない。」

(75) Teidä-n ei tarvitse maksa-a lasku-a.
you.PL-GEN NEG.3SG need pay-AINF bill-PAR
「あなた達は代金を払わなくてよい。」

¹⁶ 必須文の属格名詞を主語と見なす研究者もいるが、本論文では、必須文は無主語構文だと見なす。

- (76) Lasku pitä-ä maksa-a.
bill. ϕ ACC must-3SG pay-AINF
「代金は払わなければならない。」

täytyä や pitää といった動詞の代わりに、動詞 olla と pakko 「必要性、強制」といった名詞の組み合わせが用いられることもある。このことに関しては、1 章 1.1 節と 2 章 1 節で詳述する。

- (77) Minu-n on pakko maksa-a lasku.
I-GEN be.3SG need.NOM pay-AINF bill. ϕ ACC
「私は代金を払わなければならない。」

また、これらに加えて、第 4 不定詞や受動現在分詞も、動詞 olla とともに義務のモダリティを表すことができる (1 章 1.2 節参照)。

2.4.4 不定人称受動文

フィンランド語の受動文は、行為者が人間かつ不問の場合に用いられ、「不定人称受動」(impersonaalinen passiivi)と呼ばれる¹⁷。行為者は文に現れない。文頭には、動詞以外の要素が現れる。目的語の、主語への上昇は起きない。必須文の場合と同様で、能動文で *n* 対格だった目的語は、受動文では ϕ 対格になる。分格または *t* 対格だった目的語は、格が変わらない。以下の例(78)～(80)の *b* が不定人称受動文である。

- (78) a. Joku luke-e kirja-n.
 somebody.NOM read-3SG book-nACC
 「誰かが本を読む。」
 b. Kirja lue-ta-an.
 book. ϕ ACC read-PASS-4
 「本が読まれる。」

¹⁷不定人称受動文とは別に、行為者が特定のでない文として、ゼロ人称構文(nollapersoonarakenne, zero construction)と呼ばれる構文がある。総称主語構文(generic subject construction)とも呼ばれる (Holmberg 2010)。ゼロ人称構文では、動詞は 3 人称単数である。

(i) Ranska-ssa juo viini-ä hyvin.
France-INE drink.3SG wine-PAR well
「フランスではよくワインを飲む。」

不定人称受動文とゼロ人称構文の違いについては、Laitinen(2006), Helasvuo & Vilkuna (2008), Holmberg(2010)等を参照のこと。

- (79) a. *Suome-ssa ihmise-t puhu-vat suome-a.*
 Finland-INE people-PL.NOM speak-3PL Finnish-PAR
 「フィンランドでは人々はフィンランド語を話す。」
- b. *Suome-ssa puhu-ta-an suome-a.*
 Finland-INE speak-PASS-4 Finnish-PAR
 「フィンランドではフィンランド語が話される。」
- (80) a. *Joku sö-i mone-t omena-t.*
 Somebody.NOM eat-PAST.3SG many-PL.ACC apple-PL.ACC
 「誰かがたくさんのりんごを食べた。」
- b. *Mone-t omena-t syö-tt-i-in.*
 many-PL.ACC apple-PL.ACC eat-PASS-PAST-4
 「たくさんのりんごが食べられた。」

不定人称受動文は、自動詞文からも問題なく作ることができる。

- (81) a. *Tori-lla joku tanssi.*
 square-ADE somebody.NOM dance.3SG
 「広場で誰かがダンスをしている。」
- b. *Tori-lla tanssi-ta-an.*
 square-ADE dance-PASS-4
 「広場でダンスをしている。」

2.4.5 様々な名詞修飾

ここでは、名詞を修飾する様々な方法について概観する。不定詞や受動現在分詞による名詞修飾は、2章以降で詳しく扱う。

2.4.5.1 形容詞句、名詞句、側置詞句

名詞修飾で一般的なのは、形容詞や属格名詞による修飾である。形容詞は、前から名詞を修飾し、被修飾名詞と同じ数・格となる。

- (82) a. *iso talo*
 big.NOM house.NOM
 「大きい家」

b. iso-i-ssa talo-i-ssa
big-PL-INE house-PL-INE
「大きい家々で」

属格も、必ず被修飾名詞に前置される。属格名詞と被修飾名詞との意味関係は、典型的な所有だけでなく、多岐に渡っている。Penttilä(1963: 331-333)は、以下の 12 種類に分類している。以下(83)-(94)の例は全て Penttilä(1963: 331-333)からの引用である。

a) 所有

(83) Mattila-n riihi
Mattila-GEN kiln.NOM
「マッティラ（人名）の釜」

b) 相互依存関係

(84) Minu-n serkku-ni
I-GEN cousin.NOM-POSS.1SG
「私のいとこ」

c) 主語

(85) linnu-n laulu
bird-GEN song.NOM
「鳥の歌」

d) 目的語

(86) jumala-n pelko
God-GEN fear.NOM
「神への畏れ」

e) 全体一部分

(87) koivu-n letde-t
birch-GEN leaf-PL.NOM
「白樺の葉」

f) 位置

- (88) Heinola-n markkina-t
Heinola-GEN market-PL.NOM
「ヘイノラ（地名）のマーケット」

g) 内容

- (89) Elä maa:ssa maa-n tava-lla!
live.IMP country-INE country-GEN way-ADE
「郷に入れば郷に従え。」

h) 測量

- (90) sada-n kilo-n kantamus
100-GEN kilo-GEN burden.NOM
「100 キロの重荷」

i) 比較

- (91) vanhempie-nsa vastakohta
parents-GEN-POSS.3 opposite.NOM
「彼／彼女（ら）の両親の逆」

j) 限定

- (92) Turu-n kaupunki
Turku-GEN city.NOM
「トゥルクの町」

k) 修辭的表現

- (93) † kive-n murikka
stone-GEN chunk.NOM
「石の塊」

l) 強調

- (94) mies-ten mies
man-PL-GEN man.NOM
「男の中の男」

場所格名詞も名詞を修飾することが可能だが、属格名詞の意味的用法が幅広い分、場所

格名詞の使用は限定的である。被修飾名詞が動詞由来名詞であれば、もとの動詞句の場所格名詞が問題なく名詞句にも引き継がれる。その場合、場所格名詞は、被修飾名詞の前と後ろどちらにも現れることができる(*ISK*: 560)。(95a)は動詞句で、(95b, c)はそれを名詞句にしたものである。

- (95) a. lähte-ä matka-lle
 leave-AINF travel-ALL
 「旅に出発する」
- b. matka-lle lähtö
 travel-ALL leaving.NOM
 「旅への出発」
- c. lähtö matka-lle
 leaving.NOM travel-ALL
 「旅への出発」

被修飾名詞が動詞由来名詞の場合とは異なり、被修飾名詞が具体的な名詞の場合、現代語では場所格名詞による修飾は限られる(Vvks § 29.2)。(96)(97)のような表現はよく目にするが、それらは例外的である。(98)(99)は属格を用いた(a)ではなく、分詞句や属格名詞を用いた(b)の言い方のほうが自然である。

- (96) juna Turu-sta Heklsinki-in
train.NOM Turku-ELA Helsinki-ILL
「トゥルク発ヘルシンキ行きの列車」

- (97) kirja historia-sta
book.NOM history-ELA
「歴史についての本」

- (98) a. ? kahvi kupi-ssa
 coffee.NOM cup-INE
 「カップの中のコーヒー」
- b. kupi-ssa ole-va kahvi
 cup-INE be-ACT.PRES.PART.NOM coffee.NOM
 「カップの中にあるコーヒー」

(Vvks § 29.2)

- (99) a. ? korkeakoulu Vaasa:ssa
 university.NOM Vaasa-INE
 「ヴァーサにある大学」
 b. Vaasa:n korkeakoulu
 Vaasa-GEN university.NOM
 「ヴァーサの大学」

(Vvks § 29.2)

また、前置詞句・後置詞句が名詞を修飾することもある。以下の(100)では、分格名詞を従えた後置詞 *kohtaan* 「~に対して」が、名詞 *kritiikki* 「批判」を修飾している。

- (100) *kritiikki suunnitelma-a kohtaan*
 criticism.NOM plan-PAR toward
 「計画に対する批判」

2.4.5.2 節

節が後続する動詞が名詞化した場合、その節が名詞句に引き継がれる。つまり、節が、動詞由来名詞を修飾することがある。以下の例は、英語の *that* 節に相当する *että* 節((101))と、疑問節((102))である。

- (101) a. 動詞句
ajatel-la, että Pekka on oikea:ssa
 think-AINF that Pekka.NOM be.3SG right-INE
 「ペッカは正しいと考える」
 b. 名詞句
ajatus, että Pekka on oikea:ssa
 thought.NOM that Pekka.NOM be.3SG right-INE
 「ペッカは正しいという考え」
- (102) a. 動詞句
kysy-ä, voi-ko Pekka tul-la
 ask-AINF can.3SG-QP Pekka.NOM come-AINF
 「ペッカが来られるか聞く」

b. 名詞句

kysymys, voi-ko Pekka tul-la
 question.NOM can.3SG-QP Pekka.NOM come-AINF
 「ペッカが来られるかの質問」

関係節は、被修飾名詞に後続し、被修飾名詞の有生性に関わらず、関係詞 **joka** を用いて表す。**joka** は、数・格によって語形変化する。数は先行詞に一致し、格は、関係節内での役割によって変化する。以下にその活用と例文を示す。例文(103a, b)(104a, b)の単文を関係詞 **joka** によって 1 文に繋げたのが、(103c)(104c)である。

表 0-13 関係詞 **joka** の活用

	単数	複数
主格	joka	jo-t-ka
属格	jo-n-ka	jo-i-den
分格	jo-ta	jo-i-ta
様格	jo-na	jo-i-na
変格	jo-ksi	jo-i-ksi
内格	jo-ssa	jo-i-ssa
出格	jo-sta	jo-i-sta
入格	jo-hon	jo-i-hin
所格	jo-lla	jo-i-lla
離格	jo-lta	jo-i-lta
向格	jo-lle	jo-i-lle

(103) a. Soit-i-n ystävä-lle.
 call-PAST-1SG friend-ALL
 「私は友人に電話した。」

b. Hän on kotoisin Turu-sta.
 he/she.NOM be.3SG from Turku-ELA
 「彼／彼女はトゥルク出身である。」

c. Soit-i-n ystävä-lle, joka on kotoisin Turu-sta.
 call-PAST-1SG friend-ALL REL.NOM be.3SG from Turku-ELA
 「私はトゥルク出身の友人に電話した。」

(104) a. Käy-n kaup-a-ssa.

visit-1SG town-INE

「私は町を訪れる。」

b. Pekka on kotoisin tä-stä kaup-a-sta.

Pekka.NOM be.3SG from that-ELA town-ELA

「ペッカはその町の出身である。」

c. Käy-n kaup-a-ssa, jo-sta Pekka on kotoisin.

visit-1SG town-INE REL-ELA Pekka.NOM be.3SG from

「私はペッカが出身の町を訪ねる。」

joka とは別に、疑問詞と同形の関係詞 **mikä** もある。**mikä** の活用を、以下の表 0-14 に示す。

表 0-14 疑問詞・関係詞 **mikä** の活用

主格	mikä
属格	mi-n-kä
分格	mi-tä
様格	mi-nä
変格	mi-ksi
内格	mi-ssä
出格	mi-stä
入格	mi-hin
所格	mi-llä
離格	mi-ltä
向格	mi-lle

(105) En tie-dä, mi-tä tee-n.

NEG.1SG know REL-PAR do-1SG

「私は自分が何をしているのか分からない。」

2.4.5.3 分詞

フィンランド語には、現在分詞、過去分詞、動作主分詞、否定分詞があり、そのうち現在分詞と過去分詞にはそれぞれ能動と受動の形がある¹⁸。各分詞の形態を、**puhua**「話す」

¹⁸ その形態から、能動現在分詞は第 1VA 分詞(1.VA-partisiippi)、受動現在分詞は第 2VA 分詞(2.VA-partisiippi)、能動過去分詞は第 1NUT 分詞(1.NUT-partisiippi)、受動過去分詞は第 2NUT 分詞(2.NUT-partisiippi)と呼ばれることもある。

を例に以下に示す。

表 0-15 分詞

	能動	受動
現在分詞	puhu-va	puhu-ttava
過去分詞	puhu-nut	puhu-ttu
動作主分詞	puhu-ma	
否定分詞	puhu-maton	

現在分詞と過去分詞は実に多様な使われ方をするが、最も典型的な分詞の用法は名詞修飾である¹⁹。

分詞による名詞修飾は、主に書き言葉で使われる²⁰。以下に、否定分詞以外の各分詞に修飾された名詞句(106-111 の a)²¹と、関係詞で修飾された対応する名詞句の例(106-111 の b)を挙げる。

(106) 能動現在分詞

- a. maito-a juo-va poika
milk-PAR drink-ACT.PRES.PART.NOM boy.NOM
「牛乳を飲んでいる少年」
- b. poika, joka juo maito-a
boy.NOM REL.NOM drink.3SG milk-PAR
「牛乳を飲んでいる少年」

(107) 能動過去分詞

- a. maito-a juo-nut poika
milk-PAR drink-ACT.PAST.PART.NOM boy.NOM
「牛乳を飲んだ少年」
- b. poika, joka jo-i maito-a
boy.NOM REL.NOM drink-PAST.3SG milk-PAR
「牛乳を飲んだ少年」

¹⁹ 受動現在分詞に関しては、全用法を 1 章 1.2 節でまとめる。

²⁰ 口語では、関係節を用いた修飾表現のほうが好まれる。ただし、3 章 1 節で後述するような、事象ではなく性質を表す受動現在分詞による名詞修飾は、口語でも普通に用いられる。

²¹ (106)～(111)ではシンプルな例を挙げたが、場所格名詞や副詞も分詞に付随しうる。

(ii) huonee-ssa maito-a juo-va poika
room-INE milk-PAR drink-ACT.PRES.PART.NOM boy.NOM
「部屋で牛乳を飲んでいる少年」

(108) 受動現在分詞

- a. juo-tava maito
drink-PASS.PRES.PART.NOM milk.NOM
「飲まれている牛乳」
- b. maito, jo-ta juo-da-an
milk.NOM REL-PAR drink-PASS-4
「飲まれている牛乳」

(109) 受動過去分詞

- a. juo-tu maito
 drink-PASS.PAST.PART.NOM milk.NOM
 「飲まれた牛乳」
- b. maito, jo-ta juo-t-i-in
 milk.NOM REL-PAR drink-PASS-PAST-4
 「飲まれた牛乳」

(110) 動作主分詞

- a. poja-n juo-ma maito
boy-GEN drink-AGENT.PART.NOM milk.NOM
「少年が飲んでいる／飲んだ牛乳」
- b. maito, jo-ta poika juo / jo-i.
milk.NOM REL-PAR boy.NOM drink.3SG drink-PAST.3SG
「少年が飲んでいる／飲んだ牛乳」

(111) 否定分詞

- a. juo-maton maito
drink-NEG.PART.NOM milk.NOM
「飲まれていない／飲まれなかった牛乳」
- b. maito, jo-ta ei juo-da / ei ole
milk.NOM REL-PAR NEG.3SG drink-PASS NEG.3SG be
juo-tu
drink-PASS.PAST.PART.NOM
「飲まれていない／飲まれなかった牛乳」

これらの分詞は形容詞的に用いられており、分詞は、被修飾名詞と格・数が一致する。

- (112) maito-a juo-ne-i-den poik-i-en (cf. 106a)
 milk-PAR drink-ACT.PAST.PART-PL-GEN boy-PL-GEN
 「牛乳を飲んだ少年達の」

2.4.4 節で言及した通り、フィンランド語の受動は動作主が背景化され表示されない不定人称受動であり、受動分詞に修飾された名詞句でも、動作主が現れることは滅多にない。ただ全く不可能ではなく、動作主が標示される場合は、(113)のように、属格で受動分詞に前置される。

- (113) poja-n juo-tava
 boy-GEN drink-PASS.PRES.PART.NOM
 / juo-tu maito
 drink-PASS.PAST.PART.NOM milk.NOM
 「少年に飲まれている／飲まれた牛乳」

もともと、動作主を明示する場合には、(110a)のように動作主分詞を用いるほうが普通である。動作主分詞句では動作主が必須要素であり、動作主を表わす属格名詞がないと非文になる。

最後に、分詞の元の動詞と被修飾名詞との文法関係について言及する。能動分詞に修飾される名詞は元の動詞の主語に相当し、受動分詞と動作主分詞に修飾される名詞は元の動詞の目的語に相当する。否定分詞に修飾される名詞は、元の動詞の主語と目的語、どちらの解釈も可能である。語彙化していてどちらかに決まる場合を除けば、その解釈は文脈等に依る。

- (114) rakasta-maton mies
 love-NEG.PART.NOM man.NOM
 「愛することのない男性／愛されることのない男性」

以上、本章では、フィンランド語の主に文法全般について、簡潔にまとめた。次章からは、A 不定詞基本形と受動現在分詞について見ていこう。

1 章 背景

本章では、背景知識として、1 節で A 不定詞基本形と受動現在分詞の全用法を、2 節で先行研究を概観する。

1. A 不定詞基本形と受動現在分詞

本論文では A 不定詞基本形と受動現在分詞の修飾用法を扱うが、どちらもそれ以外の用法も持っており、それらも踏まえる必要がある。本節で、*ISK* の記述を基に、それぞれの全用法をまとめる。

1.1 A 不定詞基本形の用法

ISK (:491)では、A 不定詞基本形の主な用法を、表 1-1 の通り 11 種類に分類している。複数の用法の解釈が可能な例や、分類が難しい例もあるが、ここではあくまで *ISK* の分類に従う。

表 1-1 A 不定詞基本形の用法

a	主語 (subjektina)
b	目的語 (objektina)
c	必須文において (nesessiivirakenteessa)
d	他の動詞連続において (muussa verbiketjussa)
e	名詞修飾 (substantiivin määritteenä)
f	形容詞修飾 (adjektiivin määritteenä)
g	動詞修飾 (verbin määritteenä)
h	独立要素 (irrallisena)
i	疑問文の要素 (interrogatiivisena)
j	関係節の要素 (relatiivisena)
k	動詞連合において (verbiliitossa)

(*ISK*: 491 を基に筆者作成¹⁾)

a) 主語

ISK (: 499) による記述をまとめると、A 不定詞基本形は、感情使役構文 (tunnekausatiivilause) や、コピュラ動詞 olla や他の特定のいくつかの自動詞が用いられた文において、文の主語として機能する。(1a)(2)は感情使役構文、(3)は olla が用いられた例、(4)は特定の自動詞が用いられた例である。この時の主語 (A 不定詞句) は、その動詞由来の

¹ 用法の訳は一部坂田(2010)を参考にした。

行為名詞を主名詞とする名詞句と、普通は置き換え可能である ((1b))。フィンランド語の基本語順は SVO だが、現代書き言葉では A 不定詞基本形は文頭には来ない(Vvks § 37.7.1) ため、主語としての A 不定詞句は通常文末に置かれる。

- (1) a. Kansalais-i-a varmasti kiinnosta-isi [näh-dä
citizen-PL-PAR surely interest-COND.3SG see-AINF
Lipponen ja Aho vastakkain]².
Lipponen. ϕ ACC and Aho. ϕ ACC opposite
「リッポネンとアホが向かい合うのを見ることは、国民の興味をひくに違いない。」
- b. Kansalais-i-a varmasti kiinnosta-isi [Lippose-n ja
citizen-PL-PAR surely interest-COND.3SG Lipponen-GEN and
Aho-n näke-minen vastakkain].
Aho-GEN see-VN.NOM opposite
「リッポネンとアホが向かい合うのを見ることは、国民の興味をひくに違いない。」
(ISK 499)

- (2) Margareta-a pelott-i [men-nä ulos], vaikka häne-llä
Margareta-PAR frighten-PAST.3SG go-AINF out though she-ADE
ol-i santarmi seura-na-an.
be-PAST.3SG gendarme.NOM company-ESS-POSS.3
「お供として憲兵がいたが、マルガレタは外出するのを怖がった。」
(ISK 499)

- (3) Minu-lle on vaikea-a [puhu-a itse-stä-ni], ...
I-ALL be.3SG difficult-PAR speak-AINF self-ELA-POSS.1SG
「私にとって、自分のことを話すのは難しい」
(ISK 500)

- (4) Hei-lle riittä-ä [noudatta-a vanha-a kaunis-ta tapa-a].
they-ADE be.enough-3SG follow-AINF old-PAR beautiful-PAR way-PAR
「彼らにとっては、古く優美な方法に則るので十分である。」
(ISK 500)

なお、A 不定詞句内では、包括目的語の格として、n 対格目的語ではなく ϕ 対格が用いられる ((1a)の Lipponen と Aho)。

² 以降、基本的に、A 不定詞句と受動現在分詞句は[]に入れて表す。

olla と共に用いられる主語用法は、形容詞修飾用法と形の上で見分けがつかないことがある。この問題に関しては、本小節の f) 形容詞修飾で簡単に触れるとともに、2 章 3.1 節でも改めて詳しく扱う。

b) 目的語

ISK(495-499)の記述をまとめると、A 不定詞基本形は、antaa「与える」、halua「望む」、pitää+補語「～と見なす」、yrittää「試みる」といった動詞の目的語として機能する。これらの動詞は、目的語として名詞もとる ((5b)) という点で、d)の動詞連続とは異なる。また、この場合、A 不定詞句の包括目的語の格は、n 対格が用いられる。

(5) a. Halua-n [näh-dä se-n].

want-1SG see-AINF it-nACC

「私はそれを見たい。」

b. Halua-n auto-n.

want-1SG car-nACC

「私は車がほしい。」

antaa「与える」、sallia「許可する」、suoda「許す」、luvata「約束する」、käskeä「命令する」といった動詞は、許可構文 (permissiivirakenne) を形成する。許可構文は、目的語としての A 不定詞基本形の前に、不定詞の属格主語をとる。主動詞の主語と不定詞の主語が異なる点で、許可構文は、目的語として働く不定詞句を含む他の文とは違う。動詞 luvata「約束する」は、どちらにも用いられる ((7)のうち、a が許可構文である)。

(6) Isä anto-i [minu-n lähte-ä].

father.NOM give-PAST.3SG I-GEN go-AINF

「父は私を行かせてくれた。」

(7) a. Isä ei luvan-nut [minu-n lähte-ä].

father.NOM NEG.3SG promise-ACT.PAST.PART.NOM I-GEN go-AINF

「父は、私に行かせると約束しなかった。」

b. Isä ei luvan-nut [lähte-ä].

father.NOM NEG.3SG promise-ACT.PAST.PART.NOM go-AINF

「父は、(自分が) 行くと約束しなかった。」

(ISK 498)

c) 必須文において

必須文に関しては、0章2.4.3節で既に述べたので、ここではごく簡単に記述するに留める。必須文では、行為者が属格で表され、*täytyä* や *pitää* といった第一動詞の3人称単数形の後に、A不定詞基本形が続く。また、必須文では、A不定詞句内でn対格目的語ではなくφ対格が用いられる ((8)の *lasku* 「代金」)。

(8) *Minu-n pitä-ä [maksa-a lasku].*

I-GEN must-3SG pay-AINF bill. φ ACC

「私は代金を払わなければならない。」

d) 他の動詞連続において

必須文以外でも、第一動詞がA不定詞基本形を要求する。*ISK*(:494)では第一動詞の例として、*alkaa* 「～し始める」、*ehdiä* 「～する時間がある」、*mahtaa* 「～し得る」、*meinata* 「～するところだ」、*saada* 「～してよい」、*saattaa* 「～できる」、*tahtoa* 「～したい」、*taistaa* 「～するようだ」、*tavata* 「～する習慣だ」、*uhata* 「～する危機にある」、*voida* 「～できる」が挙げられている。この場合、A不定詞句内の包括目的語はn対格である ((9b)の *se* 「それ」)。

(9) a. *Ala-n [opiskel-la japani-a] syksy-llä.*

begin-1SG study-AINF Japanese-PAR fall-ADE

「私は秋に日本語を勉強し始める。」

b. *Voi-n [teh-dä se-n].*

can-1SG do-AINF it-nACC

「私はそれをすることができる。」

e) 名詞修飾

e)の名詞修飾、f)の形容詞修飾、g)の動詞修飾は、本論文で扱う用法である。

主名詞は、動詞由来名詞や動詞に関係する名詞 (*pyrkimys* 「努力」、*tarve* 「必要」、*vaatimus* 「欲求」、*yritys* 「試み」等) か、抽象名詞 (*keino* 「手段」、*tapa* 「方法」、*mahdollisuus* 「可能性」、*tilaisuus* 「機会」、*vapaus* 「自由」、*oikeus* 「権利」、*syy* 「理由」等) である。A不定詞基本形を従える動詞や形容詞が名詞化すれば、その名詞もA不定詞基本形を従える ((10b))。つまり、動詞句・形容詞句と名詞句は並行的である。A不定詞基本形の代わりに、動詞由来名詞・動名詞の到着格 (入格, 向格, 変格) でもよい ((10c))。A不定詞基本形が古くは位格だったことを思い出されたい。

(10) a. 動詞+A 不定詞基本形

halu-ta muuttu-a
want-AINF change-AINF
「変えたい」

b. 名詞+A 不定詞基本形

halu [muuttu-a]
desire.NOM change-AINF
「変えたいという欲求」

c. 名詞+動詞由来名詞（到着格）

halu muutoks-i-iin
desire.NOM change-PL-ILL
「変化への欲求」

(b, c のみ ISK: 584)

ただし、MA 不定詞入格を従える動詞・形容詞に由来する名詞が、MA 不定詞入格ではなく A 不定詞基本形を従えることもしばしばある。

(11) a. 動詞+MA 不定詞入格

innostu-a teke-mä-än työ
be.enthusiastic-AINF do-MAINF-ILL work. ϕ ACC
「仕事をすることに熱中する」

b. 名詞+A 不定詞基本形

innostus [teh-dä työ]
enthusiasm.NOM do-AINF work. ϕ ACC
「仕事をする事への熱中」

(ISK: 502)

なお、A 不定詞句を含む名詞句は、たいてい文末に置かれる。

ISK(: 502)は、以下の(12)のような確立された〈動詞+名詞+A 不定詞基本形〉の場合、名詞と A 不定詞基本形が名詞句を形成しているのではなく、〈動詞+名詞〉というまとまりが、A 不定詞を従える 1 つの述語（以下の例文の下線部分）として機能している、としている。つまり、(13)のような A 不定詞基本形を従える 1 語の動詞 *saada* 「～できる」や *aikoa* 「～するつもりである」等と同様の働きをなしているという。

(12) a. Pää-toimittaja-lla on oikeus [teettä-ä työ-t mu-i-lla].

head-editor-ADE be.3SG right.NOM have.made-AINF work-PLACC other-PL-ADE

「編集長には、仕事を他の人にやってもらう権利がある。」

b. Pää-toimittaja-lla ei ole toivo-a-kaan [saa-da mu-i-ta

head-editor-ADE NEG.3SG be desire-PAR-PC get-AINF other-PL-PAR

teke-mä-än tö-i-tä].

do-MAINF-ILL work-PL-PAR

「編集長には、仕事を他の人にさせる欲求もない。」

c. Pää-toimittaja sa-i kimmokkee-n [teettä-ä työ-t

head-editor.NOM get-PAST.3SG impulse-nACC have.made-AINF work-PL.ACC

mu-i-lla].

other-PL-ADE

「編集長は、仕事を他の人にやってもらいたい衝動を覚えた。」

(ISK: 502)

(13) Pää-toimittaja sa-i / aiko-i [teettä-ä

head-editor.NOM get-PAST.3SG intend-PAST.3SG have.made-AINF

työ-t mu-i-lla].

work-PL.ACC other-PL-ADE

「編集長は、仕事を他の人にやってもらえた。／させるつもりだった。」

(ISK: 502)

このような確立した表現は、主に所有文や存在文に見られるが ((12a, b)), 名詞句が, saada 「得る」, aiheuttaa 「引き起こす」, tuntea 「感じる」等の特定の動詞の目的語のこともある ((12c)). 詳しくは 4 章 2 節で後述する。

続いて、必須文における〈名詞+A 不定詞基本形〉に移る。0 章 2.4.3 節でも少し触れたが、必須文〈属格名詞+täytyy 等の動詞 (3 人称単数) +A 不定詞基本形〉において、täytyy 等の動詞の代わりに、〈on (コピュラ動詞 olla の 3 人称単数) +名詞〉が用いられることがある。つまり、〈属格名詞+on+名詞+A 不定詞基本形〉という構造である。用いられる名詞としては, pakko 「強制」, tarpeen (tarve 「必要」の属格), lupa 「許可」, määrä 「量」, syytä (syy 「理由」の分格), aiheita (aihe 「理由」の分格), aika 「時間」が挙げられている。必須文における syy, aika 等は、特定の「理由」「時間」といった意味を失っている。似た表現に、所有文〈所格名詞+on+名詞+A 不定詞基本形〉がある。

(14) a. 必須文

Ryhmä-n on syy-tä / tarkoitus / mahdollisuus / lupa
group-GEN be.3SG reason-PAR porpose.NOM possibility.NOM permission.NOM
[teh-dä ehdotus].
do-AINF proposal. ϕ ACC
「グループは提案をしなければならない。」

b. 所有文

Ryhmä-llä on syy / tarkoitus / mahdollisuus / lupa
group-ADE be.3SG reason.NOM porpose.NOM possibility.NOM permission.NOM
[teh-dä ehdotus].
do-AINF proposal. ϕ ACC
「グループには、提案をする理由／意図／可能性／許可がある。」

(ISK: 1503)

両者の意味はあまり変わらないが、構造が異なるとされている。必須文では、動詞 olla と名詞が、1つの述語を形成しているという。必須文の〈on＋名詞〉がひとまとまりの述語である証拠の1つとして、否定でも必須文では名詞が分格にならない。

(15) a. 必須文

Virtai-n seiväs-komeeta-n ei ol-lut tarkoitus
Virrat-GEN pole-comet-GEN NEG.3SG be-ACT.PAST.PART.NOM intention.NOM
(*tarkoitus-ta) [hypä-tä kuin pari kerta-a Forssa-ssa].
intention-PAR jump-AINF as pair time-PAR Forssa-INE
「ヴィッラトの棒高跳びの彗星は、フォルッサでは2回くらいしか跳ぶ必要はなかった。」

(ISK: 1503)

b. 所有文

... häne-llä ei ol-lut tarkoitus-ta [osallistu-a sii-hen].
he/she-ADE NEG.3SG be-ACT.PAST.PART.NOM intention-PAR join-AINF it-ILL
「彼／彼女には、それに参加する意図はなかった。」

(ISK: 1504)

さらに、(16)のように所有文の名詞には自由に修飾語を付けられるのに対して、必須文の名詞には不可能であるという。

- (16) Sinu-lla ei ole ainut-ta-kaan hyvä-ä / järjellis-tä / kunno-n syy-tä
 you-ADE NEG.3SG be single-PAR-PC good-PAR rational-PAR order-GEN reason-PAR
 [teh-dä niin].
 do-AINF so
 「あなたには、そうするよい／理性的な／ちゃんとした理由すらない。」
 (ISK: 1504)

f) 形容詞修飾

ISK(503)によると、A 不定詞基本形は、①可能性、②難易、そしてしばしば③知覚による評価を表す補語または補語的副詞類³としての形容詞を修飾することができる。つまり、コピュラ動詞 olla の 3 人称単数形を用いた SVC 文で代表させると、〈主語+on+形容詞+A 不定詞基本形〉という構造である。以下の例文において、(17a)は①、(17b)は②、(17c)は③の例である。

- (17) a. Teos-ta pide-tt-i-in mahdottoma-na [käntä-ä], mutta - - .
 work-PAR consider-PASS-PAST-4 impossible-ESS translate-AINF but
 「作品は訳すのが不可能だとされたが、 ...。」
 (ISK 503)

- b. Tämä väite on vaikea [hyväksy-ä].
 this.NOM claim.NOM be.3SG difficult.NOM accept-AINF
 「この主張は受け入れがたい。」
 (ISK 504)

- c. Kuka-t o-vat kauni-i-ta [katsel-la], mutta myös
 flower-PL.NOM be-3PL beautiful-PL-PAR look-AINF but also
 maukka-i-ta [maistel-la].
 tasty-PL-PAR taste-AINF
 「花は見ても美しいが、味わってもおいしい。」
 (ISK 504)

形容詞が特徴づけている主文の名詞（すなわちたいていの場合主語）は、(17)のように A 不定詞基本形が他動詞の場合は A 不定詞基本形の意味上の目的語に相当する。つまり、こ

³ 例として、以下の(17a)を見られたい。SVOC 文の不定人称受動文で、補語の形容詞が様格である。能動文の動詞句に直すと、以下ようになる。

(i) pitä-ä teos-ta mahdottoma-na [käntä-ä]
 consider-AINF work-PAR impossible-ESS translate-AINF
 「作品を訳すのは難しいとみなす」

のような形容詞修飾用法では A 不定詞句内に目的語が現れない。(18)のように A 不定詞基本形が移動を表す自動詞のこともあるというが、その場合には文の主語は A 不定詞句の場所格項に相当する。(18)の主語 *hyvä ulkoilureitti* 「良い外のルート」は、A 不定詞基本形 *kulkea* の目的語ではなく場所格補部に相当する。

- (18) *Hyvä ulkoilu-reitti on ... turvallinen [kulke-a].*
 good.NOM outside-route.NOM be.3SG safe.NOM go-AINF
 「良い外のルートは行くのが安全だ。」

(ISK 504)

ISK(:504)によると、形容詞修飾の A 不定詞句の意味上の主語の解釈は普通オープンだが、経験者を意味する場所格副詞や属格主語がある場合もある。以下の例ではそれぞれ下線で示した。

- (19) *Minu-lle tämä väite on vaikea [hyväksy-ä].*
 I-ALL this.NOM claim.NOM be.3SG difficult.NOM accept-AINF
 「私には、この主張は受け入れがたい。」

(ISK 504)

- (20) *Pankk-i-en vakuus-vaatimukset ovat Siitari-n mukaan*
 bank-PL-GEN guarantee-demand-PL.NOM be-3PL Siitari-GEN according.to
kohtuuttoma-t [usea-n asunno-n osto-a
 excessive-PL.NOM many-GEN home-GEN purchase-PAR
haaveile-va-n täyttä-ä].
 dream-ACT.PRES.PART-GEN fill-AINF
 「シータリによると、銀行の保証要求は、複数の家の購入を夢見る人が満たすには過剰である。」

(ISK 504)

引き続き ISK(:504 註)によると、以下のような文の A 不定詞基本形は、形容詞修飾としてのみならず、主語としての解釈も可能である。後者の場合、A 不定詞句内の目的語が A 不定詞基本形と離れて文頭に現れていることになる。なお、形容詞修飾でも主語でも、文の意味はあまり変わらない。

(21) Se ol-isi mukava [kuul-la].
 it.NOM/ ϕ ACC be-COND.3SG comfortable.NOM listen-AINF
 「それは聴くのが心地よいだろう。」

(ISK 504)

A 不定詞基本形が形容詞修飾の解釈の場合, se「それ」は主格で, 動詞 olisi の主語である。
 A 不定詞基本形が主語の解釈では, se は ϕ 対格で A 不定詞基本形 kuulla「聞く」の目的語であり, (22)のように書き換えることができる。

(22) Ol-isi mukava [kuul-la se].
 be-COND.3SG comfortable.NOM listen-AINF it. ϕ ACC
 「それを聴くのは心地よいだろう。」

(ISK 504)

以下のように se を複数の ne「それら」に変えると, 動詞と補語も複数である(23)の A 不定詞基本形は形容詞修飾, 動詞と補語が単数である(24)の A 不定詞基本形は主語だと分かる。

(23) Ne ol-isi-vat mukav-i-a [kuul-la].
 they.NOM be-COND-3PL comfortable-PL-PAR listen-AINF
 「それらは聴くのが心地よいだろう。」

(ISK 504)

(24) [Ne] ol-isi mukava [kuul-la].
 they. ϕ ACC be-COND.3SG comfortable.NOM listen-AINF
 「それらを聴くのは心地よいだろう。」

(ISK 504)

また, ISK(:504-505)によると, 先に挙げた形容詞修飾用法で用いられるタイプの形容詞が名詞を修飾している, (25b)のような構造の文もある。

(25) a. Tämä väite on vaikea [hyväksy-ä]. ((17b)再掲)

this.NOM claim.NOM be.3SG difficult.NOM accept-AINF

「この主張は受け入れがたい。」

b. Tämä on vaikea väite [hyväksy-ä].

this.NOM be.3SG difficult.NOM claim.NOM accept-AINF

「これは受け入れがたい主張である。」

(ISK 504)

liian 「あまりに」、sopivan 「ちょうどよく」、tarpeeksi 「十分に」のような程度を表す修飾語があれば、他のタイプの形容詞も可能である。よく用いられる形容詞としては, hyvä 「よい」、sopiva 「ふさわしい」、oikea 「正しい」、väärä 「間違っている」、sopimaton 「ふさわしくない」、liian+形容詞「あまりに～」が挙げられる。

(26) Vuosi on liian lyhyt aika [arvioi-da

year.NOM be.3SG too short.NOM time.NOM value-AINF

uudistu-nee-n järjestö-n vaikuttavuut-ta].

revive-ACT.PAST.PART-GEN organization-GEN effectiveness-PAR

「1 年は、リニューアルした組織の効果を判断するには短すぎる時間だ。」

(ISK 505)

この構造では, paikka 「場所」や時間を表す名詞 (ikä 「歳」、aika 「時間」、ajankohta 「時」、hetki 「瞬間」、päivä 「日」など) が, コピュラ動詞 olla と共起するのが普通である。そして, 形容詞の直後に A 不定詞基本形が来る場合と違って, A 不定詞句内に目的語をとり得る。その場合, n 対格ではなく ϕ 対格が用いられる ((27)の alkoholin käyttö 「飲酒」)。

(27) Mikä on sinu-sta sopiva ikä [aloitta-a

what.NOM be.3SG you.SG-ELA suitable.NOM age.NOM start-AINF

alkoholi-n käyttö]?

alkohol-GEN use.NOM

「あなたの意見では, 飲酒を始めるのにふさわしい年齢はいくつですか?」

(ISK 505)

注意すべきなのは, A 不定詞句を伴う名詞句の統語的制約である。名詞句は, 補語や補語的な場所格補部として現れ, 場所格副詞としては現れない。

(28) * Tapa-si-mme sopiva-na päivä-nä [lähte-ä retke-lle].

meet-PAST-1PL suitable-ESS day-ESS go-AINF trip-ALL

「lit. 私達は小旅行に行くのにふさわしい日に会った。」

(ISK 505)

g) 動詞修飾

A 不定詞基本形には、目的を表す副詞的表現としての、動詞修飾用法もある。ISK(505-506)によると、「目的を意味する A 不定詞句は、特に存在文や所有文で、中心的な存在の動詞 olla, tulla, riittää⁴と共起して、修飾語として現れる。不定詞として用いられるのは、贈与や分配を意味する動詞である。...存在文では、不定詞は存在物の名詞句の前または後ろに来ることができる。...A 不定詞句は、存在文以外においても、目的を表す修飾語として現れる。その場合、たいてい属格主語が不定詞に付随する。この表現タイプの使用の制約は明らかでない」。

(29) a. ...mutta mitään päivämäärä-ä minu-lla ei ole [anta-a].

but anything.PAR date-PAR I-ADE NEG.3SG be give-AINF

「しかし、私にはあげられる日にちはない。」

b.No, on-kos Akseli-lla [myy-dä] kala-a ja lintu-j-a,...

well be.3SG-QP Akseli-ADE sell-AINF fish-PAR and bird-PL-PAR

「えっと、アクセリには売るために魚と鳥があるだろうか,」

(ISK 505)

(30)は、A 不定詞基本形が、贈与や分配以外を意味する。(30b)は所有文だが、(30a)は、属格主語 (kenen tahansa 「誰でも」) が A 不定詞基本形に付随する、存在文・所有文以外の例である。

(30) a. ... yksi Kokos-tehtaa-n ov-i-sta on jäte-tty

one Kokos-factory-GEN door-PL-ELA be.3SG leave-PASS.PAST.PART.NOM

auki [kene-n tahansa kulke-a sisään tai ulos].

open anybody-GEN go-AINF in or out

「ココス工場のドアの1つは、誰でも出入りできるように開けっ放しだ。」

b. Mei-llä ei ole [esittä-ä] tutkimus-tuloks-i-a.

we-ADE NEG.3SG be present-AINF study-result-PL-PAR

「私達には、紹介するような研究結果はない。」

(ISK 506)

⁴ olla 「ある, いる」, tulla 「～になる」, riittää 「充分である」。

A 不定詞基本形の目的を表す副詞的用法は、以前に比べ一般的ではなくなり、(29)のような贈与や分配を表す A 不定詞基本形が用いられた存在文・所有文を除き、今日では、代わりに(31)のように受動現在分詞が用いられる。受動現在分詞の変格と様格は、副詞的要素として用いられる。詳しくは次小節で後述する。

(31) a. Ovi on auki [kene-n tahansa kulje-ttava-ksi] (cf. (29a))

door.NOM be.3SG open anybody-GEN go-PASS.PRES.PART-TRA

「誰でも通れるように、ドアは開いている」

b. Mei-llä ei ole tuloks-i-a [esite-ttävä-nä] (cf. (29b))

we-ADE NEG.3SG be result-PL-PAR present-PASS.PRES.PART-ESS

「私達には紹介するような結果はない」

(ISK: 506)

h) 独立要素

ISK(506)によると、独立要素とは、文に属さない不定詞句であり、定義やリストに用いられる ((32)) 他、修辭的機能や感情的機能を果たし ((33)), また小辞-pA と共に用いられて願望を ((34)), nyt 「今」と共に用いられて不満を表す ((35))。

(32) a. [kanta-a t. kestä-ä jk paino]

carry-AINF or endure-AINF something weight. φ ACC

「何らかの重さを運ぶ, または重さに耐えること」

(ISK: 506)

b. Tutkimukse-n tavoitteen-t: 1. [Selvittä-ä sairaala-n ulkopuolis-ten
research-GEN purpose-PL.NOM 1 clarify-AINF hospital-GEN outside-PL.GEN

sydäme-n-pysähdys-i-en esiintyvyys, syy-t sekä

heart-GEN-stop-PL-GEN incidence. φ ACC reason-PL.ACC and

selviyty-minen ja selviyty-mise-n laatu elvytys-hoido-ssa.]

get.over-VN. φ ACC and get.over-VN-GEN quality. φ ACC revival-care-INE

(lista jatku-u)

list.NOM continue-3SG

「研究目的：病院外での心肺停止の発生と理由, そしてリハビリにおける回復と回復の質を明らかにすること。(リスト続く)」

(ISK: 506)

(33) Elokuva:ssa on jokin kumma lumo.
 movie-INE be.3SG something.NOM odd.NOM enchantment.NOM
 [Saa-da tarina elämä-än ja ihmise-t mukaan].
 get-AINF story. ϕ ACC life-ILL and people-PL.ACC together
 「映画には何か奇妙な魅力がある。物語を生き活きたものにし、人々を引き込む。」
 (ISK 506)

(34) Oih! [Pääs-tä-pä uute-en-Seelanti-in]!
 oh reach-AINF-PC new-ILL-Zealand-ILL
 「ああ！ニュージーランドに着きたいなあ！」
 (ISK 506)

(35) [Jättä-ä nyt lapsi yksin koti-in]!
 leave-AINF now child. ϕ ACC alone home-ILL
 「子どもを家に一人に残すなんて！」
 (ISK 491)

(32)(33)(35)の例からも分かる通り，これらの場合も，A 不定詞句内では n 対格の代わりに ϕ 対格が用いられる。

i) 疑問文の要素⁵

A 不定詞は疑問文において，疑問詞に後続して，または A 不定詞自体に疑問接尾辞が付加して出現する。

(36) En tien-nyt [mi-tä teh-dä].
 NEG.1SG know-ACT.PAST.PART.NOM what-PAR do-AINF
 「私は何をすべきか分からなかった。」
 (ISK 491)

(37) (スキー協会が新しい会長を探している)
 [Vali-ta-ko vieras vai oma pitkä-n linja-n mies] ?
 choose-AINF-QP stranger. ϕ ACC or own. ϕ ACC long-GEN line-GEN man. ϕ ACC
 「外部の人か，それとも自分達の長期路線の男性を選ぶべきか？」
 (ISK 507)

⁵ 坂田(2010)は，文法機能の観点から A 不定詞基本形を分類し直しており，(36)のような間接疑問は「目的語」に，(37)のような直接疑問は「独立要素」に分けて分類している。

疑問文における A 不定詞句は総称的で、義務や必要性を含意する(*ISK* 1507)。また、(37)の例からも分かる通り、A 不定詞句内では n 対格ではなく ϕ 対格が用いられる。

j) 関係節の要素

A 不定詞基本形は、関係節内にも現れる。*ISK*は「関係節の要素」として分類項目を立てているが、「関係節の不定詞句は名詞の修飾語として機能する」とも述べている。ただし、A 不定詞句が単独で名詞を修飾している訳ではなく、正確には、A 不定詞句を含む関係節が名詞を修飾している。このため、このような A 不定詞基本形は本論文の研究対象に含めない。また、この場合、先ほどの疑問文の要素と同じく、義務や可能といったモーダル的意味を表す(*ISK* 1507)。

(38) Tarvitse-n jonkun jo-ta [hemmotel-la].

need-1SG somebody.nACC REL-PAR spoil-AINF

「私は誰か甘やかすことのできる人が必要だ。」

(*ISK* 491)

存在文や所有文では、先行詞がない関係節が現れる⁶。関係節が、存在物や所有物に相当する。

(39) Mutta minä ole-n synty-nyt

Atlanta-ssa, minu-lla

but I.NOM be-1SG be.born-ACT.PAST.PART.NOM Atlanta-INE I-ADE

ei ole mi-hin [men-nä].

NEG.3SG be REL-ILL go-AINF

「しかし私はアトランタで生まれた、私には行くべきところがない。」

(*ISK* 507)

なお、関係節内の A 不定詞句においても、n 対格ではなく ϕ 対格が用いられる。

k) 動詞連合において

動詞連合(verbiliitto)は、*ISK*(: 443)によると、「助動詞と主動詞からなる固定的な構造で、文において単純な述語動詞のように機能する」。動詞連合の主動詞には不定詞や分詞の様々な形が用いられるが、A 不定詞基本形が用いられるのは、コピュラ動詞 olla との結びつきである。この構造は、事象が起ころうだというアスペクト的な意味を持つ。

⁶ 坂田(2010)は、このような存在文・所有文における関係節の要素の A 不定詞基本形の文法機能を主語と認定し、他の関係節の要素と分けている。

(40) ... briti-t o-vat [saa-da sydän-kohtaukse-n].

British-PL.NOM be-3PL get-AINF heart-attack-nACC

「イギリス人たちは心臓発作を起こしそうだ。」

(ISK 1148)

(40)からも分かるように、A 不定詞句内の包括目的語として n 対格が用いられる。

1.2 受動現在分詞の用法

次に、受動現在分詞の用法について見ていく。まず受動現在分詞全般として、義務、可能、勧奨といったモダリティの意味を有することが多い⁷ということ述べる必要がある。この点において、受動現在分詞は、能動現在分詞とヴォイスにおいて、受動過去分詞とテンス・アスペクトにおいて異なるだけではない。

(41) a. 義務

[makse-ttava] lasku

pay-PASS.PRES.PART.NOM bill.NOM

「支払うべき勘定」

b. 可能

[syö-tävä] sienii

eat-PASS.PRES.PART.NOM mushroom.NOM

「食べることができるキノコ、食用のキノコ」

c. 推奨

[lämpimä-nä syö-tävä] ruoka

warm-ESS eat-PASS.PRES.PART.NOM food.NOM

「温めて食べるのがよい料理」

ISK は、A 不定詞基本形のように項目を立てて受動現在分詞の用法を記述してはいないが、本論文執筆者は ISK の記述を参考に主な用法を以下のようにまとめた：a) 名詞修飾、b) 名詞として、c) 叙述、d) 様格・変格での副詞的用法、e) 形容詞修飾、f) 分詞構文において、g) 可能構文において、h) 必須文において。この中には、他の分詞と共通の用法もあれば、受動現在分詞に特有の用法もある。

a) 名詞修飾

受動現在分詞に限らず分詞は「名詞類の活用をする、形容詞に特徴的な機能を果たす不定形」(ISK 515)であり、分詞の用法の中で最も典型的なのは上の(41)のような名詞修飾であ

⁷ 通言語的に、非過去の受動分詞はモダリティの意味を持つ傾向がある(Haspelmath 1994: 156)。

る。しかし、その用法の概要については 0 章で既に述べ、さらに 3 章 1 節で詳しく論じるので、ここでは省略する。

b) 名詞として

ISK(: 526-527)にあるように、分詞が名詞として用いられることもあり、「～される（べき）ヒト、モノ」を意味する。(42)の[]内の *hoidettava* は、*hoitaa* 「世話する」という動詞の受動現在分詞で、ここでは「世話される人」という名詞として機能している。a)の名詞修飾用法の *hoidettava ihminen* 「世話される人」の主名詞 *ihminen* 「人」が省略され、受動現在分詞だけで名詞として用いられていると考えることができる。

(42) Raportti-n mukaan omaishoito on kunna-lle edullis-ta,
report-GEN according.to administration.NOM be.3SG local.authority-ALL advantageous-PAR
hoitaja-lle vaiva-n-arvois-ta ja [hoide-ttava-lle] sopiva-a.
carer-ALL trouble-GEN-worth-PAR and care-PASS.PRES.PART.NOM-ALL convenient-PAR
「報告書によると、財産管理は、地方行政にとっては有益であり、世話する人にとっては面倒であり、世話を受ける人にとっては都合がいい。」

(ISK: 526)

(43)のように語彙化している名詞もある。

(43) juo-tava 「飲み物」 < juoda 「飲む」, syö-tävä 「食べ物」 < syödä 「食べる」
teh-tävä 「仕事」 < tehdä 「する」, sano-ttava 「言うべきこと」 < sanoa 「言う」

c) 叙述

分詞に、名詞修飾用法だけでなく、叙述用法がある点も、普通の形容詞と同じである。

(44) Tämä lasku on [makse-ttava]. (cf. (41a))
this.NOM bill.NOM be.3SG pay-PASS.PRES.PART.NOM
「この勘定は支払うべきだ。」

d) 変格・様格での副詞的用法

分詞は、叙述副詞類(*predikatiiviadverbiaali*)としても働く。ISK(: 527)によると、受動現在分詞変格は、とりわけ所有文、存在文、*riittää* 「十分である」、*jääda* 「残る」、*joutaa* 「ふさわしい」、*kelvata* 「十分よい」といった動詞と共に、また他動詞文において、広い意味での目的を表す。しばしば、(45c)*hyttys-ten* 「蚊-複数属格」のように、受動現在分詞の属格主語やそれに対応する所有接尾辞が分詞句内にある。

- (45) a. Mu-lla ei ole viisas-ten kive-ä [Jyväskylä-än vie-tävä-ksi].
 I-ADE NEG.3SG be wise-PL.GEN stone-PAR Jyväskylä-ILL bring-PASS.PRES.PART-TRA
 「私には、ユヴァスキュラに持っていく賢者の石がない。」
- b. Mikä ministeriö jouta-a [lakkaute-ttava-ksi]?
 what.NOM ministry.NOM be.fit-3SG suppress-PASS.PRES.PART-TRA
 「どの省が、廃止されるのに適しているだろうか？」
- c. Kaikki suomalaise-t ei-vät edes halua maa-lle [hyttys-ten
 all Finnish-PL.NOM NEG-3PL even want countryside-ALL mosquito-PL.GEN
 syö-täv-i-ksi].
 eat-PASS.PRES.PART-PL-TRA
 「全フィンランド人は、蚊に食われに田舎へ行きたくはない。」

(ISK: 527)

上の例で、(45a)の所有文では所有物 (viisasten kiveä 「賢者の石」), 自動詞文(45b, c)は主語 (mikä ministeriö 「どの省」, kaikki suomalaiset 「全フィンランド人」) が、受動現在分詞の
 もとの動詞の目的語に相当する。

また、主動詞が節をとる場合に、目的語と現在分詞の変格が分詞構文のような働きがで
 き、受動現在分詞も可能である。分詞構文に関しては、f)で後述する。

- (46) Kaupa-n Keskus-liitto halua-a vähittäis-kaupa-n auki-olo-säännöксе-t
 shop-GEN central-union.NOM want-3SG retail-shop-GEN open-condition-rule-PL.ACC
 pure-ttav-i-ksi laki-muutokse-lla
 break-PASS.PRES.PART-PL-TRA law-change-ADE
 「中央商工会は、小売商店の開店時間規則が、法改正でなくなることを欲している。」
- (ISK: 528)

これまでは受動現在分詞変格について述べたが、受動現在分詞様格は、所有文におい
 て、所有物に関する義務や可能性を表す。その受動現在分詞には、所有者に対応する所有
 接尾辞が付く ((47)の例では、3 人称の所有接尾辞-än)。この場合、所有文の所有物が、受
 動現在分詞のもとの動詞の目的語に相当する ((47)の例では tulipaloja 「火事」)。

- (47) Poliisi-lla on [selvite-ttävä-nä-än] use-i-ta-kin
 police-ADE be.3SG clear-PASS.PRES.PART-ESS-POSS.3 several-PL-PAR-PC
 salaperäis-i-ksi jää-ne-i-tä tulipalo-j-a.
 mysterious-PL-TRA stay-ACT.PAST.PART-PL-PAR fire-PL-PAR
 「警察には、解明すべきものとして、いくつかの謎のままの火事の案件がある。」
 (ISK: 527)

e) 形容詞修飾

ISK(:542-543)によると、受動現在分詞変格は、いくつかの形容詞とともに用いられうるが、その場合、A 不定詞基本形とほぼ同じように用いられる。形容詞の例として *valmis* 「準備ができて」、*sopiva* 「ふさわしい」、*kelvoton* 「ふさわしくない」、*halukas* 「前向きな」、*mahdoton* 「不可能な」が、また形容詞とともに用いられる副詞の例として *liian* 「あまりに」、*tarpeeksi* 「十分に」、*sopivan* 「ふさわしく」等が挙げられている。

- (48) a. Meri-tuomari-n siika-keitto on valmis [nauti-ttava-ksi].
 sea-judge-GEN whitefish-soup.NOM be.3SG ready.NOM eat-PASS.PRES.PART-TRA
 「海の判事のホワイトフィッシュスープは味わう準備ができています。」
 b. Hollo-n alue ol-isi varmasti tarpeeksi kaunis
 Hollo-GEN area.NOM be-COND.3SG surely enough beautiful.NOM
 [suojel-tava-ksi]
 protect-PASS.PRES.PART-TRA
 「ホッロのあたりは確かに保護するのに十分美しいだろう。」
 (ISK: 542)

これらの文の主語は、受動現在分詞のものの動詞の目的語に相当する。(48a)を例にとると、文の主語である *merituomarin siikakeitto* 「海の判事のホワイトフィッシュスープ」が、受動現在分詞変格 *nautittavaksi* のものの動詞 *nauttia* 「味わう」の目的語に相当する。

f) 分詞構文において

能動分詞と受動分詞は、分詞構文 (*referatiivirakenne* / *partisiippirakenne*) に用いられる。分詞構文全般については、ISK(: 531-536)で扱われている。分詞構文では、英語の *that* 節に相当する *että* 節の代わりに、分詞の属格が用いられる。*että* 節の時制が主節より過去であれば過去分詞が、それ以外であれば現在分詞が用いられる。そして、能動文の従属節に意味的に対応するのであれば能動分詞が、不定人称受動文の従属節に対応するのであれば受動分詞が用いられる。つまり、*että* 節の時制が主節より過去でなく、不定人称受動文の従属節と対応する場合に、受動現在分詞が用いられる。(49a)は分詞構文、(49b)は意味的に対

応する *että* 節を用いた表現である。

- (49) a. Briti-t epäile-vät [Diana-a kohdel-tava-n huonosti
British-PL.NOM suspect-3PL Diana-PAR treat-PASS.PRES.PART-GEN badly
avioero-ssa].
divorce-INE
「イギリス人は、ダイアナが離婚おいてひどく扱われていると疑っている。」
(ISK: 533)
- b. Briti-t epäile-vät, että Diana-a kohdel-la-an huonosti avioero-ssa.
British-PL.NOM suspect-3PL that Diana-PAR treat-PASS-4 badly divorce-INE
「イギリス人は、ダイアナが離婚おいてひどく扱われていると疑っている。」

g) 可能構文において

可能構文(*mahdollisuusrakenne*)と呼ばれる, 受動現在分詞を用いた動詞連合もある⁸。〈主語+olla+受動現在分詞複数内格〉という形式であり, 主語が単数であっても, 受動現在分詞は必ず複数になる⁹。可能構文は行為者の能力や状況による可能性を表す。文の主語は受動現在分詞のものの動詞の目的語に相当する。*ISK*(: 1505)によると, 主語は多くの場合無生物だというのが, (50c)のようにヒトが主語の例も散見される。また, 可能構文はどんな他動詞の受動現在分詞からもほぼ作ることができるという。

- (50) a. Ovi on [korja-ttav-i-ssa].
door.NOM be.3SG repair-PASS.PRES.PART-PL-INE
「ドアは修理できる。」
- b. Asia-t o-vat [hoide-ttav-i-ssa].
matter-PL.NOM be-3PL care-PASS.PRES.PART-PL-INE
「事態は対処できる。」
- c. Minä en ole [paranne-ttav-i-ssa].
I.NOM NEG.1SG be improve-PASS.PRES.PART-PL-INE
「私はよりよくなれない。」
(ISK: 1505)

可能構文は, *voida* 「～できる」を用いた不定人称受動文と意味的に対応する。

⁸ 可能構文の文法化については, Pekkariinen(1997)を参照のこと。

⁹ 他の分詞を用いた動詞連合でも, 主語の数に関わらず分詞が必ず複数形のもの (〈olla+能動現在分詞複数内格〉「～しそうだ, ～しうる」, 〈olla+否定分詞複数内格〉「～できない」) がある。

(51) Ovi voi-da-an korja-ta. (cf. (50a))

door. φ ACC can-PASS-4 repair-AINF

「ドアは修理できる。」

(ISK: 1505)

また、受動現在分詞が表す行為の行為者を、分詞句内の属格主語で表すこともできる。

(52) Ovi on [talo-yhtiö-n korja-ttav-i-ssa]. (cf. (50a))

door.NOM be.3SG house-company-GEN repair-PASS.PRES.PART-PL-INE

「ドアは管理会社が直せる。」

(ISK: 1505)

h) 必須文において

受動現在分詞は、必須文的動詞連合(nesesiivinen verbiliitto)としても用いられる(ISK: 1502)。0章 2.4.3 節で触れた必須文と同様、行為者が属格で表され、動詞（ここではコピーラ動詞 olla）は常に 3 人称単数形である。〈属格名詞+on+受動現在分詞単数主格〉という形である。(53a)が受動現在分詞を用いた必須文的動詞連合、(53b)が通常の必須文である。

(53) a. Minu-n on [hanki-ttava] viisumi.

I-GEN be.3SG get-PASS.PRES.PART.NOM visa. φ ACC

「私はビザを取得しなければならない。」

b. Minu-n täyty-y hankki-a viisumi.

I-GEN must-3SG get-AINF visa. φ ACC

「私はビザを取得しなければならない。」

この受動現在分詞の用法には、他の用法と違う、着目すべき点がある。これまで見てきた他の用法では、受動現在分詞のもとの動詞の目的語に相当する語が、被修飾語として、または主文の要素として現れていた。しかし、この必須文的動詞連合においては、主文の名詞に受動現在分詞の目的語に相当する語が存在しない。主文の属格名詞は、受動現在分詞のもとの動詞の主語に相当する。そのため、必須文的動詞連合は、(54)のように自動詞の受動現在分詞からも難なく作る事ができる。これは「受動」現在分詞ということを考えると、奇妙な事象に感じられる。

(54) Minu-n on [nuku-ttava].

I-GEN be.3SG sleep-PASS.PRES.PART.NOM

「私は寝なくてははいけない。」

そして受動現在分詞が他動詞由来の場合には、分詞句内に受動現在分詞の目的語が現れることができる。その場合、通常の必須文と同様、包括目的語として ϕ 対格が用いられる((53a)の例では viisumi 「ビザ」)。この一見奇妙な事象について、Pekkarinen(2011: 196-199)では以下のように説明されている。受動現在分詞を用いた必須文の初出は 1700 年代末で、その発達は早く、1800 年代末までには書きことばでよく用いられるようになった。もともとは、叙述文から発生した形式である。始めは叙述文と同じく、必須文では他動詞由来の受動現在分詞だけが使われていた。叙述文の主語は、意味的に、補語である受動現在分詞の目的語に相当する。主語であったその名詞句が受動現在分詞の後に来るようになり、文の構造としても受動現在分詞句の目的語としてみなされるようになった。そして文法化した現在では、自動詞由来の受動現在分詞も、必須文に用いられるようになった。この変化をモデル化すると、(55)a \rightarrow b \rightarrow c のようになる。

- (55) a. 叙述文 〈NP1- ϕ + on (+NP2-属格) + 他動詞由来受動現在分詞〉
 b. 当初の必須文 〈NP2-属格 + on + 他動詞由来受動現在分詞 + NP1- ϕ 〉
 c. 現在の必須文 〈NP2-属格 + on + 受動現在分詞 (+NP1- ϕ)〉

なお、前小節で見た A 不定詞基本形の用法の中にも「c) 必須文において」という同じ名前の項目があるが、A 不定詞基本形の場合には täytyy 「～しなければならない」といった義務の意味を持つ動詞に後続するのに対し、受動現在分詞の場合はそれ自体が義務の意味を有している点が違うということに留意されたい。

2. 先行研究

この節では、文法書も含めた先行研究をまとめる。はじめの 2.1～2.3 節は、文法書である。すでに本章 1 節で、A 不定詞基本形と受動現在分詞の用法について、ISK を基にまとめている。他の 2 冊に関しては、A 不定詞基本形について、ISK に書かれていない点を中心にまとめる。受動現在分詞に関しては、2 冊に特筆すべき記述がないため、割愛する。

2.1 Penttilä (1963)

Penttilä(1963)による文法書 *Suomen kielioppi* (『フィンランド語文法』1963: 481-491)では、A 不定詞基本形を 21 の構文に分類している。Penttilä は、あくまで A 不定詞基本形が用いられる構文を記述しているだけで、用法のラベル付けはしていない。このうち、名詞修飾・動詞修飾用法と関連するのは五つ(Penttilä の番号では 6, 7, 8, 17, 19)であり、豊富な例を挙げている。形容詞修飾用法は、15 番目と 16 番目の項目で扱われている¹⁰。

¹⁰ 坂田(2010)では、以下のような Penttilä(1963)の 14 番目の項目も形容詞修飾用法に含めている。だが、A 不定詞基本形が他動詞の場合、その目的語に相当する語が主文の主語としてではなく A 不定詞句内に現れるという点で、15, 16 番目の項目と性質が異なる。本論文では、主語用法とみなす。

Penttilä の 6 番目の項目(Penttilä 1963: 484-485)は、〈動詞 on+主名詞（主格／分格）+A 不定詞基本形〉であり、副詞的不定詞(adverb.inf)という語が用いられている。on ではなく、頻度は低いが、jäädä「残る」、kehittyä「発達する」、riittää「充分である」、saada「与える」、syntyä「生まれる」、tulla「来る」といった他の自動詞が用いられることもある。A 不定詞基本形は、目的を表す。(56b)のように、A 不定詞基本形の主語を表す属格名詞があることもある。

- (56) a. † On-han nii-tä kentt-i-ä [kuokki-a]
 be.3SG-PC those-PAR field-PL-PAR hoe-AINF
 「鋤を入れるためにそれらの土地がある」
 b. † On-han nii-tä kentt-i-ä [meidä-n kuokki-a]
 be.3SG-PC those-PAR field-PL-PAR we-GEN hoe-AINF
 「私達が鋤を入れるためにそれらの土地がある」

(Penttilä 1963: 484¹¹)

当該の構造には、〈所格名詞+on+主名詞+A 不定詞基本形〉のタイプも含まれる。そこで挙げられている例はいずれも、ISK で動詞修飾だとされている、A 不定詞基本形が贈与や分配を意味する動詞である。

- (57) On-ko sinu-lla veis-tä [laina-ta]?
 be.3SG-QP you.SG-ADE knife-PAR lend-AINF
 「あなたは貸すためにナイフを持っているか？」

(Penttilä 1963: 484)

これらの構文の A 不定詞基本形は意味的に受動、つまり主名詞は A 不定詞基本形の目的語に相当する。しかし、同じ構造でも A 不定詞基本形が意味的に受動でないものもあるとして、多くの例文を挙げている。以下に一部を引用する。Penttilä はしかしながら、これらの例における主名詞の A 不定詞基本形に対する意味・文法関係について述べてはいない。

- (58) a. † Minu-lla on huone-i-ta [sinu-n-kin asustel-la]
 I-ADE be.3SG room-PL-PAR you.SG-GEN-PC live-AINF
 「私には、あなたも住むための部屋がある」

(ii) Minu-n on tärkeä-tä [lähte-ä].
 I-GEN be.3SG important-PAR go-AINF
 「私は行くのが重要だ。」

(Penttilä 1963: 488)

¹¹ † の付加は、本論文執筆者による。以下同様。

- b. † Siinä on tuoli / tuoli-a [istu-a]
 there be.3SG chair.NOM chair-PAR sit-AINF
 「そこに、座るための椅子がある」
- c. † Mei-llä on hyvä ranta [las-ten ui-da].
 we-ADE be.3SG good.NOM shore.NOM child-PL.GEN swim-AINF
 「私達には、子ども達が遊ぶのにいい岸がある。」
- d. † Jo-lla on korva-t [kuul-la], hän kuul-koon
 who-ADE be.3SG ear-PL.NOM listen-AINF he/she.NOM listen-IMP
 「聞く耳のある者は聞きなさい」
- e. Minu-lla on aikomus [lähte-ä tänään]
 I-ADE be.3SG intention.NOM leave-AINF today
 「私は今日行くつもりだ」
- f. Minu-lla on kova halu [jää-dä pois koko tilaisuude-sta]
 I-ADE be.3SG hard.NOM desire.NOM stay-AINF away whole opportunity-ELA
 「私には、全ての機会から離れたたいという激しい欲求がある」
- g. Mei-llä on oikeus / lupa metsästä-ä
 we-ADE be.3SG right.NOM permission.NOM hunt-AINF
 「私達には狩りをする権利／許可がある」

(Penttilä 1963: 485)

この6番目の項目には、非常に雑多な例が多く含まれている。さらには、Penttilä(1963)は半世紀以上も前の記述文法書であるため、今日では容認度の非常に低い例文もある。(58a-d)は、主名詞が、A不定詞基本形と意味的に「動詞一場所格補部」の関係に相当する。例えば(58a)であれば、主名詞 *huoneita* 「部屋」は、A不定詞基本形 *asustella* の内格補部に相当する。(58b)であれば、主名詞 *tuoli* / *tuoli-a* 「椅子」は、A不定詞基本形 *istua* 「座る」の内格補部、所格補部または入格補部に相当する。(58c)は、主名詞 *hyvä ranta* 「いい岸」は、A不定詞基本形 *uida* の所格補部に相当する。だが、これらの例文に関して、少なくとも現在では母語話者の容認度は非常に低い。(58d)は、所有文の所有物である主名詞の身体部位が、A不定詞基本形の場所格補部でもなく、手段・道具を表わす場所格副詞に相当する。動詞句に直せば、所格や具格を用いて表わされるだろう。他には、*silmät katsoa* 「見る目」といった例も挙げられていた。ただし、(58d)も、母語話者によると「フィンランド語として不自然」「詩的な言い方」とのことで、一般的には使われないという。(58d)は新約聖書の一文で、もとのギリシャ語 *Ὁ ἔχων ὦτα ἀκούειν ἀκούτω*。「聞く耳のある者は聞きなさい。」の直訳の可能性はある。(58d)の例文が何年にフィンランド語に翻訳された聖書からの引用かまでは、Penttilä(1963)に記載がなかったが、1992年に翻訳された聖書では、以下の(59)のように、A不定詞基本形が消え、単に「耳のある者は聞きなさい」と訳されている。

(59) Jo-lla on korva-t, se kuul-koon. (cf. (58d))

who-ADE be.3SG ear-PL.NOM it.NOM listen-IMP

「耳のある者は聞きなさい。」

(*Raamattu* 2009: Evankeliumi Luukkaan mukaan 8:8¹²)

また、6 番目の項目の中には、(58e-g)のように目的の意味が弱いものもあり、それらは、A 不定詞基本形の副詞性も弱いという。(58e-g)などは、明らかに他の先行研究では名詞修飾用法に含まれる。Penttilä の分類であれば、むしろ後述の 19 番目の項目に含めるほうが妥当であると思われる。

7 番目の項目(Penttilä 1963: 485-486)は、A 不定詞基本形が *asti* 「～まで」とともに用いられ、全体として目的に近い意味を表すとされているが、記述は非常に乏しい。

(60) ... nii-tä ol-i-kin [vetä-ä] asti.

they-PAR be-PAST.3SG-PC pull-AINF till

「それらも引っ張るためのものだった。」

(Penttilä 1963: 486)

8 番目の項目(Penttilä 1963: 486)は、他動詞文において、属格主語を伴う A 不定詞句が目的を表すタイプである。ただしこの項目に関しては、本章 1 節で既述のように、現代フィンランド語では一般的でない (*ISK*: 506)。

(61) † Isä to-i omeno-i-ta [las-ten syö-dä]

father.NOM bring-PAST.3SG apple-PL-PAR child-PL.GEN eat-AINF

「お父さんは、子ども達が食べるためにりんごを持ってきた」

(Penttilä 1963: 486)

17 番目の項目は、必須文的な〈(属格名詞+) on+名詞+A 不定詞基本形〉である。

(62) On pakko [ajatel-la hiukan tulevaisuut-ta-kin]

be.3SG compulsion.NOM think-AINF slightly future-PAR-PC

「私は将来についても少し考えなければいけない」

(Penttilä 1963: 489)

19 番目の項目(Penttilä 1963: 490)は、6 番目の項目と似ているが、より名詞修飾の度合いが明らかであるという。主名詞としては、到着格を許可または要求するものが最も自然である。

¹² ルカによる福音書 8 章 8 節

それらは、機会、可能性、能力、欲求、意図、努力、命令、許可、権利、義務、方法等を意味し、しばしば動詞由来名詞である。

- (63) a. Aikomukse-ni [matkusta-a maa-lle] rauke-si
intention-POSS.1SG travel-AINF countryside-ALL weaken-PAST.3SG
「田舎に旅行するという私の意志は弱まった」
- b. Maisteri A esitelmöi menetelmä-stä-än [ennusta-a ukonilma-t
Master A.NOM lecture.3SG method-ELA-POSS.3 predict-AINF thunderstorm-PL.ACC
etukäteen]
beforehand
「A 先生は、雷雨を予め予測する彼の方法について授業を行っている」
- (Penttilä 1963: 490)

15 番目と 16 番目の項目(Penttilä 1963: 488-489)は形容詞修飾用法である。15 番目は〈主語＋olla＋形容詞＋A 不定詞基本形〉、16 番目は〈主語＋olla＋形容詞＋名詞＋A 不定詞基本形〉である。ISK には記載がないような特筆すべき記述はない。本論文 5 章で問題とする、主語名詞が A 不定詞基本形の目的語に相当しない例も多く挙げられているが、説明はなされていない。

2.2 Hakulinen & Karlsson (1979)

Hakulinen & Karlsson による文法書 *Nykusuomen lauseoppia* (『現代フィンランド語統語』1979)では、名詞句の構造の項目(:123-124)と、名詞句の一部としての不定詞の構造の項目(:378-380)の二箇所で、A 不定詞基本形の名詞修飾・動詞修飾について扱っている。

- (64) Vihdoin minu-lla on mahdollisuus [ojenta-a tei-lle tämä marjakko].
at.last I-ADE be.3SG possibility.NOM hand-AINF you.PL-ALL this. ϕ ACC base. ϕ ACC
「ついに私には、あなた達にこの花瓶を手渡すチャンスがある。」
- (Hakulinen & Karlsson 1979: 378)

Hakulinen & Karlsson は、(65)のような Penttilä(1963)の 8 番目の項目に当たる文の A 不定詞句を、表層構造では名詞修飾のようだが、名詞句の一部なのかそれとも目的を表す独立した副詞的表現なのか解釈が難しく不明瞭だと述べている。

(65) † On-han nii-tä kentt-i-ä [meidä-n kuokki-a]. ((56b)と同文)

be.3SG-PC those-PAR field-PL-PAR we-GEN hoe-AINF

「私達が鋤を入れるためにそれらの土地がある。」

(Hakulinen & Karlsson 1979: 379)

上の(64)のような例とこの(65)のような例の構造的な違いを表すために、Hakulinen & Karlsson は主名詞を代名詞化している。前者は代名詞化できないが、後者は可能である。

(66) * Vihdoin minu-lla on se [ojenta-a tei-lle tämä marjakko]. (cf. (64))

at.last I-ADE be.3SG it.NOM hand-AINF you.PL-ALL this. ϕ ACC base. ϕ ACC

「lit. ついに私には、あなた達にこの花瓶を手渡すそれがある。」

(Hakulinen & Karlsson 1979: 379)

(67) † On-han nii-tä [meidä-n kuokki-a]. (cf. (65))

be.3SG-PC they-PAR we-GEN hoe-AINF

「私達が鋤を入れるためにこれらがある。」

(Hakulinen & Karlsson 1979: 379)

さらに、後者のタイプでは A 不定詞基本形の意味上の主語がたいてい表層に現れるのに対し、前者のタイプでは決して現れないという違いから、後者のタイプは、目的を表す独立した副詞類として働く節から派生していると結論づけている。

2.3 ISK (2004)

これまでもしばしば引用してきた *ISK* (*Iso suomen kielioppi*『大フィンランド語文法』)は、フィンランド語最大の参照文法書である。1 節で既述した通り、*ISK* は A 不定詞基本形の用法を 11 種類に分類している。うち、名詞修飾・動詞修飾・形容詞修飾は、§ 506-511(: 501-506)と § 593(: 584-585)で扱われている。受動現在分詞に関しては、他の分詞とともに主に § 521-536(: 515-530)で扱われている。内容に関しては、本章 1 節を参照のこと。

2.4 Vvks

Vvks(Virtuaalinen vanha kirjasuomi, Virtual Studies in Old Literary Finnish)は、ウェブ上で公開されている、1500 年代以降のフィンランド語についての通時的記述である。§ 37.2 で A 不定詞基本形（当時は能動 A 不定詞位格¹³）が扱われており、§ 37.2.3 が修飾用法である。加えて、§ 39.2.3「必須文に近い構文」でも、〈名詞+A 不定詞基本形〉が扱われている。受動

¹³ 当時は、受動の形も存在した。使用頻度は低く、主に、スウェーデン語などのゲルマン語の受動の不定詞に対応するものとして用いられていたという。

現在分詞は § 38 で、他の分詞とともに扱われている。

1600 年代の A 不定詞基本形のコーパスデータ 994 例のうち、名詞修飾用法は 50 例である。うち、大多数の 45 例が、主名詞が所有文・存在文の所有物・存在物であり、残り 5 例が文の主語か目的語である。主名詞の内訳は、syy「理由」20 例、halu「欲求」7 例、voima「力」5 例、hetki「瞬間」4 例、tahto「意志」3 例、tila「機会」3 例、lupa「許可」、oikeus「権利」、valta「権力」各 1 例である。ここでも、名詞修飾用法か副詞的用法（＝動詞修飾用法）か解釈が 2 通りある例が指摘されている。

必須文的表現として用いられる〈on＋名詞／形容詞＋A 不定詞基本形〉は、1600 年代のデータでは現代標準語に比べて出現頻度が 10 分の 1 程度で、特に〈on＋名詞＋A 不定詞基本形〉は、数えられるほどしか使われていないという。1600 年代では、語彙的な限られた表現で（名詞の多くは tapa「方法」）、名詞は必ず主格であった。現代では、数十種類の名詞が、主格、分格、様格で現れる。つまりこの表現は、1600 年代にはかなり限定的であったのが、現代にかけて使用頻度も増し多様化して、発展していったことが分かる。

2.5 Savijärvi (1971)

Savijärvi によると、A 不定詞基本形による名詞修飾の似たような構造でも、文法的に全く問題のない文もあれば非文もある。A 不定詞基本形による修飾用法等には制約があるが、学校文法では扱われず、文法としてもあまり注目されてこなかったという。そこで Savijärvi は、A 不定詞基本形を含む様々な文に関して、文法的そして文体的という二つの基準で、容認度を 3 段階（A 適格、B 容認可能、C 間違い・不自然）に設定しアンケート調査を行った。被験者は、I 大学でまだ文法の試験を受けていないフィンランド語学の学生、II 大学 2 年を終えた高得点レベルの英語学の学生、III 大学受験生、IV フィンランド語について最後に学んだのが小学校高学年または中学である高校生の、4 グループである。以下に、調査に用いられた名詞修飾用法の A 不定詞基本形を含む文(68)-(77)(Savijärvi: 287-289)と、調査のデータをまとめた表 1-2 を示す。表 1-2 の数値は、%である。文法的基準と文体的基準のデータにあまり差はなかったもので、表 1-2 では、文体的な容認度のデータは省く。

(68) Minu-lla on use-i-ta tapo-j-a [selvi-tä tä-stä].

I-ADE be.3SG several-PL-PAR way-PL-PAR escape-AINF this-ELA

「私には、これから逃れる方法がいくつかある。」

(69) Hussein-i-lla on taito [toimi-a välttjä-nä].

Hussein-ADE be.3SG skill.NOM act-AINF intercessor-ESS

「フセインには、仲介者として働く技量がある。」

- (70) Nasser-i-lla ol-i itse-oikeutettu asema [toimi-a
 Nasser-ADE be-PAST.3SG self-justified.NOM position.NOM act-AINF
 arab-i-en johtaja-na].
 Arab-PL-GEN leader-ESS
 「ナーセルには、アラブ人達のリーダーとして働く自己正当化された立場があった。」
- (71) Välikohtaukse-n syy ol-i nuor-ten halu [hännä-tä poliisi-a].
 incident-GEN reson.NOM be-PAST.3SG young-PL-GEN desire.NOM tease-AINF police-PAR
 「警察をからかいたいという若者の欲求が、出来事の理由だった。」
- (72) Romaani-n keskeinen teema on päähenkilö-n kamppailu
 novel-GEN central.NOM theme.NOM be.3SG principal.character-GEN struggle.NOM
 [yrittä-ä ymmärtä-ä ihmis-tä].
 try-AINF understand-AINF people-PAR
 「主人公の、人間を理解しようとする葛藤が、小説の中心的テーマである。」
- (73) Avioliito-n solmimise-en ol-i syy-nä viehätys [pääs-tä
 marriage-GEN tie-ILL be-PAST.3SG reason-ESS charm.NOM get-AINF
 eksoottise-en paikka-an].
 exotic-ILL place-ILL
 「結婚の結びつきには理由として、別世界に行ける魅力があった。」
- (74) Tämä on yksi tapa [mita-ta menesty-mis-tä].
 this.NOM be.3SG one way.NOM measure-AINF succeed-VN-PAR
 「これは、成功を測る 1 つの方法だ。」
- (75) Palvele-va puhelin on kirko-n uusi työ-muoto
 supply-ACT.PRES.PART.NOM phone.NOM be.3SG church-GEN new.NOM work-form.NOM
 [autta-a ahdistune-i-ta ihmis-i-ä].
 help-AINF distressed-PL-PAR people-PL-PAR
 「お助け電話は、教会の、悩んでいる人々を助ける新しい仕事の形だ。」

(76) Sama-na vuon-na alko-i kamppailu [löytä-ä kustantaja
 same-ESS year-ESS start-PAST.3SG fight.NOM find-AINF publisher. ϕ ACC
 novelli-kokoelma-lle].
 short.story-collection-ADE
 「同年、短編小説集のために出版社を見つける戦いが始まった。」

(77) Saksalaise-t pyrki-vät etsi-mä-än keino-j-a [ratkais-ta
 German-PL.NOM try-3PL look.for-MAINF-ILL means-PL-PAR solve-AINF
 Venezuela-n kiista].
 Venezuela-GEN dispute. ϕ ACC
 「ドイツ人達は、ベネズエラの論争を解決する手段を探そうとしている。」

表 1-2 Savijärvi (1971)による、A 不定詞基本形の名詞修飾用法の容認度データ¹⁴

	I			II			III			IV		
	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C
(68)	85	15	—	78	17	5	67	26	7	40	48	12
(69)	85	15	—	78	22	—	93	7	—	85	12	3
(70)	60	25	15	45	38	17	70	26	4	70	27	3
(71)	85	10	5	78	20	3	74	22	4	45	40	15
(72)	10	30	60	22	47	30	41	48	11	18	52	30
(73)	20	45	35	35	32	32	41	41	19	33	42	24
(74)	75	20	5	75	17	8	67	29	4	58	30	12
(75)	15	10	75	28	42	30	59	41	—	52	33	15
(76)	10	5	85	3	12	85	15	29	55	15	36	48
(77)	20	40	40	5	22	73	15	29	55	12	33	55

(Savijärvi (1971: 287-289)を元に筆者作成)

(68)-(70)の例はいずれも所有文だが、(70)は他の二つよりやや容認度が下がる。(71)(72)はどちらも〈補語+olla+名詞+A 不定詞基本形〉という構造である。(71)は、I から IV の順で容認度が低下していくものの、いずれのグループでも文法的と判断した人が一番多い。一方、(72)の容認度はかなり低いが、文法的と見なす人も一定数いることも事実である。(72)(73)の例のように、主名詞が動詞由来名詞だと、本来は非文法的でも判断に迷うという。(74)(75)は、どちらも〈主語+olla+補語+A 不定詞基本形〉であるが、容認度には差がある。「A 不定詞基本形の名詞修飾において、主名詞が *tapa* 「方法」なら自然で *muoto* 「形」なら

¹⁴ 数値は四捨五入されているため、合計しても 100 にならないところがある。

不自然である」と言うには、良い言語直感と適度な教育が必要だと、Savijärvi(: 289)は述べている。(76)(77)は、動詞 olla が用いられていないという点で他の例文と異なり、どちらも容認度が低い。主名詞が同じ kamppailu 「葛藤、戦い」でも、(76)のほうが(72)よりもさらに容認度が低いのは、(72)の動詞が olla なのに対して、(76)の動詞が alkaa 「始まる」だからだと説明されている。よく主名詞として用いられる halu 「欲求」、kyky 「能力」、taito 「技術」、valta 「権力」といった名詞でも、alkaa の主語として用いられた以下の文は非文である。

(78) * Sama-na vuon-na alko-i halu / kyky / taito / valta
 same-ESS year-ESS start-PAST.3SG desire.NOM ability.NOM skill.NOM power.NOM
 [löytä-ä kustantaja novelli-kokoelma-lle].
 find-AINF publisher. φ ACC short.story-collection-ADE
 「lit. 同年、短編小説集のために出版社を見つける欲求／能力／技術／権力が始まった。」
 (Savijärvi 1971: 290)

上のデータを踏まえて Savijärvi は、A 不定詞基本形が使える基準はある点であいまいなままとしながらも、以下のように述べている。「名詞修飾用法の A 不定詞基本形は、主名詞が意味的に到着格(tulosija)を許可または要求する場合、自然である。不定詞による修飾の主名詞は、機会、可能性、能力、欲求、意図、努力、命令、許可、権利、義務、方法等を表す。たいてい、それらの語は動詞由来である」(Savijärvi: 292)。これは、従来の先行研究の記述と変わらない。また、データから、母語話者であっても容認度にばらつきがあることが見て取れる。

2.6 Pekkarinen (2005, 2011)

Pekkarinen (2005)では、A 不定詞基本形と受動現在分詞による〈名詞+olla+形容詞+不定形〉という形式について、以下の4つに分けて詳しく論じられている。

- ① 〈名詞+olla+形容詞-主格+受動現在分詞-主格〉
- ② 〈名詞+olla+形容詞-分格+受動現在分詞-分格〉
- ③ 〈名詞+olla+形容詞-主格+受動現在分詞-変格〉
- ④ 〈名詞+olla+形容詞-主格／分格+A 不定詞基本形〉¹⁵

各形式は意味的にはあまり変わらないが、生産性や用いられる形容詞に違いがあるという。1990年代のコーパスによると、489例中、①が43例、②が22例、③が33例、④が390例で、A 不定詞基本形を用いた④の頻度がずば抜けて高いことが分かる。

¹⁵ Pekkarinen (2005)は形式によって分類しており、④にはA 不定詞基本形の主語用法と形容詞修飾用法が混在している。この2用法の違いに関しては、2章3節で詳述する。

①は、補語の形容詞が主格で、それに受動現在分詞主格が続く構造である。

- (79) Hevonen on vaikea hoide-ttava
horse.NOM be.3SG difficult.NOM care-PASS.PRES.PART.NOM
「馬は世話するのが難しい」

(Pekkarinen 2005: 142)

この構造に現れる受動現在分詞は様々で、突出してある動詞由来が多いということはないが、形容詞は限定的で、難易を意味する形容詞がよく用いられるという。文の主語はたいてい一般的であり、(79)の例であれば、主語の *hevonen* 「馬」はある特定の馬ではなく、馬一般を指す。

②は、補語の形容詞とそれに続く受動現在分詞が分格の構造である。

- (80) Syltty on mukava-a syö-tävä-ä
brawn.NOM be.3SG nice-PAR eat-PASS.PRES.PART-PAR
「赤身肉は食べるのによい」

(Pekkarinen 2005: 135)

①との大きな違いは生産性で、形容詞は快／不快を表し、受動現在分詞は標準語データでは多くが知覚動詞由来で、方言データではほぼ *syödä* 「食べる」をもととする *syötävä* である。知覚動詞や *syödä* 「食べる」の目的語は対格ではなく分格目的語であり、この構造の形容詞と受動現在分詞の分格という格選択は、受動現在分詞のものの動詞の目的語の格と関連しているという。

③は、形容詞が主格、受動現在分詞が変格の構造である。使用頻度はあまり高くなく、*valmis* 「準備できた」や、*kypsä* 「熟した」等の準備ができている状態を意味する他の形容詞が用いられる固定的な表現であるという。

- (81) Kinkku on valmis tarjo-ttava-ksi
ham.NOM be.3SG ready.NOM serve-PASS.PRES.PART-TRA
「ハムは提供する準備ができている」

(Pekkarinen 2005: 137)

④は、①②③と違って、受動現在分詞ではなく A 不定詞基本形が形容詞に後続している。

- (82) Sika on helppo ruokki-a
 pig.NOM be.3SG easy.NOM feed-AINF
 「豚はえさをやるのが簡単だ」

(Pekkarinen 2005: 138)

形容詞は、難易、快／不快、可能性を意味し、そのうち多いのは難易である。意味や使用に関して受動現在分詞主格を用いた①に近いが、より生産的で広く用いられる。さらに①との違いとして、①は主語の性質について述べているが、④は行為について述べているという。(83a)は①の例、(84a)は④の例だが、意味的にそれぞれの b に近い。

- (83) a. Hevonen on vaikea hoide-ttava. ((79)再掲)
 horse.NOM be.3SG difficult.NOM care-PASS.PRES.PART.NOM
 「馬は世話するのが難しい。」
 b. Hevonen on sellainen, että se-n hoita-minen on vaikea-a.
 horse.NOM be.3SG such.NOM that it-GEN care-VN.NOM be.3SG difficult-PAR
 「馬は、世話するのが難しいものである。」

(Pekkarinen 2005: 142)

- (84) a. Hevonen on vaikea hoita-a.
 horse.NOM be.3SG difficult.NOM care-AINF
 「馬を世話するのは難しい。」
 b. Hevose-n hoita-minen on vaikea-a.
 horse-GEN care-VN.NOM be.3SG difficult-PAR
 「馬を世話することは難しい。」

(Pekkarinen 2005: 142)

また、A 不定詞基本形の④の構造は、受動現在分詞を用いた構造より先に生まれたという。

Pekkarinen(2011)は、受動現在分詞を網羅的かつ詳細に扱っている。前半では、方言（話しことば）、新聞（書きことば）、古語のコーパスデータにより、使用実態の具体的な数値を提示しながら、修飾用法と叙述的副詞用法を扱っている。本論文では特に、Pekkarinen(2011)の4章1節と5章1節の前置修飾(etumäärite)（＝名詞修飾）用法の記述を参考にした。話しことばと書きことばでは、名詞修飾用法の頻度に差がある。受動現在分詞の全使用における名詞修飾用法の割合は、方言データでは17.8%なのに対し、新聞データでは半数以上を占めるという。そのうち、方言データでは多くがモダリティ的に用いられており、新聞データでは逆にモダリティ的使用は少なかった。このように、受動現在分詞の事象叙述的な名詞修飾は、書きことばに特徴的な圧縮された表現で、話しことばではよく関係節や括弧の挿入といっ

た別の表現が用いられる。本論文で扱う、修飾する受動現在分詞と主名詞が「動詞－目的語」の関係から外れた例に関しても、記述が詳しい。その一部として、属格主語を用いてサイズを規定する言い方 ((85a)) と、主名詞が *kunto* 「状態」を主名詞とする言い方 ((85b)) の例が複数挙げられている。以下はどちらも方言データからの例である。

- (85) a. *tämä on [kahre henke istu-ttava] keinu-stooli*
 this.NOM be.3SG two.GEN people.GEN sit-PASS.PRES.PART.NOM rocking-chair.NOM
 「これは 2 人掛けのロッキングチェアだ」
- b. *siitä se (pettu) ol sites [syö-tävä-ssä] kunno-ssa*
 there it.NOM pine.bark.NOM be.PAST.3SG then eat-PASS.PRES.PART-INE condition-INE
 「そこではそれ (松樹皮) は食べられる状態だった」

(Pekkarinen 2011: 83)

後半では、可能構文と必須構文を通時的に論じている。

なお、受動現在分詞の接尾辞 *-(t)AvA* の *-(t)tA* は受動を表すが¹⁶、定形の受動とは性質を異にする点もあると指摘している。不定人称受動文の文には現れないが想定される主語は人であり、無生物ではない。この点は受動現在分詞も同じであるが、不定人称受動文では決して主語が表示されないのに対し、受動現在分詞句では属格主語が現れることがある。

2.7 坂田 (2010, 2015)

坂田(2010)はコーパスデータを用いて、不定詞の動詞性と従属度という観点から、主に〈動詞＋A 不定詞・E 不定詞・MA 不定詞〉を研究している。A 不定詞基本形も扱われているが¹⁷、その研究対象は本論文の研究対象とあまり重ならない。ただし、名詞修飾用法にも少し言及がなされている。A 不定詞基本形のコーパスデータ 1573 例中、修飾語 (名詞修飾、形容詞修飾、動詞修飾) が占める 153 例 (9.7%) のうち、名詞修飾は 141 例であったという。主名詞で多かったのは、*aika* 「時間」 (23 例)、*syy* 「理由」 (18 例)、*mahdollisuus* 「可能性」 (13 例)、*oikeus* 「権利」 (13 例) で、ほとんどが抽象名詞である。この結果は、先述の文法書の記述と一致する。

また、坂田(2015)では、A 不定詞変格の用法について、目的、程度、裁量、到達、慣用表現に分けて、他動性と絡めて論じている。

¹⁶ cf. 不定人称受動文
 (iii) *Kirja kirjoite-ta-an.*
 book. φ ACC write-PASS-4
 「本が書かれる。」

¹⁷ 坂田(2010)は、A 不定詞基本形の文法機能を、主語、目的語、述語、修飾語、独立要素の 5 つに分けている。本論文で扱う名詞修飾、動詞修飾、形容詞修飾は、修飾語にまとめられている。

2 章 A 不定詞基本形による修飾

本章では、先行研究では不十分であった記述を補いながら、改めて A 不定詞基本形による修飾について整理する。1 節は名詞修飾について、2 節は動詞修飾についてである。3 節は形容詞修飾で、〈主語+on+形容詞+A 不定詞基本形〉という基本的なパターンと、〈主語+on+形容詞+時や場所を表わす名詞+A 不定詞基本形〉というパターンに分けて論じる。4 章はまとめである。

1. A 不定詞基本形による名詞修飾

本小節では、A 不定詞基本形の名詞修飾用法について、主名詞の種類、A 不定詞基本形の意味的機能、統語的現れについて見ていく。分かりやすさのために、例文中の主名詞は□に入れて表す¹。

典型的な名詞修飾用法の主名詞は、1 章で既述の通り、動詞由来名詞や抽象名詞である。以下に例を挙げる。

(1) 名詞修飾で用いられる主名詞の例²

aie「計画」、aika「時間」、aikomus「意志、意向」、halu「欲求」、hankaluus「ぶきつちよさ、大変さ」、hanke「計画」、homma「仕事」、ideologia「イデオロギー」、innostus「熱中」、keino「手段」、kimmoke「衝動」、kyky「能力」、lupa「許可」、mahdollisuus「可能性」、oikeus「権利」、onni「幸運」、pakko「強制」、paniikki「パニック」、peruste「根拠」、pyrkimys「努力、傾向」、päättös「決定」、suunnitelma「計画」、syy「理由」、taipumus「傾向」、taito「技術」、tapa「方法」、tarkoitus「意図」、tarve「必要」、tilaisuus「機会」、toivo「望み」、työ「仕事」、vaatimus「欲求」、vaikeus「難しさ」、vapaat kädet「自由」、vapaus「自由」、vara「余裕」、viehätys「魅力」、yritys「試み」

まず、A 不定詞基本形の、主名詞との意味的關係を見ていこう。先行研究にはほとんど記述がないが、名詞修飾用法の A 不定詞句の役割は、主名詞の意味補充だと考えられる。上述の名詞は、その「内容」（「VP するという N」）や「目的」（「VN するための N」）の規定が、少なくともその語の一つの用法として求められる。例えば(2a)の A 不定詞句は、「どのような仕事か」という主名詞の内容を表示しており、(2b)の A 不定詞句は「何のための時間か」という主名詞の目的を表示している。(3)は両例とも tapa「方法」が主名詞であるが、(3a)の A 不定詞句は「サウナや自然の中でリラックスするという方法」といった内容を表示

¹ 4 章も同様。

² ISK等の先行研究では、名詞修飾用法で用いられる主名詞が網羅的に列挙されておらず、10 個程しか例が挙げられていない。ここでは、それらに加え、先行研究の例文や辞書（*Uusi suomi-englanti suur-sanakirja*）、翻訳小説 *Norwegian Wood* から例を採集した。*Norwegian Wood* は英語を介しての二重翻訳だが、そこから採取した例文が自然なフィンランド語であるかは、母語話者に確認してある。

しているのに対し、(3b)のA不定詞句は「リラックスするための方法」という目的を表示している。

- (2) a. Häne-llä ol-i täysi työ [saa-da kuorma
he/she-ADE be-PAST.3SG full.NOM work.NOM get-AINF load. ϕ ACC
pysy-mä-än tasapaino-ssa].
keep-MAINF-ILL balance-INE
「彼には、荷物のバランスを保つ（という）大仕事があった。」
(Penttilä 1963: 485)

- b. Koska hän ei tee työ-tä, häne-llä on aika-a
because she.NOM NEG.3SG do work-PAR she-ADE be.3SG time-PAR
[suunnitel-la].
plan-AINF
「彼女は仕事をしていないので、彼女には計画する（ための）時間がある。」
(*Norwegian Wood*: 269)

- (3) a. Seppälä sano-o myös, että ihmise-n pitä-ä osa-ta
Seppälä.NOM say-3SG also that people-GEN must-3SG can-AINF
rauhottu-a. ... Suomalais-ten tapa [rauhoittu-a sauna-ssa ja
relax-AINF Finnish-PL.GEN way.NOM relax-AINF sauna-INE and
luonno-ssa] on hyvä, tutkija Emma Seppälä sano-o.
nature-INE be.3SG good.NOM reseacher.NOM Emma Seppälä.NOM say-3SG
「セッパラはまた、人々はリラックスできなくてはならないと言っている。（中略）サ
ウナや自然の中でリラックスする（という）フィンランド人の方法は良いと、研究
者のエンマ・セッパラは言っている。」
(yle uutiset selkosuomeksi 25. 9. 2016)³

- b. Luke-minen on hyvä tapa [rauhoittu-a].
read-VN.NOM be.3SG good.NOM way.NOM relax-AINF
「読書は、リラックスするのに良い方法だ。」

意味補充以外には、A 不定詞基本形による名詞修飾を用いる事ができない。例えば下の(4)は、A 不定詞句が主名詞の意味補充ではなく、非文である。

³ http://yle.fi/uutiset/osasto/selkouutiset/sunnuntai_2592016_radio/9190612

(4) * Minu-lla on eräs suuri työ [teh-dä

I-ADE be.3SG one.NOM big.NOM work.NOM do-AINF

rakentee-lta-an]. (cf. (2a))

construction-ABL-POSS.3

「int. 私には、その構造からやらなければならないある大仕事がある。」

(Penttilä 1963: 485)

A 不定詞句が主名詞の意味を補充するからこそ、主名詞自体は抽象的であって、具体物は主名詞になれない。もっとも、意味補充の場合全てに、A 不定詞句が用いられうる訳ではない。

「話、噂、考え、アイディア、知識、予言、予報、事件、事故」等を主名詞にして、実際に起こる、起こったあるいは起こるかもしれない個別事象を A 不定詞句で言うことはできない。それらの場合は、(5)のように、*että* 節⁴や関係詞節を用いて表す。A 不定詞句はテンス・アスペクトや主語⁵等を表せないが、節内にはそれらが現れ、個別事象を表す。

(5) a. Neti-ssä on huhu, että Matti on Leena-n
net-INE be.3SG rumour.NOM that Matti.NOM be.3SG Leena-GEN
poika-ystävä.
boyfriend.NOM

「ネット上には、マッティがレーナの彼氏だという噂がある。」

b. Sama-ssa paika-ssa tapahtu-i onnettomuus, jo-ssa
same-INE place-INE happen-PAST.3SG accident.NOM REL-INE
Matti kuol-i.
Matti.NOM die-PAST.3SG

「同じ場所で、マッティが亡くなった事故が起きた。」

また、A 不定詞句は構造的にはあくまで修飾句だが、内容的には必須度が高い。A 不定詞句の修飾なしで主名詞だけだと、多くの場合、文脈がない限り文が成り立たない。

⁴ *että* 節をとる名詞については、ISK(: 1108-1110)参照。

⁵ 名詞修飾用法では、他の用法のように、A 不定詞基本形の主語が属格で A 不定詞句内に現れることはない。主文の要素や主名詞に付いた所有接尾辞が、A 不定詞句の意味上の主語に解釈できる場合もある。例えば(2a)で、A 不定詞句「荷物のバランスを保つ」のは、所有文の所格名詞である「彼／彼女」だと解釈できる。

- (6) a. Minu-lla on { aikomus / halu / tarve / vaikeus }
 I-ADE be.3SG intention.NOM desire.NOM need.NOM difficulty.NOM
 [*teh-dä jotain*].
 do-AINF something.PAR
 「私には～する意図／欲求／必要／難しさがある。」
- b. ?? Minu-lla on { aikomus / halu / tarve / vaikeus }.
 I-ADE be.3SG intention.NOM desire.NOM need.NOM difficulty.NOM
 「lit. 私には意図／欲求／必要／難しさがある。」

そして、動詞由来名詞を主名詞とする名詞句の多くは、動詞句の構造〈動詞＋A 不定詞句〉を引き継いでいる⁶。

- (7) a. 〈動詞＋A 不定詞句〉
 aik-o-a / halu-ta / toivo-a / yrittä-ä [*teh-dä jotain*]
 intend-AINF want-AINF wish-AINF try-AINF do-AINF something.PAR
 「～するつもりだ／～したい／～することを望む／～することを試みる」
- b. 〈動詞由来名詞＋A 不定詞句〉
 aikomus / halu / toivo / yritys [*teh-dä jotain*]
 intention.NOM want.NOM wish.NOM attempt.NOM do-AINF something.PAR
 「～する意志・意向／欲求／望み／試み」

次に、主名詞の、文中での統語的現れについて見ていく。名詞修飾は所有文や存在文で現れることがほとんどであり、その場合、主名詞が所有物や存在物である。

- (8) Sinu-lla on aikomus / halu / mahdollisuus /
 you.SG-ADE be.3SG intention.NOM want.NOM possibility.NOM
pakko [*lähte-ä*].
 necessity.NOM go-AINF
 「あなたには行く意志・意向／欲求／可能性／必要がある。」

所有文や存在文以外でも可能ではあるが、出現頻度は低い。所有文と存在文に次いで多いのは、主名詞が主文の目的語であるケースであり、また、その他のケースも若干見られる。以下の例で、(9)は主名詞が lupa「許可」、(10)は aikomus「意志、意向」の例で、それぞれ(a)は主名詞句が文全体の主語、(b)は目的語、(c)は場所格補部に相当する。

⁶ 1 章 1 節で既述の通り、MA 不定詞入格に従える動詞に由来する主名詞が、A 不定詞基本形に従えることもある。

- (9) a. Häne-n maa-han-tulo-lupa-a-nsa sisälty-i
 he/she-GEN country-ILL-coming-permission-ILL-POSS.3 be.included-PAST.3SG
 lupa [teh-dä mi-tä tahansa työ-tä].
 permission.NOM do-AINF what.ever-PAR work-PAR
 「彼／彼女の移民許可には、どんな仕事をしていてもよいという許可が含まれていた。」
- b. He anto-i-vat minu-lle luva-n [teh-dä työ-tä].
 they.NOM give-PAST-3PL I-ALL permission-nACC do-AINF work-PAR
 「彼らは私に仕事をする許可を与えた。」
- c. Si-tä ei voi-da pitä-ä lupa-na [teh-dä
 it-PAR NEG.3SG can-PASS regard-AINF permission-ESS do-AINF
 mi-tä tahansa].
 what.ever-PAR
 「それは何をしていてもよいという許可とは見なせない。」

- (10) a. Aikomukse-ni [matkusta-a maa-lle] rauke-si
 intention-POSS.1SG travel-AINF countryside-ALL weaken-PAST.3SG
 「田舎に旅行したいという私の意志は弱まった」

(Penttilä 1963: 490)

- b. Se on ilmais-sut aikomukse-nsa
 it.NOM be.3SG express-ACT.PAST.PART.NOM intention.nACC-POSS.3
 [osallistu-a Euroopa-n parlamenti-n vaale-i-hin].
 participate-AINF Europe-GEN parliament-GEN election-PL-ILL
 「それは、ヨーロッパ議会の選挙に参加する意向を示した。」
- c. Ole-n iloinen komissio-n aikomukse-sta [teh-dä
 be-1SG glad.NOM commission-GEN intention-ELA do-AINF
 suositus].
 recommendation. ϕ ACC
 「私は、推薦をするという理事会の意向が嬉しい。」

A 不定詞句を含む名詞句は、たいてい文末に置かれる。フィンランド語の基本語順は SVO だが⁷、A 不定詞句に修飾される主名詞が主語である場合も、(9a)のように文末に置かれることが多い。それには、二つの理由が考えられる。一つは単純に、A 不定詞句に修飾された名詞句は長くなるため、文頭に置かれると収まりが悪いからである。もう一つは、主名詞句が文頭にあると動詞が 2 つ並んでしまうという問題である。もし A 不定詞句に修飾された

⁷ もっとも、この語順の規則は割と緩く、他の要素が文頭に現れて主語が文末に置かれることはよくある。

主語が文頭にあると、主名詞の後に A 不定詞基本形と主文の動詞が隣り合って並ぶことになってしまい、据わりが悪い。動詞によっては A 不定詞基本形と 3 人称単数形が同形のものもあるので、なおさらである。A 不定詞句を含む主語が文頭ではなく文末に置かれるのは、このような読み手・聞き手の解釈の負担を軽減するためでもあるだろう。もっとも、主語である主名詞句が文頭に現れることもない訳ではない。(10a)がその例である。A 不定詞基本形 *matkustaa*「旅行する」は 3 人称単数形と同形だが、意味的に「意志が旅行する」はかなり変であり、*aikomukseni matkustaa* の部分だけでもそれが「主語－動詞」ではなく名詞句を構成していることとやすく想定できる。また、主名詞句も 3 語で比較的短いため文頭に置かれても収まりは悪くなく、文全体で見ても構造が簡単な分、解釈が紛らわしくない。

主名詞が主文の目的語や所有文の所有物である場合は、〈主文の動詞＋主名詞〉が述語的まとまりと化していることが多い。この固定的な表現については、A 不定詞基本形の格選択と絡めて、4 章で詳しく論じる。

2. A 不定詞基本形による動詞修飾

この節では、A 不定詞基本形による動詞修飾を扱う。1 章 1.1 節で既述の通り、現代フィンランド語では、この動詞修飾用法はかなり限定的である。まずは、現在でも用いられる、贈与や分配を意味する A 不定詞基本形が存在文や所有文で現れる例を再掲する。

(11) a. ...mutta mitään päivämäärä-ä minu-lla ei ole [anta-a].
 but anything.PAR date-PAR I-ADE NEG.3SG be give-AINF
 「しかし、私にはあげられる日にちはない。」

b. No, on-kos Akseli-lla [myy-dä] kala-a ja lintu-j-a,...
 well be.3SG-QP Akseli-ADE sell-AINF fish-PAR and bird-PL-PAR
 「えっと、アクセリには売るために魚と鳥があるだろうか、」

(1 章(29)再掲, *ISK* 505)

〈所格名詞＋on＋関連名詞⁸＋A 不定詞基本形〉というこの所有文の形式は、多くの名詞修飾と同じである (cf.(8))。そのため、Penttilä(1963)等の先行研究では、名詞修飾と動詞修飾を明確に区別していない。両者を分けている *ISK* でも、その分類の根拠は特に示されていない。本論文では、以下の事実から、名詞修飾と動詞修飾を分けて考える。まず、修飾要素である A 不定詞句が必ずしも関連名詞の右隣に位置しなくてもよいということから、(11)のような文が名詞修飾ではないことが分かる。(11a)の例を見ると、所有文の所有物である関連名詞 *mitään päivämäärää*「いずれの日にち」が、所格名詞の前に置かれており、A 不定詞基本形と離れている。(11b)も、主名詞 *kalaa ja lintuja*「魚と鳥」と A 不定詞基本形

⁸ 不定形動詞と解釈上の文法関係にある主文の名詞を、以後「関連名詞」と呼ぶ。

が、通常の話順とは逆になっている。動詞修飾では A 不定詞句が関連名詞のすぐ右に来るのが基本的な話順ではあるが、そうでない話順も許容される。名詞修飾ではこのようなことはありえず、必ず A 不定詞句が主名詞の右隣に位置して修飾する。それでは、(11)のような文が名詞修飾ではないことを明らかにしたところで、名詞修飾と動詞修飾のその他の違いを確認していこう。名詞修飾では、A 不定詞基本形が主名詞の意味補充という機能を果たしていたのに対し、動詞修飾では、A 不定詞基本形が「～するために」という目的を表す。名詞修飾の意味補充には「～するための」という目的も含まれているが、名詞修飾は必須要素として主名詞の意味を補っていたのに対し、動詞修飾の A 不定詞句は補足的であるという違いがある。動詞修飾の場合、A 不定詞句がなくても文は成立する。

(12) No, on-kos Akseli-lla kala-a ja lintu-j-a,... (cf. (6b)(11b))

well be.3SG-QP Akseli-ADE fish-PAR and bird-PL-PAR

「えっと、アクセリには魚と鳥があるだろうか、」

そして、主名詞が抽象名詞・動詞由来名詞で種類が限られていた名詞修飾の場合とは異なり、動詞修飾の場合には、具体的なものを表わす様々な語が関連名詞として現れ得る。逆に、名詞修飾の場合は A 不定詞基本形で用いられる動詞に制約はないが、動詞修飾の場合、今日では贈与や分配を意味する動詞に限られる⁹。以下に、所有文の所有物である名詞が同じ aika 「時間」の、名詞修飾と動詞修飾の例を挙げる。

(13) a. 名詞修飾

Koska hän ei tee työ-tä, häne-llä on aika-a
because she.NOM NEG.3SG do work-PAR she-ADE be.3SG time-PAR
[suunnitel-la].
plan-AINF

「彼女は仕事をしていないので、彼女には計画する（ための）時間がある。」

((2b)再掲, *Norwegian Wood*: 269)

b. 動詞修飾

Minu-lla on aika-a vaikka [mu-i-lle jaka-a].
I-ADE be.3SG time-PAR PC other-PL-ALL distribute-AINF

「私には他の人に分け与える程時間がある。」

(*Norwegian Wood*: 88)

⁹ 以下の表現は、動詞が贈与や分配以外の意味だが、固定的表現として今日でも用いられる。主名詞が A 不定詞基本形の目的語に相当することから、名詞修飾ではなく動詞修飾に分類できる。

(i) Mei-llä ei ole aika-a / raha-a [tuhla-ta].
we-ADE NEG.3SG be time-PAR money-PAR waste-AINF
「我々には、無駄にできる時間／お金はない。」

また、動詞修飾における、主名詞と A 不定詞基本形との統語関係に目を向けてみると、関連名詞（所有文の所有物あるいは存在文の存在物：(11a)の päivämäärää「日にち」、(11b)の kalaa ja lintuja「魚と鳥」）が、A 不定詞基本形（(11a)の antaa「与える」、(11b)の myydä「売る」）の目的語に相当する。つまり、関連名詞は、A 不定詞基本形と主文の動詞の共有項である。動詞修飾や副詞的修飾という語で呼ばれていても、A 不定詞句は主文から独立した副詞句として存在している訳ではなく、必ず主文の名詞と統語的・意味的な関係がなくてはならない。

かつては、上記の贈与や分配を意味する動詞に限らず、A 不定詞基本形が、存在文や所有文以外でも動詞修飾として用いられていた。その場合には、たいてい A 不定詞句内に属格主語が現れる。この場合も、(11)と同様、関連名詞（(14)では文全体の目的語である omenoita「りんご」）が、A 不定詞基本形の目的語に相当する。すなわち、omenoita は主文の動詞 toi「持ってきた」と A 不定詞基本形 syödä「食べる」の共有項である。

- (14) † Isä to-i omeno-i-ta [las-ten syö-dä]
 father.NOM bring-PAST.3SG apple-PL-PAR child-PL.GEN eat-AINF
 「お父さんは、子ども達が食べるためにりんごを持ってきた」

(1 章(61)再掲, Penttilä 1963: 486)

A 不定詞基本形の目的語に相当する主名詞が存在せず A 不定詞句が副詞句として独立している(15)は、古い言い方だとしても完全に非文である¹⁰。

- (15) a. * Syö-mme [elä-ä].

eat-1PL live-AINF

「int. 私達は生きるために食べる。」

¹⁰ 目的を表す他の表現として、A 不定詞変格による目的構文（意味上の主語が主文と同じ場合に限る）や、接続詞 jotta「～のために」（否定文では jottei）がある。

(ii) Syö-mme [elä-ä-kse-mme]. (cf. (15a))

eat-3PL live-AINF-TRA-3.POSS

「私達は生きるために食べる。」

(iii) Matti halua-a tuo-da tanssi-musiikki-in nuori-a tuul-i-a,
 Matti.NOM want-3SG bring-AINF dance-music-ILL young-PL-PAR wind-PL-PAR
 jotta nuoriso kiinnostu-u tanssi-lavo-i-sta. (cf. (15b))

so.that the.youth.NOM get.interested-3SG dance-stand-PL-ELA

「若者がダンスフロアに興味を持つように、マッティはダンスミュージックに新しい風を吹き込みたい。」

b. * Matti halua-a tuo-da tanssi-musiikki-in nuor-i-a
 Matti.NOM want-3SG bring-AINF dance-music-ILL young-PL-PAR
 tuul-i-a [nuoriso-n kiinnostu-a tanssi-lavo-i-sta].
 wind-PL-PAR the.youth-GEN get.interested-3SG dance-stand-PL-ELA
 「int. 若者がダンスフロアに興味を持つために、マッティはダンスミュージック
 に新しい風を吹き込みたい。」

なお、古い(14)のような文は、現代では(16)のように受動現在分詞変格を用いて表す。

(16) Isä to-i omeno-i-ta [las-ten syö-tävä-ksi].
 father.NOM bring-PAST.3SG apple-PL-PAR child-PL.GEN eat-PASS.PRES.PART-TRA
 「お父さんは、子ども達が食べるためにりんごを持ってきた。」

以上、A 不定詞基本形の動詞修飾について、A 不定詞基本形が関連名詞（現代では所有文の所有物または存在文の存在物）と「動詞－目的語」の関係にあること、A 不定詞句は「～するために」という目的を補足的に表すが、主文から独立した副詞句として存在している訳ではないこと論じた。

3. A 不定詞基本形による形容詞修飾

本節では、A 不定詞基本形による形容詞修飾について論じる。まず 3.1 節では〈主語＋olla＋形容詞＋A 不定詞基本形〉という基本的なパターンを、続いて 3.2 節では〈主語＋olla＋形容詞＋時や場所を表す名詞＋A 不定詞基本形〉というパターンを扱う。

3.1 〈主語＋olla＋形容詞＋A 不定詞基本形〉¹¹

A 不定詞基本形による修飾は全体的に先行研究が多くないが、特に形容詞修飾用法については、文法書の記述すら乏しい。本小節では、A 不定詞基本形の主語用法とも比較しながら、A 不定詞基本形による形容詞修飾について精密に記述する。

基本的な形式は〈主語＋olla＋形容詞＋A 不定詞基本形〉で、A 不定詞句は形容詞の叙述対象を明確にしている。A 不定詞基本形が修飾する形容詞は、可能性、難易、知覚による評価を表す(*ISK*: 503)。先行研究では、A 不定詞基本形による形容詞修飾用法と主語用法¹²の

¹¹ 形容詞修飾の構造としては、1 章 1.1 節で言及したように、SVOC 文（〈主語＋動詞＋目的語＋形容詞－様格＋A 不定詞基本形〉等）もありえるが、ここでは単純な SVC 文に代表させた。

¹² 主語用法の A 不定詞基本形は、感情使役文においてか、olla が用いられたコピュラ文において、もしくは特定の自動詞とともにしか用いられず (*ISK*: 499, 1 章 1.1 節参照)、使用範囲が狭い。*ISK* 等では「主語」という名称で呼ばれているが、狭い意味では文の主語とは捉えられないことを、ここで指摘しておく。主語は通常文頭に置かれるので、A 不定詞句が文末に置かれるという点で、典型的な主語とは異なる。さらに、少なくとも現代では、A 不定詞句が複数あっても、動詞は 3 人称単数のままで、複数にはならない。数名の母語話者に選んでもらったところ、全員が、(iv)で動詞・形容詞述語の単数形

両方の解釈が可能な文があるとしている(ISK 504 註他)。

(17) a. 形容詞修飾

S V C 修飾
Se ol-isi mukava [kuul-la].
it.NOM be-COND.3SG comfortable.NOM listen-AINF
「それは聴くのが心地よいだろう。」

b. 主語用法

S の一部 V C S
[Se] ol-isi mukava [kuul-la].
it. ϕ ACC be-COND.3SG comfortable.NOM listen-AINF
「それを聴くのは心地よいだろう。」

(17)の文の A 不定詞基本形を形容詞修飾用法だと捉えた場合、(17a)のように、文頭名詞 se 「それ」は主格で、文の主語である。(17b)のように主語用法だと捉えた場合は、文頭名詞 se は A 不定詞基本形 kuulla 「聴く」の ϕ 対格目的語で、A 不定詞句 kuulla se 「それを聴く」が文の主語である。このように、同一形式であっても、構造が異なる。この用法の多義解釈は、形容詞が可能性や難易を表す場合に限られる。知覚による評価を表す形容詞の場合、主語用法だとすると、(18b)「花を見ることは美しい」という意味になりおかしいため、必ず形容詞修飾用法に決まる。

を選択した。ひとまとまりの行為とは見なされないように、同時にはできない二つの行為「外出する」と「家に一人である」を並列した(iv a)でもある。人称が一致しているかに関しては、判断がつかない。用いられている 3 人称は、A 不定詞句と一致しているかもしれないし、そうでないかもしれない。無主語文でも、3 人称が用いられるからである。

(iv) a. Margareta-a { pelott-i / * pelott-i-vat } [men-nä ulos]
Margareta-PAR frighten-PAST.3SG frighten-PAST-3PL go-AINF out
ja [ol-la kotona yksin].
and be-AINF at.home alone
「マルガレタは、外出するの、家に一人でいるのも怖がった。」

b. Minu-lle { on vaikea-a / * o-vat vaike-i-ta } [puhu-a]
I-ALL be.3SG difficult-PAR be-3PL difficult-PL-PAR speak-AINF
itse-stä-ni ja [tutustu-a ihmisi-in].
self-ELA-POSS.1SG and get.to.know-AINF people-PL-ILL
「私にとっては、自分のことについて話すことも、人と知り合いになることも難しい。」

つまり、少なくとも数において、A 不定詞句と動詞は一致しない。この点でも、動詞と人称・数が一致するという、典型的な主語の条件を満たしていない。とはいえ、A 不定詞基本形の他の用法には明らかに含められず、積極的に特徴付ける他のことばもない。そのため、A 不定詞基本形以外の文の他の要素はどれも主語たりえないという消極的な理由で、本稿でも主語用法という従来の名称を引き続き使用する。

(18) a. 形容詞修飾用法

Kukka on kaunis [katsel-la].
flower.NOM be.3SG beautiful.NOM look.at-AINF
「花は見るのが美しい。」

b. 主語用法

[Kukka] on kaunis [katsel-la].
flower. ϕ ACC be.3SG beautiful.NOM look.at-AINF
「lit. 花を見ることは美しい。」

ISK(504 註)では、形容詞修飾用法と主語用法の意味的な違いはほとんどないとしている。他の先行研究も、この構造の違いにはあまり頓着しておらず、論じられている例が形容詞修飾用法なのか主語用法なのかがはっきりしない。例えば 1 章 2.6 節で挙げた Pekkarinen(2005)も、あくまで〈名詞+on+形容詞+A 不定詞基本形〉という形式の文を扱っているのであって、主語用法か形容詞修飾用法かで分けて論じてはいない。その形式の文における A 不定詞基本形の文法的解釈が複数あることには言及しているが、さらなる分析が必要だと述べるに留めている。しかし、この〈名詞+on+形容詞+A 不定詞基本形〉という形式は、本当にどの文でもどちらの解釈も可能で、2 つの用法に意味的制約等の違いはないのだろうか。

この問題を考えるにあたって、2 用法の形式が同一でなくなる、文頭名詞が 3 人称単数以外の事例と、動詞が分格目的語をとる事例を用いる。理論上、文頭にあるのが 1 人称 2 人称や複数名詞だと、形容詞修飾用法ではそれが主語であるため、動詞と補語である形容詞も人称・数が一致する。それに対して、主語用法の主語は A 不定詞句なので、文頭名詞が 1・2 人称や複数であっても、動詞と形容詞は常に 3 人称単数である。すなわち、動詞と形容詞の人称・単複によって、用法の区別がつく。また、A 不定詞基本形が対格目的語ではなく分格目的語をとる場合、形容詞修飾用法では文頭名詞は文の主語なので主格のままだが、主語用法では文頭名詞は A 不定詞基本形の目的語なので分格になる。すなわち、文頭名詞の格によって、用法の区別がつく。

以下では、A 不定詞基本形に、分格目的語を要求する動詞 *haastatella* 「インタビューする」を用いた文、または主語と述語が複数で一致している文を用いて、形容詞修飾文が、主語のカテゴリーの属性について述べる文であることを示す。まず、母語話者に作例(19)の容認度を尋ねたところ、形容詞修飾用法の(19a)は非文¹³、主語用法の(19b)は適格文だった。

¹³ 主語を、よくインタビューを受ける人物である Donald Trump 「ドナルド・トランプ」に変えても非文であり、A 不定詞基本形の動詞が主語に対する典型的な行為か否かは容認度に関係ない。

(19) a. * Matti on vaikea [haastatel-la].

Matti.NOM be.3SG difficult.NOM interview-AINF

「int. マッティはインタビューするのが難しい。」

b. [Matti-a] on vaikea [haastatel-la].

Matti-PAR be.3SG difficult.NOM interview-AINF

「マッティをインタビューするのは難しい。」

(19a)が非文の理由は、母語話者によると、「主語が“a Matti”という意味になって変だから」だという。主語を複数名詞「政治家，老人」に変えた形容詞修飾文(20)は適格文という判断だった。

(20) { Poliitiko-t / Vanha-t ihmise-t } o-vat vaike-i-ta

politician-PL.NOM old-PL.NOM people-PL.NOM be-3PL difficult-PL-PAR

[haastatel-la].

interview-AINF

「政治家／高齢者達は，インタビューするのが難しい。」

また，(20)の主語 poliitikot 「政治家達」に，指示形容詞 nämä 「これらの」を付けると，容認度がすこぶる低くなる。

(21) ?? Nämä poliitiko-t o-vat vaike-i-ta [haastatel-la].

these.NOM politician-PL.NOM be-3PL difficult-PL-PAR interview-AINF

「これらの政治家たちはインタビューするのが難しい。」

しかし，(21)と同様に nämä 「これらの」が付いた複数名詞が主語である(22)(23)は，問題なく容認される。

(22) Nämä auto-t o-vat helppo-j-a [aja-a].

these.NOM car-PL.NOM be-3PL easy-PL-PAR drive-AINF

「これらの車は運転しやすい。」

(23) Nämä kopiokonee-t o-vat helppo-j-a [käyttä-ä].

these.NOM copier-PL.NOM be-3PL easy-PL-PAR use-AINF

「これらのコピー機は使いやすい。」

この(21)と(22)(23)の容認度の違いは，(22)(23)では，車種・機種といった，運転しやすい・

使いやすいカテゴリーが想定しやすいのに対して、(21)ではインタビューしやすい政治家のグループといったカテゴリーを想定しづらいからである。

それに対して、主語用法は行為について述べる文であり、意味的制約はない。主語用法の(24)は、対象である文頭名詞が個別的で、「強情」という性格が理由の、対象の特徴について述べる場合も、「旅行中」という一時的な状況について述べる場合も、問題なく言える。

(24) [Matti-a] on vaikea [haastatel-la], koska
Matti-PAR be.3SG difficult.NOM interview-AINF because
{ hän on omapäinen / hän on matka-lla }.
he.NOM be.3SG self-willed.NOM he.NOM be.3SG travel-ADE
「マッティは強情／旅行中なので、インタビューするのが難しい。」

話は形容詞修飾用法に戻るが、非文の(19a)の形容詞の後に *ihminen* 「人間」という名詞を入ると、適格文になる ((25))。これは、*vaikea ihminen* 「難しい人間」の部分がカテゴリーを表すからである。

(25) Matti on vaikea ihminen [haastatel-la]. (cf. (19a))
Matti.NOM be.3SG difficult.NOM person.NOM interview-AINF
「マッティはインタビューするのが難しい人間だ。」

この〈主語+olla+形容詞+名詞+A 不定詞基本形〉という形式では、(26)のような A 不定詞基本形が対格をとる動詞でも、必ず形容詞修飾用法に決まり、主語用法ということはない。主語用法にとると、「それを翻訳することは容易な本だ」という、意味的におかしい文になってしまうからである。

(26) Tämä on helppo kirja [kääntä-ä].
this.NOM be.3SG easy.NOM book.NOM translate-AINF
「それは翻訳するのが容易な本である。」

〈形容詞+名詞+A 不定詞句〉の部分は名詞句だが、名詞が現れる統語的位置に自由に現れることができる訳ではなく、(25)(26)のように文の補語として現れる。(27)は、(26)と同じ *helppo kirja kääntää* 「翻訳するのが容易な本」という名詞句（例文の下線部分）を用いた作例だが、いずれの文も母語話者は非文だと判断した。(27a)は名詞句 *helppo kirja kääntää* が文の主語、(27b)は目的語、(27c)は場所格補部、(27d)は所有文の所有物である。

- (27) a. * Helppo kirja [kääntä-ä] on parempi.
 easy.NOM book.NOM translate-AINF be.3SG better.NOM
 「int. 翻訳するのが容易な本のほうがより良い。」
- b. * Ost-i-n helpo-n kirja-n [kääntä-ä].
 buy-PAST-1SG easy-nACC book-nACC translate-AINF
 「int. 私は、翻訳するのが容易な本を買った。」
- c. * Pidä-n helpo-sta kirja-sta [kääntä-ä].
 like-1SG easy-ELA book-ELA translate-AINF
 「int. 私は、翻訳するのが容易な本が好きだ。」
- d. * Minu-lla on helppo kirja [kääntä-ä].
 I-ADE be.3SG easy.NOM book.NOM translate-AINF
 「int. 私は、翻訳するのが容易な本を持っている。」

これらの統語的現れでは、〈形容詞＋名詞＋A 不定詞句〉ではなく、(28)のように、形容詞から派生した副詞と受動現在分詞に修飾された名詞句（(28)下線部）や、形容詞と動詞の組み合わせによっては(29)のような〈形容詞|動詞由来形容詞〉という複合語が用いられる¹⁴。

- (28) Helposti käänne-ttävä kirja on parempi.
 easily translate-PASS.PRES.PART.NOM book.NOM be.3SG better.NOM
 「容易に翻訳できる本のほうがより良い。」 (cf. (27a))

- (29) helppo|hoitoinen 「世話しやすい」 (< helppo hoitaa), helppo|kulkuinen 「行きやすい」 (< helppo kulkea), helppo|käyttöinen 「使いやすい」 (< helppo käyttää), helppo|lukuinen 「読みやすい」 (< helppo lukea), helppo|pääsyinen 「アクセスしやすい」 (< helppo päästä), helppo|tajuinen 「認識しやすい」 (< helppo tajuta), helppo|työstöinen 「加工しやすい」 (< helppo työstää), vaikea|kulkuinen 「行くにくい」 (< vaikea kulkea), vaikea|käyttöinen 「使いにくい」 (< vaikea käyttää),

¹⁴ 英語の tough 構文は、〈形容詞＋to 不定詞〉の部分が複合語になり、名詞を修飾することがある。このような複合形容詞は生産的で、広告でよく用いられる(Nanni 1980: 575)。

- (v) a. an EASY-TO-TAKE laxative
 b. rare and HARD-TO-FIND manuscripts
 c. an EASY-TO-SEW pattern
 d. a TOUGH-TO-PLEASE boss (Nanni 1980: 573)

それに対し、フィンランド語の〈形容詞＋A 不定詞基本形〉は、そのままの形では複合形容詞として用いられない。

- (vi) a. * helppo|kääntä-ä kirja
 easy.NOM|translate-AINF book.NOM
 「int. 翻訳するのが簡単な本」
 b. * vaikea|hyväksy-ä väite
 difficult.NOM|accept-AINF claim.NOM
 「int. 受け入れるのが難しい主張」

vaikea|lukuinen 「読みにくい」 (< vaikea lukea), vaikea|pääsyinen 「アクセスしにくい」 (< vaikea päästä), vaikea|selitteinen 「説明しにくい」 (< vaikea selittää), vaikea|tajuinen 「認識しづらい」 (< vaikea tajuta)

hoitoinen や käyttöinen といったこれらの動詞由来形容詞の多くは、それ単独では用いられず、別の要素に後続して用いられる。つまり、複合の仕方として、形容詞と形容詞化した A 不定詞基本形が複合しているのではなく、形容詞と A 不定詞基本形がまず複合し、それ全体が形容詞化していることになる。(29)の一番目の語 helppo|hoitoinen 「世話しやすい」を例にとると、[helppo]+[hoitaa-o-inen]ではなく、[helppo+hoitaa-ol]-inen のように表すことができる。

以上、先行研究で主語用法との区別が曖昧だった、A 不定詞基本形による形容詞修飾用法について論じ、主語名詞のカテゴリーの属性について述べる文であることを明らかにした。また、形容詞の後にカテゴリーを表す名詞がある〈主語+olla+形容詞+名詞+A 不定詞基本形〉という形式に関して、〈形容詞+名詞+A 不定詞基本形〉という名詞句が必ず形容詞修飾文の補語として用いられるという統語的制約も示した。

3.2. 〈主語+olla+形容詞+時や場所を表す名詞+A 不定詞基本形〉

A 不定詞基本形による形容詞修飾には、場所や時間について行為を行う観点からの評価を表す、〈主語¹⁵+olla+形容詞+時や場所を表す名詞+A 不定詞基本形〉というパターンもある。以下に、典型的な SVC 文に、それぞれの要素によく用いられる語を入れた表を示す。A 不定詞基本形のスロットには、様々な動詞が入る。

表 2-1 〈主語+olla+形容詞+時や場所を表す名詞+A 不定詞基本形〉

主語等	動詞	形容詞	時や場所を表す名詞	A 不定詞句
Tämä 「これ」 Nyt 「今」	on	hyvä 「良い」 sopiva 「ふさわしい」 oikea 「正しい」 väärä 「間違っている」 sopimaton 「ふさわしくない」 liian 「あまりに」 + 形容詞	paikka 「場所」 ikä 「年齢」 aika 「時間」 ajankohta 「時」 hetki 「瞬間」 päivä 「日」	tehdä jotain 「何かをする」

(ISK: 505 を基に本稿執筆者作成)

まず、名詞が場所を表す文としては、以下のような例が挙げられる。

¹⁵ フィンランド語では主語は文の必須要素ではなく、この場合も、主語はなくても構わない。代わりに、副詞 nyt 「今」のような別の要素が文頭に置かれることがしばしばある。

- (30) a. Suomi on maailma-n paras maa [asu-a].
 Finland.NOM be.3SG world-GEN best.NOM country.NOM live-AINF
 「フィンランドは住むのに世界最高の国だ。」
- b. Tietokonee-n näyttö on ehdottomasti miellyttävä-mpi
 computer-GEN display.NOM be.3SG surely pleasant-COMP.NOM
 ympäristö [koosta-a musiikki-a ja muoka-ta esitykse-n
 environment.NOM compile-AINF music-PAR and edit-AINF show-GEN
 ominaisuuks-i-a] kuin ... neste-kide-ruutu.
 quality-PL-PAR than liquid-crystal-screen.NOM
 「コンピューター画面は、音楽や演奏の質を編集するのに、液晶画面よりも絶対に好ましい環境だ。」
- (b のみ *ISK* 505)

名詞が時間を表す文としては、以下のような例が挙げられる。

- (31) a. Vuosi on liian lyhyt aika [arvioi-da
 year.NOM be.3SG too short.NOM time.NOM value-AINF
 uudistu-nee-n järjestö-n vaikuttavuut-ta].
 revive-ACT.PAST.PART-GEN organization-GEN effectiveness-PAR
 「1 年は、リニューアルした組織の効果を判断するには短すぎる時間だ。」
- b. Mikä on sinu-sta sopiva ikä [aloitta-a
 what.NOM be.3SG you.SG-ELA suitable.NOM age.NOM start-AINF
 alkoholi-n käyttö]?
 alcohol-GEN use. ϕ ACC
 「あなたの意見では、飲酒を始めるのにふさわしい年齢はいくつですか？」
- (a は 1 章(26), b は 1 章(27)再掲, *ISK* 505)

ここで注目したいのが、前小節で扱った〈主語+olla+名詞+形容詞+A 不定詞基本形〉のパターンと違い、A 不定詞句内に目的語が現れ得るという点である。(30b)であれば *musiikkia* 「音楽」と *esityksen ominaisuuksia* 「番組の質」、(31a)であれば *uudistuneen järjestön vaikuttavuutta* 「ニューリアルした組織の効果」、(31b)であれば *alkoholin käyttö* 「飲酒」が、A 不定詞基本形の目的語として A 不定詞句内に現れている。(30b)(31a)の A 不定詞句内の目的語は分格だが、(31b)は ϕ 対格である。包括目的語は n 対格ではなく ϕ 対格になる。否定文での格については 4 章で論じる。〈名詞+形容詞+A 不定詞基本形〉の部分は名詞句だが、この名詞句の統語的現れに制約があるという点は、前小節の〈主語+olla+名詞+形容詞+A 不定詞基本形〉と同じである。*ISK*(505)による

と、この名詞句はたいてい状況文においてや補語や補語的な副詞として用いられ、他の副詞としては用いられない。(32a)は、A 不定詞句を含む名詞句が場所格副詞であり、非文である。*ISK*の記述に付け足すと、主語と補語を入れ替えてA 不定詞句を含む名詞句を主語にした(32b)のような文も、非文である。

(32) a. * Tapa-si-mme sopiva-na päivä-nä [lähte-ä retke-lle].

meet-PAST-1PL suitable-ESS day-ESS go-AINF trip-ALL

「int. 私達は小旅行に行くのにふさわしい日に会った。」

(*ISK* 505)

b. * Maailma-n paras maa [asu-a] on suomi. (cf. (30a))

world-GEN best.NOM country.NOM live-AINF be.3SG Finland.NOM

「int. 住むのに世界最高の国はフィンランドだ。」

(30)(31)のような文においては必ず、場所や時間といった主語のカテゴリーを表す名詞が必要である。〈主語+olla+形容詞+時や場所を表す名詞+A 不定詞基本形〉という形式から、時や場所を表す名詞を取り去った文を作ってみる。すると、〈主語+olla+形容詞+A 不定詞基本形〉になり前小節で扱った基本的な形容詞修飾と同じであるように見えるが、以下のように非文になる。

(33) a. * Suomi on maailma-n paras [asu-a]. (cf. (30a))

Finland.NOM be.3SG world-GEN best.NOM live-AINF

「int. フィンランドは住むのに世界最高だ。」

b. * Vuosi on liian lyhyt [arvioi-da

year.NOM be.3SG too short.NOM value-AINF

uudistu-nee-n järjestö-n vaikuttavuut-ta]. (cf. (31a))

revive-ACT.PAST.PART-GEN organization-GEN effectiveness-PAR

「int. 1 年は、リニューアルした組織の効果を判断するには短すぎる。」

つまり、目的語をA 不定詞句内にとる構造は、A 不定詞基本形の直前に、場所や時間を表わす名詞がある場合でないと成り立たない。そうすると、この構造は多分に名詞修飾的でもある。主名詞が *aika* 「時間」や *paikka* 「場所」、*tila* 「余地」といった抽象的な時間・場所である名詞修飾を思い出されたい。ただ同時に、これらの文から形容詞の方を取り去っても非文なので、もちろん純粋な名詞修飾でもない。

(34) * Mikä on ikä [aloitta-a alkoholi-n käyttö]? (cf. (31b))

what.NOM be.3SG age.NOM start-AINF alcohol-GEN use. ϕ ACC

「int. 飲酒を始める年齢はいくつですか？」

以上、〈主語+olla+形容詞+時や場所を表す名詞+A 不定詞基本形〉という形式について、これらが形容詞修飾と名詞修飾どちらの性質も持っている中間的な存在であることを論じた。

4. まとめ

本章では、A 不定詞基本形による修飾について、名詞修飾、動詞修飾、形容詞修飾の順に論じた。それぞれの特徴を、表に整理する。

表 2-2 A 不定詞基本形による修飾

	意味 機能	統語環境	A 不定詞 基本形の 種類	主名詞・ 関連名詞の 種類	A 不定詞基本形 と主名詞・ 関連名詞との 統語関係
名詞修飾	非現実 事態の 描写	所有文・ 存在文 (選好)	制限なし	抽象名詞・ 動詞由来名詞	なし
動詞修飾		所有文・ 存在文	贈与・ 分配	制限なし	動詞－目的語
形容詞 修飾		属性叙述 コピュラ文	制限なし	カテゴリーを 表す名詞 時や場所を 表す名詞	動詞－目的語 なし

まず、この3つの修飾用法の機能はいずれも、非現実事態の表示である。名詞修飾用法ではそれが主名詞の意味補充「内容・目的」であり、動詞修飾では補足的に「目的」を表す。また、3つの修飾用法に共通している別の特徴として、その用いられ方が限定的であることが挙げられる。統語的な現れを見ると、名詞修飾の場合、主名詞が目的語等の他の現れもありうるが、所有文・存在文が圧倒的に多い。動詞修飾は、現代では所有文・存在文に限られる。形容詞修飾はコピュラ文で現れ、〈形容詞+名詞+A 不定詞句〉といった名詞句も、名詞のスロットに自由に入れる訳ではない。いずれも、統語環境が指定されていると言ってよいだろう。さらに、現代の動詞修飾では、A 不定詞基本形は贈与や分配を意味するものに限られ、その使用は非常に限定的である。さらに、A 不定詞基本形と関連名

詞との意味上の統語関係に目を転ずると、動詞修飾と形容詞修飾（名詞修飾的な形容詞修飾は除く）では、「動詞－目的語」の関係にある。動詞修飾の場合も、A 不定詞句が主文から独立しておらず、A 不定詞基本形が主文の関連名詞（現代では所有文・存在文の所有物・存在物）と必ず「動詞－目的語」の関係になくتهはいけないという制約は、看過できない。なお、不定詞と関連名詞が「動詞－主語」の関係にある場合は、動詞修飾では A 不定詞変格を、形容詞修飾では MA 不定詞入格を用いる。そして、「動詞－目的語」の関係にあるこの A 不定詞基本形による動詞修飾と形容詞修飾は、次章で扱う受動現在分詞による修飾と機能が重なる。

3 章 受動現在分詞による修飾

本章では、受動現在分詞による修飾について、名詞修飾を中心に論じる。1 節では非典型的な名詞修飾を、続く 2 節では変格・様格による動詞修飾、3 節は変格による形容詞修飾を考察する。4 節はまとめである。

1. 受動現在分詞による非典型的な名詞修飾¹

名詞修飾は、受動現在分詞の基本的な用法である。受動現在分詞による名詞修飾は、様々な点で、A 不定詞基本形による名詞修飾と大きく異なっている。まず、A 不定詞基本形は主名詞を後ろから修飾したが、受動現在分詞は必ず前から修飾し、主名詞と格・数が一致する。また、1 章 1.2 節で既述の通り、受動現在分詞は全般的に、義務、可能、推奨といったモダリティの意味を有することが多く、名詞修飾用法においてもそうである。

(1) a. 義務

[makse-ttava] lasku
pay-PASS.PRES.PART.NOM bill.NOM
「支払うべき勘定」

b. 可能

[syö-tävä] sieni
eat-PASS.PRES.PART.NOM mushroom.NOM
「食べることができるキノコ、食用のキノコ」

c. 推奨

[lämpimä-nä syö-tävä] ruoka
warm-ESS eat-PASS.PRES.PART.NOM food.NOM
「温めて食べるのがよい料理」

(1 章(41)再掲)

受動現在分詞で修飾された名詞が、統語的制約を受けずに、主語、目的語、補語、場所格補部、場所格副詞といった様々な名詞のスロットに入るという点も、A 不定詞基本形による名詞修飾と異なっている。そして、受動現在分詞と主名詞の関係は、「動詞－目的語」に相当する。例えば、上の(1a)において、主名詞である lasku「勘定」は、それを修飾している受動現在分詞 maksettava のもとの動詞 maksaa「支払う」の目的語に相当する。主名詞の種類が限られた A 不定詞基本形による名詞修飾と違い、受動現在分詞と「動詞－目的語」の関係であれば、どのような語も主名詞になる。しかし、「動詞－目的語」の関係から逸脱した例も存在する。本節では、「動詞－目的語」の関係から逸脱した受動現在分詞による名詞

¹ 本小節は、拙稿(2015)に大幅に修正・加筆したものである。

1.1 語彙化した受動現在分詞

(2) luotettava 「信頼できる」 <luottaa 「信頼する」 (+入格補部), uskottava 「信頼できる」 <uskoa 「信じる」 (+入格補部), nautittava 「楽しい」 <nauttia 「楽しむ」 (+出格補部), keskusteltava 「話題になっている」 <keskustella 「話す, 論じる」 (+出格補部)

(3) a. luotta-a miehe-en / *mies-tä / *miehe-n
trust-AINF man-ILL man-PAR man-nACC
「男性を信頼する」

b. [luote-ttava] mies
trust-PASS.PRES.PART.NOM man.NOM
「信頼できる男性」

c. Mies on [luote-ttava].
man.NOM be.3SG trust-PASS.PRES.PART.NOM
「男性は信頼できる。」

86

動詞由来以外の、やや特殊な例である。tanssittava が tanssi「ダンス」や kansantanssi「フォークダンス」等のダンスの種類の名詞を修飾している場合には、両者の関係は通常の「動詞－目的語」である ((4))。それに対して、(5d)のように tanssittava が musiikki「音楽」等の語を修飾することもあるが、この場合は、musiikki はもとの動詞 tanssia の目的語ではない ((5a))。「音楽に合わせて踊る」と言う場合、musiikki「音楽」を場所格で表すこともできず ((5b)), (5c)のように表現する。

- (4) a. tanssi-a kansa-n-tanssi-n
 dance-AINF folk-GEN-dance-nACC
 「フォークダンスを踊る」
 b. tanssi-ttava kansa-n-tanssi
 dance-PASS.PRES.PART.NOM folk-GEN-dance.NOM
 「踊れるフォークダンス」

- (5) a.* tanssi-a musiikki-a
 dance-AINF music-PAR
 「lit. 音楽を踊る」
 b. * tanssi-a musiiki-lla / musiiki-ssa ...
 dance-AINF music-ADE music-INE
 「lit. 音楽で踊る」
 c. tanssi-a musiiki-n tahdi-ssa
 dance-AINF music-GEN tempo-INE
 「音楽に合わせて踊る」
 d. tanssi-ttava musiikki
 dance-PASS.PRES.PART.NOM music.NOM
 「踊れる音楽」

この語彙化された tanssittava の場合、コロケーションかなり限定的で、主に musiikki「音楽」またはそれに関係する語とともに用いられる。例えば(6)のように「踊れる場所／服」という意味で paikka「場所」や puku「服」を修飾することはできない。

- (6) * tanssi-ttava paikka / puku
 dance-PASS.PRES.PART.NOM place.NOM clothes.NOM
 「int. 踊れる場所／服」

いずれにしても、このように通常の修飾の統語関係からの逸脱が許されているのは、

- e. [kahde-n henge-n istu-ttava] keinustooli
 two-GEN person-GEN sit-PASS.PRES.PART.NOM rockingchair.NOM
 「2 人掛けのロッキングチェア」
- f. [kahde-n | maat-tava] telтта
 two-GEN | lie-PASS.PRES.PART.NOM tent.NOM
 「2 人用のテント」
- g. [kahde-n maat-tava] puu-sänky
 two-GEN lie-PASS.PRES.PART.NOM wood-bed.NOM
 「2 人用の木のベッド」

このタイプも、「目的語－動詞」という通常の受動現在分詞と主名詞の関係から逸脱している。動詞が自動詞であり、主名詞は受動現在分詞のものと動詞の目的語ではなく場所格補部に相当する。例えば、(7a)で自動詞 *asua*「住む」の受動現在分詞に修飾されている名詞 *talo*「家」は、(8)のように、文に直すと *asua* の目的語ではなく内格補部である。同様に、*istua*「座る」は場所を所格補部、内格補部ないし入格補部で、*maata*「横たわる」は内格補部か所格補部でとる。

- (8) *Kaksi perhe-ttä asu-u talo-ssa / *talo-a / *talo-n.* (cf.(7a))
 two.NOM family-PAR live-3SG house-INE house-PAR house-nACC
 「2 家族が家に住んでいる。」

前小節で論じた語彙化・形容詞化した受動現在分詞による名詞修飾と同様に、このタイプも事象ではなく、サイズという主名詞の性質を表わす。例えば、(7a)は、「2 家族で住む用の、2 家族で住むのに適したサイズの」という潜在的属性を表わしており、実際部屋に何家族住んでいようと問題ではない。狭いながらも 3 家族で住んでいてもいいし、誰も住んでいなくても構わない。これは、受動現在分詞が可能というモダリティ的意味を持っていることによる。

このパターンの特徴として、主語相当の語の属格名詞があることが挙げられる。0 章 2.4.5.3 節で、受動分詞による名詞修飾では主語相当の属格名詞が現れることがほとんどないと述べたが⁵、このパターンでは、むしろ属格名詞が必要である。受動現在分詞だけが形容詞化・語彙化して特殊な意味を持っているのではなく、「何人用か」という部分が意味的に重要であり、主語相当の要素が主名詞のサイズを規定している。前小節とは違って、受

⁵ 事象叙述の場合は減多に分詞の主語相当の属格名詞と共起しないが、属性叙述であれば、主名詞が目的語相当の通常の受動現在分詞による修飾であっても、主語相当の属格名詞が現れ得る。その場合も、本節で扱っている表現と同様、属格名詞の部分が、属性の規定に重要な役割を果たす。

(iii) *kaikki-en lue-ttava kirja* 「誰でも読める本」
 all-PL.GEN read-PASS.PRES.PART.NOM book.NOM

(9) [asu-ttava] talo / huone
live-PASS.PRES.PART.NOM house.NOM room.NOM
「住める家／部屋」

(10) a. [sorme-n men-tävä] reikä
 finger-GEN go-PASS.PRES.PART.NOM hole.NOM
 「指が通るサイズの穴」

b. [käde-n | men-tävä⁷] aukko
 hand-GEN | go-PASS.PRES.PART.NOM hole.NOM
 「手が通るサイズの穴」

c. [miehe-n men-tävä] kolo
 man-GEN go-PASS.PRES.PART.NOM hole.NOM
 「男性が通れるサイズの穴」

d. [juuri ja juuri auto-n men-tävä] tie
 just and just car-GEN go-PASS.PRES.PART.NOM road.NOM
 「車一台がやっと通れる道」

「穴や道のサイズのモノ」を表わす属格名詞には、*piene-n poja-n*「小さな少年」、*hevose-n*「馬」、*koira-n*「犬」等々、様々なモノが入り得る。このタイプも、受動現在分詞と主名詞の関係が、「動詞－目的語」ではなく「動詞－場所格補部」である。動詞 *mennä*「行く」は自動詞であり、(10a-c)で *mennä* の受動現在分詞 *mentävä* で修飾されている主名詞 *reikä*, *aukko*, *kolo*「穴」は、(11)のように、文では *mennä* の目的語ではなく入格補部である。

7 この穴等のサイズを表す表現でも、部屋や家具が何人用かを現す表現同様、属格名詞と受動現在分詞が複合化することがある。

(11) Mies mene-e kolo-on / *kolo -a / *kolo-n. (cf.(10c))

man.NOM go-3SG hole-ILL hole-PAR hole-nACC

「男性が穴を通る。」

この表現も、事象叙述ではなく、穴や道の大きさを表わす属性叙述である。(10c)であれば、実際にある男性がその穴を通っているかは問題ではなく、「男性が通れるサイズの」という潜在的属性を表わしている。これも、受動現在分詞が可能というモダリティの意味を持っていることによる。「ある男性が通っている穴」といった事象叙述の解釈では、「動詞一場所格補部」という修飾関係の逸脱は起きないため、(10c)は非文になる。この構造も、主語を表わす属格名詞が不可欠である。大小に関わらず穴は空気であれ小さな虫であれ何かしらは通れるものであり、「何が通れるか」という受動現在分詞の主語にあたる属格名詞の部分だが、穴の性質にとって重要な情報だからである。

(12) *men-tävä reikä / aukko / kolo (cf. (10a-c))

go-PASS.PRES.PART.NOM hole.NOM hole.NOM hole.NOM

「int. 通る穴、通れる穴」

(10d)は(10a-c)と違って、受動現在分詞が修飾する名詞が「穴」ではなく「道」である。文に直すと、tie「道」は動詞 mennä「行く」の目的語ではなく、所格になる。

(13) Auto mene-e tie-llä / *tie-tä / *tie-n. (cf. (10d))

car.NOM go-3SG road-ADE road-PAR road-nACC

「車が道を通る。」

この場合も、サイズを表す。(10d)は、「歩行者専用ではなく車が通行可能な道」等の意味ではなく、「車が通れるサイズの道」を意味する。

このパターンの受動現在分詞 mentävä も、先程の家具等が何人用かを表す表現と同様、単独で語彙化・形容詞化している訳ではない。

繰り返しになるが、本小節で扱っているパターンは、家具等が何人用かを表す表現でも穴等の大きさを表す表現でもどちらでも、受動現在分詞の主語に相当する属格名詞が現れる。従来であれば、主語相当の語を明示する場合には動作主分詞を用いる(0章 2.4.5.3 節参照)が、本小節のパターンは動作主分詞で置き換えることは出来ない。

(14) a. *kahde-n perhee-n asu-ma talo (cf.(7a))

two-GEN family-GEN live-AGENT.PART.NOM house.NOM

「int. 2 家族用の家／2 家族が住んだ家」

b. *miehe-n mene-mä kolo (cf.(10c))

man-GEN go-AGENT.PART.NOM hole.NOM

「int. 男性が通れるサイズの穴／男性が通った穴」

動作主分詞には受動現在分詞のようなモダリティの意味がなく、性質ではなく事象を表わすからである。性質を表わすのでなければ、分詞が場所格補部相当の語を修飾するといった逸脱は起きないため、「2 人が住む部屋」「男性が通る穴」という事象叙述の解釈でも非文となる。

これらのサイズを表す受動現在分詞による修飾について、Hakulinen(1961)は以下のよう述べている。

it is most illuminative to examine these nominal forms in the light of the theory that Finnish “passive” forms were originally active forms of causative verbs. ... If we assume that sormen mentävä originally meant something like “causer of finger to go” ... it is not difficult to imagine semantic development of sormen mentävä reikä approximately from “hole-which-is-causer of finger to go” > “hole allowing finger to go” > “hole big enough for finger”

(Hakulinen 1961: 372)

なお、このサイズを規定する受動現在分詞も、修飾用法に加えて叙述用法でも用いることができる。

(15) a. Talo on [kahde-n perhee-n asu-ttava]. (cf. (7a))

house.NOM be.3SG two-GEN family-GEN live-PASS.PRES.PART.NOM

「家は2 家族用だ。」

b. Reikä on [sorme-n men-tävä]. (cf. (10a))

hole.NOM be.3SG finger-GEN go-PASS.PRES.PART.NOM

「穴は指が通るサイズだ。」

1.3 kunto 「状態」を修飾する受動現在分詞

三つ目は、目的語にも場所格補部にも相当しない語 *kunto* 「状態」が受動現在分詞で修飾されている表現である。受動現在分詞と主名詞が「動詞一項」という関係にないという点で非常に特殊であるにも関わらず、フィンランド語最大の文法書 *ISK*(2004)にも記述はなく、管見の限り Pekkarinen(2011: 48-49, 82-83)で少し言及されているだけである。Pekkarinen(2011)では、例文(16a, b)が挙げられ、「TAVA 分詞⁸は確かに他動詞的だが、主

⁸ = 受動現在分詞

名詞が意味的に分詞の動詞の目的語に相当しない **kunto** である結晶化したタイプもまた、例外をなしている。この構造では、前に現れた名詞の状態が特徴づけられている。」(：48)，「この表現タイプでは TAVA 分詞の意味はモダリティ的で、方言データでは全て可能の意味だった。」(：82)とだけ説明がなされている。そこでは、受動現在分詞と主名詞 **kunto** が「動詞－目的語」の関係にないこと、「～できる」という主語の特徴を描写する文であることが述べられている。しかし、文全体の構造については触れられていない。(16)のような文を本小節では便宜上「状態構文」と呼び、詳細な記述と分析を試みる。

- (16) a. ... pan-na tämä Haapamäe-n-Pori-n rata ... [juna-lla
put-AINF this. ϕ ACC Haapamäki-GEN-Pori-GEN track. ϕ ACC train-ADE
aje-ttava-an] kunto-on
drive-PASS.PRES.PART-ILL condition-ILL
「このハーパマキーポリ間の道を電車で通れる状態にする」
(Pekkarinen 2011 :49)
- b. jarrupala-t o-vat [vaihde-ttava-ssa] kunno-ssa
break-PL.NOM be-3PL change-PASS.PRES.PART-INE condition-INE
「ブレーキは換えるべき状態だ」
(Pekkarinen 2011:49)
- c. ne kypsy-vät nopeasti [syö-tävä-än] kunto-on
they.NOM ripe-3PL rapidly eat-PASS.PRES.PART-ILL condition-ILL
「それらは食べることができる状態に早く熟す」
(<http://mstrinile.blogspot.jp/2014/05/nokkossoosia.html>)
- d. sima-t alka-vat hiljalleen ol-la [jo
mead-PL.NOM start-3PL slowly be-AINF already
juo-tava-ssa] kunno-ssa
drink-PASS.PRES.PART-INE condition-INE
「ミードはもう飲める状態にゆっくりなりつつある」
(<http://maistuisvarmaansullekin.blogspot.jp/2013/04/vadelmasima.html>)

上の例(16)で、まず下線部だけに注目すると、名詞 **kunto**「状態」は動詞 **ajaa**「運転する」、**vaihtaa**「換える」、**syödä**「食べる」、**juoda**「飲む」の目的語でも場所格補部でもないにも関わらず、各動詞の受動現在分詞で修飾されている。受動現在分詞と **kunto** が文法的に修飾－被修飾の関係にあることは、格の一致からも明らかである。言い換えれば、動詞と項の関係にない両者が、文法的に修飾関係をなしている。下線部は主名詞にどの格を用いても動詞句や文には直せず、日本語学でいうところの「外の関係」(寺村 1993 他)だと見なせる。

- (17) *syö-dä kunno-n / kunto-a / kunno-ssa / kunno-sta /
 eat-AINF condition-nACC condition-PAR condition-INE condition-ELA
 kunto-on ...
 condition-ILL
 「lit. 状態を／で／から／に食べる」

kunto と似た意味であっても kunto 以外の語は主名詞として不可能で、かなり固定的な表現である。主名詞が kunto に固定され、修飾語には様々な動詞に由来する受動現在分詞が来ることから、各受動現在分詞が 1.1 節のように語彙化・形容詞化して目的語相当以外の語も修飾できるようになった訳ではないことは明らかである。

ただ、この表現は修飾関係の下線部だけ見るのでは不十分であり、文全体で捉える必要がある。文全体で見ると、それぞれ、文中のある要素 ((16a)であれば目的語の「道」、(16b-d)であれば主語の「ブレーキ」、「それら」、「ミード」) の状態について述べてられている。(16c)であれば、食べることができる状態になることを意味している。食べる対象物は kunto 「状態」ではなく ne 「それら」である。つまり、「食べる」の目的語に相当するのは、受動現在分詞に修飾された主名詞 kunto ではなく、文全体の主語 ne である。状態構文の主語は、受動現在分詞の主語や場所格副詞に相当する語などではだめで、目的語相当の語でなくてはならない。例えば時間が空いている、おなかがすいているなどの理由で「私は食べることができる状態である」、またはきれいに片付いている等の理由で「部屋はそこで食べることができる状態である」等と言うことはできない⁹。

- (18) a. # Minä ole-n [syö-tävä-ssä] kunno-ssa. (cf.(16c))
 I.NOM be-1SG eat-PASS.PRES.PART-INE condition-INE
 「int. 私は食べることができる状態だ。」
 b. # Huone on [syö-tävä-ssä] kunno-ssa. (cf.(16c))
 room.NOM be.3SG eat-PASS.PRES.PART-INE condition-INE
 「int. 部屋は食べることができる状態だ。」

文全体の主語が文中の受動現在分詞の目的語に相当する受動現在分詞の用法としては、状態構文の他にも、形容詞修飾、叙述文、可能構文がある (1 章 1.2 節参照)。形容詞修飾に関しては次の 2 節で後述する。

続いて、状態構文の構造を詳しく見ていこう。状態構文(19a)は、(19b)のようにパラフレーズすることが出来る。「飲む」対象は kunto 「状態」ではなく sima 「ミード」であり、「動詞-目的語」の関係にあるのは、修飾関係にあるイタリック部分 juotava 「飲むことができる」と kunto ではなく、網掛けした juotava と sima である。そのため、状態構文以外で

⁹ (18)は、誰かが「私」や「部屋」を食べる解釈になってしまう。

(19) a. Sima on juo-tava-ssa kunno-ssa.
mead.NOM be.3SG drink-PASS.PRES.PART-INE condition-INE
「ミードは飲むことができる状態だ。」

b. Sima on sellaise-ssa kunno-ssa, että si-tä voi juo-da¹⁰.
mead.NOM be.3SG such-INE condition-INE that it-PAR can.3SG drink-AINF
「ミードは飲むことができる状態だ。」

c. Sima on juo-tava.
mead.NOM be.3SG drink-PASS.PRES.PART.NOM
「ミードは飲むことができる。」

d. juo-tava sima
drink-PASS.PRES.PART.NOM mead.NOM
「飲むことができるミード」

e. * (Sima-n) kunto on juo-tava. (cf. (19c))
mead-GEN condition.NOM be.3SG drink-PASS.PRES.PART.NOM
「lit. (ミードの) 状態は飲むことができる。」

f. * juo-tava kunto (cf. (19d))
drink-PASS.PRES.PART.NOM condition.NOM
「int. 飲むことができる状態」

(20) a. Sima on hyvä-ssä kunno-ssa. (cf.(19a))
 mead.NOM be.3SG good-INE condition-INE
 「ミードはよい状態だ。」

 b. Sima on hyvä-ä. (cf.(19c))
 mead.NOM be.3SG good-PAR
 「ミードはよい／おいしい。」

 c. hyvä sima (cf.(19d))
 good.NOM mead.NOM
 「よい／おいしいミード」

95

d. (Sima-n) kunto on hyvä. (cf. (19e)(20b))

mead-GEN condition.NOM be.3SG good.NOM

「(ミードの) 状態はよい。」

e. hyvä kunto (cf. (19f)(20c))

good.NOM condition.NOM

「よい状態」

(19a)のような状態構文の受動現在分詞は、状態そのものよりも、ある状態を推論させるような記述である。だからこそ、パラフレーズした時に、(19b)のように、*sellaisessa*「そのような」と *että*「～という」を用いる。それに対して、(20a)の形容詞は、状態そのものを描写している。

意味に目を向けると、Pekkarinen(2011)の言うように、状態構文でも受動現在分詞はモダリティ的な意味を持つ。(16a,c,d)(19a)は「～できる」といった可能の意味である。パラフレーズした(19b)では、*voida*「～できる」という助動詞が用いられる。本小節冒頭でも触れたが、Pekkarinen(2011)の状態構文の方言(話し言葉)のデータでは、可能の意味に限られるという。新聞(書き言葉)のデータからの(16b)は、ブレーキが古い、壊れそうといった理由で「換えるべき」といった意味であり、義務・推奨を表わす。パラフレーズすると、必須文を用いた以下の(21)のようになる。

(21) Jarrupala-t o-vat sellaise-ssa kunno-ssa, että ne täyty-y
break-PL.NOM be-3PL such-INE condition-INE that they. φ ACC must-3SG
vaihta-a¹¹. (cf.(16b))
change-AINF

「ブレーキは換えるべき状態だ。」

(Pekkarinen 2011: 83)

以上、主名詞がそれを修飾する受動現在分詞の項ではない特殊な表現であるにも関わらず先行研究で記述が不十分だった状態構文について、修飾関係にはない主語といった文中の要素と受動現在分詞の関係を明らかにして詳細に論じた。

2. 受動現在分詞変格・様格による動詞修飾

続いて、受動現在分詞による動詞修飾に移る。2章2節で見たA不定詞基本形の場合とは異なり、受動現在分詞が動詞を修飾する場合は、変格や様格になり、受動現在分詞になる動詞の意味的制約もない。まず、受動現在分詞変格から見ていこう。

¹¹ (19b)と同じく、*että* 節中の *ne*「それら」(=*jarrupalat*「ブレーキ」)は、*vaihtaa*「換える」の目的語である(主語は不在)。

受動現在分詞変格は、「～するために」という「目的」を表す副詞的働きをする。変格自体は、その用法の一つとして、副詞的に用いられて「変化の結果」を表す（0章2.3.1節参照）。「変化の結果」を「到達」と考えると、受動現在分詞変格が目的を表すことは、もとの変格自体の意味用法からそうはずれてはいない。

(22) a. Mu-lla ei ole viisas-ten kive-ä [Jyväskylä-än
I-ADE NEG.3SG be wise-PL.GEN stone-PAR Jyväskylä-ILL
vie-tävä-ksi].

bring-PASS.PRES.PART-TRA

「私には、ユヴァスキュラに持っていく賢者の石がない。」

(1章(45)再掲, *ISK* 527)

b. Ovi on auki [kene-n tahansa kulje-ttava-ksi]
door.NOM be.3SG open anybody-GEN go-PASS.PRES.PART-TRA

「誰でも通れるように、ドアは開いている」

(1章(31a)再掲, *ISK* 506)

c. Isä to-i omeno-i-ta [las-ten
father.NOM bring-PAST.3SG apple-PL-PAR child-PL.GEN
syö-tävä-ksi].

eat-PASS.PRES.PART-TRA

「お父さんは、子ども達が食べるためにりんごを持ってきた」

(2章(16)再掲)

2章2節で述べた通り、かつてはA不定詞基本形も目的を表す動詞修飾として一般的に用いられていた。A不定詞変格も目的を表すが、その場合は主節の主語と不定詞の主語が同じであるという点で、受動現在分詞変格の場合とは異なる。

ISK(527)では、受動現在分詞変格は、以下の例(23)のように、*riittää*「十分である」、*jäädä*「残る」、*joutaa*「ふさわしい」、*kelvata*「十分よい」といった動詞と共に用いられる場合も、(22)の場合と区別せず、目的を表すとしている。

(23) Mikä ministeriö jouta-a [lakkaute-ttava-ksi]?
what.NOM ministry.NOM be.fit-3SG suppress-PASS.PRES.PART-TRA
「どの省が、廃止されるのに適しているだろうか？」

(1章(45b)再掲, *ISK* 527)

だが本論文では、いくつかの特定の動詞と共に用いられる受動現在分詞変格に関しては、動詞修飾に含めない。(22)では、受動現在分詞変格句（[]内の要素）は主文の動詞を修飾する

副詞的要素であり、なくても文は成り立つ ((24))。それに対して(23)では、(25)の例からも分かるように、受動現在分詞変格 *lakkautettavaksi* は文に必要な要素である。

(24) a. *Mu-lla ei ole viisas-ten kive-ä.* (cf. (22a))

I-ADE NEG.3SG be wise-PL.GEN stone-PAR

「私には賢者の石がない。」

b. *Ovi on auki.* (cf. (22b))

door.NOM be.3SG open

「ドアは開いている。」

c. *Isä to-i omeno-i-ta.* (cf. (22c))

father.NOM bring-PAST.3SG apple-PL-PAR

「お父さんはりんごを持ってきた。」

(25) * *Mikä ministeriö jouta-a?* ((cf. (23))

what.NOM ministry.NOM be.fit-3SG

「lit. どの省が適しているだろうか？」

受動現在分詞変格 *lakkautettavaksi* は、*joutaa* 「ふさわしい」 が要求する項であり、修飾要素とは呼べない。このようないくつかの〈動詞＋受動現在分詞変格〉は固定的表現であり、受動現在分詞の意味機能が「目的」からもややずれている。そのため、(23)のような例を(22)のような例と同列に扱うのは不適切であると考える。

次に、受動現在分詞様格による動詞修飾だが、こちらは、所有文において、義務や可能性を表す。そもそも様格自体は、状況や条件、一時的状態を表す (0章 2.3.1 節参照)。動詞修飾で用いられる受動現在分詞様格は、この様格自体の機能と、受動現在分詞の有するモダリティの意味が結びついている。

(26) a. *Poliisi-lla on [selvite-ttävä-nä-än] use-i-ta-kin*
 police-ADE be.3SG clear-PASS.PRES.PART-ESS-POSS.3 several-PL-PAR-PC
salaperäis-i-ksi jää-ne-i-tä tulipalo-j-a.
 mysterious-PL-TRA stay-ACT.PAST.PART-PL-PAR fire-PL-PAR

「警察には、解明すべきものとして、いくつかの謎のままの火事の案件がある。」

(1章(47)再掲, *ISK*: 527)

b. *Mei-llä ei ole tuloks-i-a [esite-ttävä-nä]*

we-ADE NEG.3SG be result-PL-PAR present-PASS.PRES.PART-ESS

「私達には紹介するような結果はない」

(1章(31b)再掲, *ISK*: 506)

受動現在分詞が変格であれ様格であれ、いずれも主文の名詞が、受動現在分詞のもとの動詞の目的語に相当する。所有文の(22a)と(26a,b)では、所有物 (viisasten kiveä「賢者の石」, tulipaloja「火事」, tuloksia「結果」)が、それぞれ受動現在分詞のもとの動詞 (viedä「持っていく」(> vietäväksi), selvittää「解明する」(> selvitetettävänään), esittää「紹介する」(> esitettävänä)) の目的語に相当する。他動詞文の(22c)では、文の目的語 omenoita「りんご」が、受動現在分詞 syötäväksi のもとの動詞 syödä「食べる」の目的語に相当する。自動詞文であれば、文の主語が、受動現在分詞のもとの動詞の目的語に相当する。しかし自動詞文の(22b)では、文の主語 ovi「ドア」が、受動現在分詞 kuljettavaksi のもとの動詞 kulkea「通る」の目的語ではなく、出格補部に相当する。このような「動詞一場所格補部」の関係にある不定形動詞と主文の名詞はこれまでも出てきたが、詳しくは5章に稿を譲る。

3. 受動現在分詞による形容詞修飾

受動現在分詞変格による形容詞修飾は、〈主語+olla+形容詞+動詞の不定形〉という形式において、A 不定詞基本形による形容詞修飾と同じである。(27)のように、受動現在分詞変格と A 不定詞基本形が入れ替え可能なこともある。

- (27) a. Työ on mahdoton [toteute-ttava-ksi
work.NOM be.3SG impossible.NOM carry.out-PASS.PRES.PART-TRA
/ toteutta-a].
carry.out-AINF
「仕事は実行するのが不可能だ。」
(ISK 542)
- b. Lepako-n musiikki on vaivattoman helppo-a
Lepakko-GEN music.NOM be.3SG easily easy-PAR
[nauti-ttava-ksi / nautti-a].
enjoy-PASS.PRES.PART-TRA enjoy-AINF
「レパッコの音楽はとても楽しみやすい。」
(ISK 543)

ただ、1章で既述の通り、A 不定詞基本形による形容詞修飾と比べて受動現在分詞変格の使用頻度はかなり低く、一緒によく用いられる形容詞にも違いがある。実際に用いられる受動現在分詞変格による修飾では、valmis「準備できた」や kypsä「熟した」等の、準備ができている状態を表す形容詞が用いられることが多いという(Pekkarinen 2005)。この事実は、そもそも変格が状態変化動詞と共にして変化の結果状態を表すことの延長線上にある。valmis「準備できた」や kypsä「熟した」などの状態変化を含意する形容詞とそうではない mahdoton「不可能な」な helppo「簡単な」といった形容詞とでは、受動現在分詞変格は前

者との親和性が高いのは、そのように説明できる。

- (28) a. Meri-tuomari-n siika-keitto on valmis
sea-judge-GEN whitefish-soup.NOM be.3SG ready.NOM
[nauti-ttava-ksi].
eat-PASS.PRES.PART-TRA

「海の判事のホワイトフィッシュスープは味わう準備ができています。」

(1 章(48a)再掲, *ISK* 542)

- b. Kinkku on valmis [tarjo-ttava-ksi].
ham.NOM be.3SG ready.NOM offer-PASS.PRES.PART-TRA
「ハムは提供する準備ができています。」

(Pekkarinen 2005: 137)

〈主語+olla+形容詞+受動現在分詞-変格〉に似た表現として、受動現在分詞が主格や分格の、〈主語+olla+形容詞+受動現在分詞-主格／分格〉といった、以下のような表現もある。(29)は受動現在分詞が主格、(30)は分格の例である。なお、Pekkarinen(2005)によると、受動現在分詞が主格のパターンでは、様々な動詞が受動現在分詞になりうるという。ということは、そこで用いられている受動現在分詞は、名詞として語彙化したものではない。

- (29) a. Hevonen on vaikea [hoide-ttava]
horse.NOM be.3SG difficult.NOM care-PASS.PRES.PART.NOM
「馬は世話するのが難しい」

(Pekkarinen 2005: 142)

- b. Sika on paha [nylje-ttävä]
pig.NOM be.3SG bad.NOM skin-PASS.PRES.PART.NOM
「豚は皮を剥ぐのがいやだ」

(Pekkarinen 2005: 131)

- (30) a. Syltty on mukava-a [syö-tävä-ä]
brawn.NOM be.3SG nice-PAR eat-PASS.PRES.PART-PAR
「赤身肉は食べるのによい」

(Pekkarinen 2005: 135)

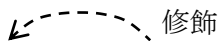
b. Väite-tä-än, että islantilainen kuu-maisema on
 claim-PASS-4 that Islandic.NOM moon-scape.NOM be.3SG
 tympeä-ä [katsel-tava-a].
 disgusting-PAR look-PASS.PRES.PART-PAR

「アイスランドの月面のような風景は見るのに嫌気がさす，と言われている。」

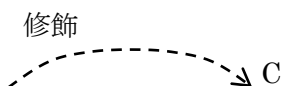
(Pekkarinen 2005: 135)

受動現在分詞の格が異なるだけで形式はよく似ているが，これらは変格の場合とは構造が異なり，形容詞修飾ではない。その違いについて見ていこう。受動現在分詞は，主格や分格では，前置された形容詞や動詞を修飾することはできない。その場合には，副詞的に用いられる変格または様格でなければならない。(29)(30)における主格と分格の受動現在分詞は，文の補語としての名詞の働きをしており，その前に置かれた形容詞に修飾されている。だからこそ，(30)のように，主語の性質によって補語の受動現在分詞が分格になる場合には，それを修飾する形容詞も格の一致によって分格になる。受動現在分詞が名詞として用いられることがあるのは，1章1.2節で述べた通りである。例えば(29a)であれば，「馬は，難しい世話されるものだ」が直訳になる。つまり，構造上，受動現在分詞が形容詞を修飾している変格の場合とは逆に，形容詞が受動現在分詞を修飾している。下に，受動現在分詞変格／A不定詞基本形の場合と，受動現在分詞主格／分格の場合との，構造の違いを示す。

(31) a.

S V C  修飾
 〈主語+olla+形容詞+受動現在分詞・変格／A不定詞基本形〉

b.

S V  C
 〈主語+olla+形容詞・主格／分格+受動現在分詞・主格／分格〉

このように(31a)と(31b)は修飾の構造が違うが，意味的にはそう変わらないとされている。確かに〈主語+olla+形容詞+不定形〉の部分だけを見ていると，意味的な違いは見えづらい。しかし実際は，文によって，主語の特徴・性質について述べている，またはそのような意味用法に限らないといった違いがある。以下で，文に理由を表す従属節を付加することによって，この違いを明らかにしていく。

(32) a. Matti on mahdoton haastatel-tava-ksi,
 Matti.NOM be.3SG impossible.NOM interview-PASS.PRES.PART-TRA
 koska hän on omapäinen.
 because he.NOM be.3SG self-willed.NOM
 「マッティは強情なので、インタビューするのは不可能だ。」

b. Matti on mahdoton haastatel-tava-ksi,
 Matti.NOM be.3SG impossible.NOM interview-PASS.PRES.PART-TRA
 koska hän on matka-lla.
 because he.NOM be.3SG travel-ADE
 「マッティは旅行中なので、インタビューするのは不可能だ。」

(33) a. Matti on mahdoton haastatel-tava,
 Matti.NOM be.3SG impossible.NOM interview-PASS.PRES.PART.NOM
 koska hän on omapäinen.
 because he.NOM be.3SG self-willed.NOM
 「マッティは強情なので、インタビューするのは不可能だ。」

b. * Matti on mahdoton haastatel-tava,
 Matti.NOM be.3SG impossible.NOM interview-PASS.PRES.PART.NOM
 koska hän on matka-lla.
 because he.NOM be.3SG travel-ADE
 「int. マッティは旅行中なので、インタビューするのは不可能だ。」

(32)は受動現在分詞変格による形容詞修飾で、「インタビューするのが不可能」な理由は、(32a)のように「マッティは強情だから」という主語の名詞の性格によるものでも、(32b)のように「マッティは旅行中だから」という主語の一時的な状態によるものでもよい。それに対して、受動現在分詞主格が用いられた(33)は、(33a)のようにマッティの性格が原因の場合はいいが、(33b)のようにマッティの一時的な状態が原因の場合は非文になる。つまり、受動現在分詞主格の場合は主語の恒常的な特徴・性質等について述べる文であり、受動現在分詞変格の場合はそのような意味的制約はない。このように、受動現在分詞の格が違うだけで一見意味もほとんど変わらない〈主語+olla+形容詞+受動現在分詞-変格／主格／分格〉も、実際は構造が(31)のように違い、意味的特徴も異なる。

最後に、文の主語と受動現在分詞のもとの動詞との解釈上の統語関係を確認する。受動現在分詞変格による形容詞修飾ではA不定詞基本形の場合と同じく、文の主語が、受動現在分詞のもとの動詞の目的語に相当する。例えば、(27a)の主語 *työ* 「仕事」は、受動現在分詞 *toteutettavaksi* のもとの動詞 *toteuttaa* 「実行する」の目的語に相当する。この「動詞-目的語」の関係は、受動現在分詞が主格や分格の場合でも同様である。(29a)の主語

hevonen「馬」は受動現在分詞 hoidettava のもとの動詞 hoitaa「世話する」の、(30a)の主語 syltty「赤身肉」は受動現在分詞 syötävää のもとの動詞 syödä「食べる」の、それぞれの目的語に相当する。

4. まとめ

本節では、受動現在分詞による修飾について本章で論じた内容をまとめる。1 節では、主名詞との関係が本来の「動詞－目的語」から逸脱した非典型的な名詞修飾を、3 つのパターンに分けて論じ、詳しい記述を試みた。1.1 節では、語彙化が進み、意味の特殊化が起こって場所格補部相当の名詞を修飾しているパターンを扱った。1.2 節は、家具や部屋が何人用かや穴等の大きさを表す固定的表現で、普通の名詞修飾ではあまり現れない属格名詞が、サイズという属性の叙述に不可欠な役割を果たしている。この表現でも、受動現在分詞と主名詞は「動詞－場所格補部」の関係にある。1.3 節は kunto「状態」を主名詞とする表現で、受動現在分詞が主名詞と統語関係にない点で、1.1 節や 1.2 節のパターンも含めた他の名詞修飾と大いに異なっている。受動現在分詞が、修飾する名詞ではなく主語等の文の要素と「動詞－目的語」の関係にあり、名詞句としてではなく文全体で捉える必要があることを論じた。2 節は、動詞修飾についてである。その中で、先行研究で目的を表す受動現在分詞変格と同列に並べられていた固定的表現に関しては別の扱いが必要であることを指摘した。3 節は形容詞修飾についてで、変格自体が持つ意味用法と絡めて論じた。また、受動現在分詞が主格や分格の場合との構造の違いにも触れた。

4 章 A 不定詞基本形の目的語と主名詞の格

2 章では、A 不定詞基本形による修飾について論じた。本章では、A 不定詞基本形の目的語や主名詞の格といった観点から、A 不定詞基本形による名詞修飾文を捉え直す。1 節は導入で、先行研究に簡単に触れた上で、実施したアンケート調査の内容について説明する。2 節では肯定文、3 節では否定文の場合の、名詞修飾用法の A 不定詞基本形の目的語の格について論じる。4 節では、〈主名詞+A 不定詞基本形〉を含む所有文・必須文的表現を扱う。最後の 5 節はまとめである。

1. 導入

A 不定詞基本形が名詞修飾用法の A 不定詞句内目的語の格選択に関しては、主名詞が文の目的語のケースを中心に、半世紀以上も前から研究・記述がある (Ikola 1950, Penttilä 1963, Timberlake 1974, Hakulinen&Karlsson 1975, ISK 2004, Harjunen 2013 他)。しかし、主に肯定文での ϕ 対格/n 対格という対立が扱われており、否定文での ϕ 対格/分格という対立は、ほとんど論じられていない。

本論文では、A 不定詞基本形の目的語の格選択に関して、フィンランド語母語話者への中規模アンケート調査を行った。調査は、2016 年 10 月 29 日～11 月 2 日に、フィンランドの主にトゥルクで行った¹。回答者は、フィンランド在住の母語話者計 35 名である。29 名は、トゥルク大学の先生方に協力していただき、フィンランド語を専門とする学生に回答してもらった。うち 26 名は授業中の、3 名は Moodle²を使つての回答である。フィンランド語が専門ではない 6 名には、直接会ってその場で回答してもらった。性別は男性 9 名、女性 25 名、無記入 1 名で、年齢別に見ると 10 代 3 名、20 代 24 名、30 代 5 名、40 代 2 名、50 代 1 名である。もっとも、結果に関して、フィンランド語を専攻する学生か否か、性別、年代による、明らかな差・傾向は見られなかった。アンケートは、本論文の末尾に掲載している。内容としては、A 不定詞基本形による名詞修飾文の目的語に関して、肯定文では ϕ 対格と n 対格、否定文では ϕ 対格と分格のうち、ふさわしい格の語を選んでもらった。どちらの形も適切な場合には両方を選ぶように、そしてその場合、二つの形に何らかの違い (例えば、片方が話し言葉でもう片方が書き言葉など) がある場合には、その旨をコメントしてもらうようにした。また、必要に応じて日本での追加調査も行った。

2. 肯定文

本節では、肯定文における A 不定詞基本形の包括目的語の格選択 (ϕ 対格/n 対格) について論じる。

¹ 1 名のみ、ヘルシンキで対面調査した。

² オープンソースの e ラーニングシステム。

2.1 全用法の A 不定詞基本形の目的語の格

本小節ではまず背景知識として、A 不定詞基本形の全用法における、包括目的語の格について概観する。

0 章 2.4.1 節で述べた通り、フィンランド語の目的語はまず、包括目的語の対格と部分目的語の分格に二分される。通常、肯定文における単数の包括目的語は、**n** 対格（単数属格と同形）で表わされる ((1a))。ただし、不定人称受動文 ((1b))、命令文 ((1c))、必須文 ((1d)) といった、動詞と一致する主格の主語が存在しない特殊文では、目的語が ϕ 対格（単数主格と同形）になる。

- (1) a. Minä lue-n kirja-n.

I-NOM read-1SG book-nACC

「私は本を読む。」

- b. Kirja lue-ta-an.

book. ϕ ACC read-PASS-4

「本が読まれる。」

- c. Lue kirja!

read.IMP book. ϕ ACC

「本を読みなさい。」

- d. Minu-n täyty-y luke-a kirja.

I-GEN need-3SG read-AINF book. ϕ ACC

「私は本を読まなければならない。」

それでは、肯定文において A 不定詞基本形が包括目的語をとる場合、**n** 対格と ϕ 対格のどちらの格が用いられるのだろうか。この格選択は A 不定詞基本形の用法ごとに異なるため、ISK(444-445, 493-507)の記述をもとに、以下の表にまとめる。

表 4-1 肯定文での A 不定詞基本形の目的語の格

	A 不定詞基本形の用法	目的語の格
a	主語	φ 対格
b	目的語	n 対格
c	必須文において	φ 対格
d	他の動詞連続において	n 対格
e	名詞修飾	n 対格 / φ 対格
f	形容詞修飾	— / φ 対格
g	動詞修飾	—
h	独立要素	φ 対格
i	疑問文の要素	φ 対格
j	関係節の要素	φ 対格
k	動詞連合において	n 対格

上の表から分かるように、修飾用法 (e - g) を除くと、A 不定詞基本形が目的語として用いられる場合と、他の動詞連続において、そして、動詞連合において用いられる場合のみ n 対格で、その他の場合には φ 対格になる。以下に、n 対格をとる三つの用法の例を挙げる。(2a) は目的語として、(2b) は他の動詞連続において、(2c) は動詞連合において用いられる A 不定詞基本形の例である。

- (2) a. Minä halua-n luke-a kirja-n.
I.NOM want-1SG read-AINF book-nACC
「私は本が読みたい。」
- b. Minä voi-n luke-a kirja-n.
I.NOM can-1SG read-AINF book-nACC
「私は本を読むことができる。」
- c. Hän on luke-a kirja-n.
he/she.NOM be.3SG read-AINF book-nACC
「彼／彼女は本を読みそうだ。」

いずれも、〈主動詞＋A 不定詞基本形〉((2)の下線部分)が、全体として述語を形成している。そしてこれらの場合、主文の影響を受けて、A 不定詞句内の目的語の格が変わる。例えば、否定文であれば分格に ((3a))、不定人称受動文であれば φ 対格になる ((3b))。

- (3) a. En halua luke-a kirja-a. (cf. (2a))

NEG.1SG want read-AINF book-PAR

「私は本を読みたくない。」

- b. Siellä halu-ta-an luke-a kirja. (cf. (2a))

there want-PASS-4 read-AINF book. ϕ ACC

「そこで本を読みたい。」

なお、表 4-1 にあるように、c) 必須文における A 不定詞句の包括目的語の格は ϕ 対格である。しかしこれは、そもそも必須文という特殊構文であるから n 対格ではなく ϕ 対格が選択されているのであって、A 不定詞句が主文から独立しているのではない。必須文においても、n 対格が選択される三つの用法 ((2)) と同じく、〈主動詞+A 不定詞基本形〉((4)下線部分)が全体として述語を形成しており、否定文では包括目的語は分格目的語になる ((4b))。

- (4) a. Minu-n täyty-y luke-a kirja.

I-GEN must-3SG read-AINF book. ϕ ACC

「私は本を読まなければいけない。」

- b. Minu-n ei tarvitse luke-a kirja-a.

I-GEN NEG.3SG need read-AINF book-PAR

「私は本を読まなくていい。」

次に、修飾用法における A 不定詞句内の格選択に目を向ける。まず動詞修飾だが、この用法では、A 不定詞基本形の目的語に相当する語が主文の項として存在する。つまり、A 不定詞句内に目的語が出現することはあり得ない。次いで形容詞修飾だが、この場合も動詞修飾と同様、基本的には A 不定詞基本形の目的語に相当する語が、主文の主語といった項として現れており、A 不定詞句内に目的語は現れない。ただし、2 章 3.2 節で扱った〈主語+on+形容詞+場所や時を表わす主名詞+A 不定詞基本形〉という構造の場合には、A 不定詞句内に目的語が現れるため、本章の研究対象に含める。A 不定詞句内の目的語の格選択が問題になるのは、主に名詞修飾用法である。他の用法の場合と違い、肯定文で n 対格と ϕ 対格の両方が見られるからである。次節で詳しく見ていく。

2.2 名詞修飾用法の A 不定詞基本形の目的語の格

名詞修飾用法でも、基本的には、肯定文で A 不定詞基本形の目的語は ϕ 対格である。(5)は主名詞が名詞修飾文の主語、(6)は補語、(7)は名詞修飾的形容詞修飾の補語であり、A 不定詞基本形の目的語はいずれも n 対格ではなく ϕ 対格である。

- (5) Aikomukse-ni [osta-a auto / * auto-n] kato-si
 intention.NOM-POSS.1SG buy-AINF car. ϕ ACC car-nACC disappear-PAST.3SG
 「車を買うという私の意志は消えた。」
- (6) Tämä on syy [tava-ta {ystävä / * ystävä-n}].
 this.NOM be.3SG reason.NOM meet-AINF friend. ϕ ACC friend-nACC
 「これが、友人に会う理由だ。」
- (7) Minu-sta 16 vuot-ta on sopiva ikä [aloitta-a
 I-ELA 16 year-PAR be.3SG suitable.NOM age.NOM start-AINF
 alkoholi-n {käyttö / * käytö-n}].
 alcohol-GEN use. ϕ ACC use-nACC
 「私の意見では、16才は飲酒を始めるのにふさわしい年齢だ。」

しかし、主名詞が主文の動詞の目的語や場所格補部³に相当する場合には、A 不定詞基本形の目的語は ϕ 対格のこともあれば n 対格のこともある。上述の先行研究では、主名詞が文全体の述語と緊密に結びついている場合には n 対格、両者の関係が緩ければ ϕ 対格だとされている。これは、「A 不定詞句が主名詞を修飾し〈主名詞+A 不定詞句〉が名詞句を形成している場合には ϕ 対格、主名詞が文の述語の一部として助動詞的まとまりを構成していると見なせる場合には n 対格になる」と言い換えられる。(8)(9)は、通常の名詞修飾の SVO 文とその構造である。実線の矢印は、格決定に関わる要素を示す。

- (8) Erkki Tuomioja torju-u Jere Lahde-n vaatimukse-n [saa-da
 Erkki Tuomioja.NOM reject-3SG Jere Lahti-GEN demand-nACC get-AINF
Elanto Inex Partnersi-n asiakkaa-ksi].
 Elanto. ϕ ACC Inex Partners-GEN customer-TRA
 「エルッキ・トゥオミオヤは、エラントをイネックスパートナーズの顧客として得ると
 いうイエレ・ラハティの要求を退ける。」

(ISK 897)

- (9) 
 主語 動詞 〈主名詞 [A 不定詞基本形 目的語]〉

³ 助動詞的まとまりをなす〈主文の動詞+主名詞〉の主名詞は、主文の目的語に相当することがほとんどである。そのため、本論文では、それらの例を用いて説明する。主名詞が主文の動詞の場所格補部に相当する数少ない固定的表現としては、*antaa tehtävä-ksi* 「与える 仕事・変格：～することを課す」などがある。

(10) Yrjö sa-i luva-n [kaata-a karhu-n].
 Yrjö.NOM get-PAST.3SG permission-nACC kill-AINF bear-nACC
 「ウルヨは、熊を倒す許可を得た。」

(10)では、〈主文の動詞 **saada**「得る」+主名詞 **lupa**「許可」〉が助動詞的働きをするまとまり ((11)の **【I】**) を構成している。A 不定詞句は、(9)のように主名詞を修飾しているというよりむしろ、その助動詞的まとまりが従えていると捉えられる。つまり、A 不定詞基本形の目的語は、動詞と一致する主格主語(**perussubjekti**)が存在する主文に組み込まれる。そのため、(10)の目的語 **karhu**「熊」は **n** 対格になっている。この目的語 **karhu** は、主文の動詞 **saada**「得る」の格支配によって **n** 対格になっているのではないことに留意されたい。その証拠として、(12)のように A 不定詞基本形が分格目的語を要求する動詞 ((12)の例では **opiskella**「勉強する」) であれば、その目的語 (**englanti-a**「英語」) は **n** 対格ではなく分格になる。

なお、上述の通り、〈主文の動詞＋主名詞〉が助動詞的なまとまりをなす場合に A 不定詞基本形の目的語が ϕ 対格でなく n 対格になるのは、動詞と一致する主格主語がある主文に組み込まれるからだが、この主文の主語が、A 不定詞基本形の意味上の主語と異なっている問題ではない。以下の(13)で、A 不定詞句 *lukea kirjan* 「本を読む」の意味上の主語は、主格主語の *äiti* 「母」ではなく向格名詞の *poika* 「息子」である。

- (13) Äiti anto-i poja-lle luva-n [luke-a kirja-n].
 mother.NOM give-PAST.3SG son-ALL permission-nACC read-AINF book-nACC
 「母親は、息子に本を読む許可を与えた。」

〈主文の動詞＋主名詞〉が助動詞的なまとまりを作っている場合には、A 不定詞句の意味上の主語に相当するかどうかに関わらず、とにかく動詞と一致する主格主語が存在するため、目的語は ϕ 対格ではなく n 対格になる⁴。

ここまで見てきたように、肯定文において、通常の名詞修飾の SVO 文では A 不定詞基本形の目的語は ϕ 対格だが、主名詞が主文の述語の一部として助動詞的なまとまりを構成している場合には n 対格になる。つまり、文の構造の違いが目的語の格選択の違いに反映されている。ただ、この格選択には揺れがあり、(14)のように、n 対格と ϕ 対格がどちらも容認される場合もあることも、先行研究では言及されている (ISK 897, Ilsa 他 2012, Harjunen 2013 等)。

- (14) Tuote tarjoa-a esimerkiksi mahdollisuude-n [otta-a
 product.NOM offer-3SG for.example possibility-nACC take-AINF
 turvallinen yhteys / turvallise-n yhteyde-n hotelli-sta
 safe. ϕ ACC contact. ϕ ACC safe-nACC contact-nACC hotel-ELA
 yritykse-n sähköposti-järjestelmä-än].
 company-GEN email-system-ILL
 「製品は例えば、ホテルから会社の e メールシステムに安全に接続することを可能にしてくれる。」

(Harjunen 2013: 1)

Harjunen(2013)は、この ϕ 対格／n 対格の格選択の境界は今日でははっきりしないとした上で、アンケートとコーパスによって、格選択の傾向について調査した。彼の調査からは、母語話者間でも n 対格と ϕ 対格の選択にはかなりばらつきがあることが分かる。格選択の傾向は文によって異なり、n 対格もしくは ϕ 対格片方の選択が優勢の文もあるが、文によっては選択の優勢度にあまり差が出なかった。例えば以下の文(15)において、A 不定詞基本形 *valita* 「選ぶ」の目的語 *teema* 「テーマ」の格に関して、全体の約 54%の人が n 対格を、約 35%の人が ϕ 対格を選び、残りの約 10%の人が「どちらでもよい」を選んでいる (Harjunen 2013: 60)。

⁴ 使役文も同様に、A 不定詞句の意味上の主語は、主格主語（下の例では *äiti* 「母」）ではなく属格名詞（*poja-n* 「息子」）だが、A 不定詞句の目的語は n 対格になる（*kirja-n* 「本」）。

(i) Äiti anto-i poja-n luke-a kirja-n.
 mother.NOM give-PAST.3SG son-nACC read-AINF book-nACC
 「母親は息子に本を読ませた。」

(15) Lisäksi hän tarjoa-a hei-lle tilaisuude-n [vali-ta myös
in.addition he/she.NOM offer-3SG they-ALL chance-nACC select-AINF also
teema / teema-n].

theme. ϕ ACC theme-nACC

「加えて、彼／彼女は彼らに、テーマも選ぶ機会を与える。」

(Harjunen 2013: 60)

また、Harjunen(2013)は社会言語学的な調査もしており、それによると、20才以下のほうが40才以上よりも、そして男性のほうが女性よりもn対格を選ぶ傾向がある。2都市、タンペレとポリ⁵間ではあまり差がない。なお、同じ〈動詞+主名詞〉の組み合わせであっても、文によって格選択が幾分異なる場合があり、語の組み合わせだけで一概に決まる訳ではないらしい⁶。

本論文のアンケート調査でも、格選択に関して揺れが見られた。まず(16)は、アンケートの例文番号[6]にあたる。

(16) Yrjö laati suunnitelma-n [kaata-a
Yrjö.NOM work.out.PAST.3SG plan-nACC kill-AINF
{ karhu / karhu-n }].

bear. ϕ ACC bear-nACC

「ウルヨは熊を倒す計画を立てた。」

この文では、35名中、25名が ϕ 対格を、3名がn対格を、7名が両方を選んだ。この文は、先行研究 (Hakulinen & Karlsson 1975: 343) では ϕ 対格の例として挙げられているが、3分の1弱がn対格か両方を選んでいる。

ISK(897)は、主名詞に所有接尾辞が付いてA不定詞基本形の包括目的語が ϕ 対格になっている文を挙げており、その一つが(17)である。(17)は、主名詞oikeus「権利」に3人称の所有接尾辞-nsAが付いている。

(17) .. uhri menettä-ä oikeute-nsa⁷ [nosta-a syyte].
victim.NOM lose-3SG right.nACC-POSS.3 raise-AINF indictment. ϕ ACC

「… 犠牲者は、告発する権利を失う。」

(ISK 897)

⁵ 方言区分としては、タンペレはハメ方言、ポリは南西方言に属する。

⁶ Harjunen (2013)は、主語の動作主性や有生性、モダリティ、時制といった要素が、この格選択に多少なりとも関わっているとしている。本論文では、この主張の妥当性について検証することはしない。

⁷ 所有接尾辞が付くと、格語尾の子音は消失する。ここでは、n対格のnが消失している。

しかし、アンケート調査で(18) (=アンケート調査の[8]) について聞いたところ、 ϕ 対格が 14 名、n 対格が 15 名、両方が 5 名、無記入が 1 名で、 ϕ 対格と n 対格が拮抗していた。つまり、実際の使用においては、主名詞に所有接尾辞が付いているからといって A 不定詞基本形の目的語が ϕ 対格に決まる訳ではない。

- (18) Uhri menettä-ä oikeute-nsa [nost-a
 victim.NOM lose-3SG right.nACC-POSS.3 raise-AINF
 { syyte / syyttee-n }].
 indictment. ϕ ACC indictment-nACC
 「犠牲者は、告発する権利を失う。」

次の(19)は、アンケート調査の[10]の文にあたる。

- (19) Hän tarjoa-a hei-lle tilaisuude-n [vali-ta
 he/she.NOM offer-3SG they-ALL chance-nACC choose-AINF
 { teema / teema-n }].
 theme. ϕ ACC theme-nACC
 「彼／彼女は彼らに、テーマを選ぶ機会を提供する。」

(19)は、Harjunen(2013: 60)で ϕ 対格か n 対格かの選択に揺れがあるとされている(15)から、修飾語等を省いて簡略化した文である。(19)のアンケート結果は、 ϕ 対格 12 名、n 対格 15 名、両方 7 名、無記入 1 名で、確かに揺れが見られた。

最後の(20)も、Harjunen(2013: 1)で ϕ 対格と n 対格のどちらも用いられうるとしている文(14)から修飾語等を省いて簡略化した文で、アンケートの[12]にあたる。

- (20) Tuote tarjoa-a mahdollisuude-n [otta-a
 product.NOM offer-3SG possibility-nACC take-AINF
 { turvallinen yhteys / turvallise-n yhteyde-n }].
 safe. ϕ ACC contact. ϕ ACC safe-nACC contact-nACC
 「製品は、安全に接続することを可能にしてくれる。」

(20)のアンケート結果も、 ϕ 対格 15 名、n 対格 15 名、両方 5 名で、 ϕ 対格と n 対格が同数だった。

ここまで、主名詞が文の目的語の場合に、A 不定詞基本形の包括目的語は ϕ 対格／n 対格で揺れがあることを、アンケート調査によって示した。この事実自体は、先行研究で指摘されている通りである。ここからは先行研究から一歩進んで、 ϕ 対格の文と n 対格の文の意

味的な違いについて論じる。

アンケート調査において、(16)で「両方」を選んだ2名の回答者から、興味深いコメントが寄せられた⁸。一つは、「kaataa karhu のほうが確かにより規範的だが、karhun も自然に聞こえ、熊が本当に倒された（＝死んだ）という印象を与える」、二つ目が、「karhun は既知の熊、karhu は行き当たりばつりの熊を意味する」というものである。追加調査にて複数の母語話者に確認したところ、確かにそのようなニュアンスの差があるとのことだった。φ対格の文は「不特定の熊で、仕留めるかは不確実」、n対格の文は「計画を立てる前にその熊に出会っていて、完全に仕留めることが含意される」という。つまり、φ対格目的語は不特定の対象を表し、n対格目的語の場合は行為の完了が含意され特定の対象を表す。さらに、(19)の文のA不定詞基本形の目的語を teema 「テーマ」から kahvi 「コーヒー」に変えた文(21)に関しても、φ対格の文は「コーヒーの種類を選ぶ」、n対格の文は「コーヒー、紅茶、ジュースといった複数の飲み物の中からコーヒーを選べる」といった意味になるという。

(21) Hän tarjoa-a hei-lle tilaisuude-n [vali-ta kahvi /
he/she.NOM offer-3SG they-ALL chance-nACC choose-AINF coffee. φ ACC
kahvi-n].
coffee-nACC
「彼／彼女は彼らに、コーヒーを選ぶ機会を提供する。」

これも、φ対格目的語の指示対象は不特定、n対格目的語の指示対象は特定であることを示している。φ対格の場合、例えばブラジル産、グアテマラ産、コロンビア産、エチオピア産といった数あるコーヒーの選択肢があり、どれもコーヒーであることに変わりないので、「コーヒーを選ぶ」の「コーヒー」は、ブラジル産などどれかを指示している訳ではなく、コーヒーは特定されない(図1)。一方n対格の場合、選択肢にはコーヒー、紅茶、ココア、ジュース等様々な飲み物があり、その中から選んだコーヒーは特定される(図2)。

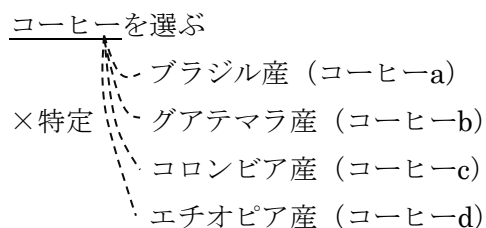


図1 コーヒーを選ぶ (φ対格)

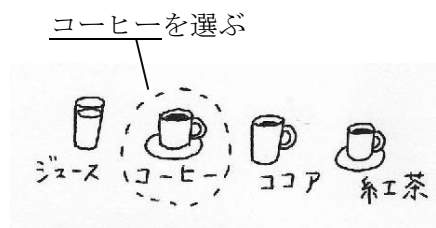


図2 コーヒーを選ぶ (n対格)

⁸ 本文で後述する意味的な違いに関する2つのコメントとは別に、「φ対格が口語でn対格が書き言葉」という文体差に関するコメントも、1名が4文全てに、1名が(16)に、2名が(19)に対して寄せている。無標形式のφ対格が、n対格からnを落とした簡略形の口語表現だと認識されていると思われる。

このように、 ϕ 対格目的語の指示対象は不特定、 n 対格目的語の指示対象は特定である。実際、 n 対格目的語には指示形容詞 *tämä* 「この」が付けられるのに対して、 ϕ 対格目的語には付けられないという。(22)は(16)、(23)は(21)の A 不定詞基本形の目的語に *tämä* 「この」を付加した文だが、それぞれ ϕ 対格の(a)は非文、 n 対格の(b)は適格文という判断だった⁹。

(22) a. * Yrjö laati suunnitelma-n [kaata-a tämä
 Yrjö.NOM work.out.PAST.3SG plan-nACC kill-AINF this. ϕ ACC
 karhu].
 bear. ϕ ACC
 「int. ウルヨはこの熊を倒す計画を立てた。」

b. Yrjö laati suunnitelma-n [kaata-a tämä-n
 Yrjö.NOM work.out.PAST.3SG plan-nACC kill-AINF this-nACC
 karhu-n].
 bear-nACC
 「ウルヨはこの熊を倒す計画を立てた。」

(23) a. * Hän tarjoa-a hei-lle tilaisuude-n [vali-ta tämä
 he/she.NOM offer-3SG they-ALL chance-nACC choose-AINF this. ϕ ACC
 kahvi].
 coffee. ϕ ACC
 「int. 彼／彼女は彼らに、このコーヒーを選ぶ機会を提供する。」

b. Hän tarjoa-a hei-lle tilaisuude-n [vali-ta tämä-n
 he/she.NOM offer-3SG they-ALL chance-nACC choose-AINF this-nACC
 kahvi-n].
 coffee-nACC
 「彼／彼女は彼らに、このコーヒーを選ぶ機会を提供する。」

〈主文の動詞＋主名詞〉の結合度が微妙でどちらの構造とも捉えられそうな場合、格の違いに反映される構造の違いによって、文にニュアンスの違いが生まれると考えられる。この違いは、以下のように説明できる。(16)を例に、まず n 対格の文から見ていこう。 n 対格の場合、以下の様に、主文の動詞 *laati* 「立てる」と主名詞 *suunnitelma-n* 「計画」が助動詞的なまとまりをなしており、A 不定詞基本形 *kaataa* 「倒す」も含めて、述部を形成している。

⁹ もっとも、A 不定詞基本形に修飾されている通常の ϕ 対格目的語には(ii)のように *tämä* が付けられるため、この違いは ϕ 対格と n 対格の対立がある場合に限られるということになる。

(ii) Aikomukse-ni [osta-a tämä auto] kato-si.
 intention.NOM-POSS.1SG buy-AINF this. ϕ ACC car. ϕ ACC disappear-PAST.3SG
 「この車を買うという私の意志は消えた。」

- (21) Julkisuute-en tul-lut tappelu ei ole johtaja
 public-ILL come-ACT.PAST.PART.NOM fight.NOM NEG.3SG be director.NOM
 Jorma Sairase-n miele-stä riittävä syy
 Jorma.NOM Sairanen-GEN opinion-ELA enough.NOM reason.NOM
 [lennättä-ä tv-toimittaja-a kuvaruudu-sta].
 fly-AINF TV-reporter-PAR screen-ELA
 「ディレクターのヨルマ・サイラネンの意見では、公になった争議は、画面から TV キ
 ャスターを行かせるのに十分な理由ではなかった。」
- (ISK: 891)

(21)は、主名詞 *syy*「理由」が主文の補語である通常の名詞修飾文だが、A 不定詞基本形の目的語 *tv-toimittaja*「TV キャスター」は、 ϕ 対格ではなく否定の影響を受けて分格になっている。本節では、否定文での A 不定詞基本形の目的語の格選択の実態を、アンケート調査も用いて明らかにする。

まず、主名詞が主語と場所格副詞の場合は、 ϕ 対格になる。主文の否定の影響を受けて分格になることはない。この限りでは、肯定文でも否定文どちらとも ϕ 対格である。(22)は主名詞が主語、(23)は副詞的な内格名詞の例である。

- (22) Aikomukse-ni [osta-a auto / *auto-a] ei
intention.NOM-POSS.1SG buy-AINF car. ϕ ACC car-PAR NEG.3SG
kadon-nut.
disappear-ACT.PAST.PART.NOM
「車を買うという私の意志は消えなかった。」

- (23) En voi teh-dä mitään pyrkimykse-ssä-mme
NEG.1SG can do-AINF anything.PAR effort-INE-POSS.1PL
[kaata-a karhu / *karhu-a].
kill-AINF bear. φ ACC bear-PAR
「熊を倒す私達の努力において、私は何もできない。」

次は、主名詞が補語の場合である。

- (24) Tāmā ei ole syy [tava-ta { ystävä / ystävä-ä }].
 this.NOM NEG.3SG be reason.NOM meet-AINF friend. ϕ ACC friend-PAR
 「これは、友人に会う理由ではない。」

(25) Minu-sta 16 vuot-ta ei ole sopiva ikä [aloitta-a
 I-ELA 16 year-PAR NEG.3SG be suitable.NOM age.NOM start-AINF
 alkoholi-n { käyttö / käyttö-ä }.
 alcohol-GEN use. ϕ ACC use-PAR
 「私の意見では、16 才は飲酒を始めるのにふさわしい年齢ではない。」

(24)は通常の名詞修飾の SVC 文でアンケートの[17]にあたり、(25)は名詞修飾的な形容詞修飾の SVC 文でアンケートの[5]にあたる。補語である主名詞自体 ((24)の *syy* 「理由」、(25)の *sopiva ikä* 「ふさわしい年齢」) は否定文でも分格にならず必ず主格のままだが、A 不定詞基本形の目的語 ((24)の *ystävä* 「友人」、(25)の *käyttö* 「使用」) は、どちらも圧倒的に分格が選ばれた。35 名中、(24)は分格 32 名、 ϕ 対格 1 名、両方 2 名で、(25)は分格 27 名、 ϕ 対格 3 名、両方 5 名である。(25)では、両方を選んだ回答者でもそのうち 2 名が、「分格のほうがいい」とコメントしている。どちらの文も肯定文 ((6)(7)) ではほぼ全員が ϕ 対格を選んでおり、肯定文と否定文とでの違いが明らかに見て取れる。

主名詞が所有文¹⁰の所有物の場合も、分格になる。

(26) Minu-lla ei ole aikomus-ta [osta-a auto-a / *auto].
 I-ADE NEG.3SG be intention-PAR buy-AINF car-PAR car. ϕ ACC
 「私は車を買うつもりはない。」

(26)において、否定の影響によって、所有文の所有物である主名詞 *aikomus* 「意図」も、そして A 不定詞基本形の目的語である *auto* 「車」も分格になっている。

それでは、肯定文で *n* 対格と ϕ 対格の揺れが見られる SV 文ではどうだろうか。アンケート調査結果は、(27)-(30)の 4 文とも分格が優勢であった。否定の影響を受けて、文の目的語である主名詞 ((27)を例にとると *suunnitelma* 「計画」) も、A 不定詞基本形の目的語 ((27)では *karhu* 「熊」) も、どちらも分格になる。(27)は、分格 24 名、 ϕ 対格 6 名、両方 4 名、その他¹¹ 1 名だった。この文は、アンケートの[7]にあたり、肯定文の(16)と対応する。

(27) Yrjö ei laati-nut suunnitelma-a [kaata-a
 Yrjö.NOM NEG.3SG work.out-ACT.PAST.PART.NOM plan-PAR kill-AINF
 { karhu / karhu-a }.
 bear. ϕ ACC bear-PAR
 「ウルヨは、熊を倒す計画を立てなかった。」

¹⁰ 所有文全般に関しては、次節で詳しく論じる。

¹¹ そのような選択肢はなかったのだが、*n* 対という回答だった。

(28)は、分格 29 名、 ϕ 対格 1 名、両方 4 名、無記入 1 名だった。アンケートの[9]にあたり、肯定文の(17)に対応する文である。

(28) Uhri ei menetä oikeut-ta-an [nost-a
 victim.NOM NEG.3SG lose right-PAR-POSS.3 raise-AINF
 { syyte / syyte-ttä }].
 indictment. ϕ ACC indictment-PAR
 「犠牲者は、告発する権利を失わない。」

(29)は、分格 31 名、 ϕ 対格 0 名、両方 4 名だった。アンケートの[11]にあたり、肯定文の(19)に対応する。

(29) Hän ei tarjota hei-lle tilaisuut-ta [vali-ta
 he/she.NOM NEG.3SG offer they-ALL chance-PAR choose-AINF
 { teema / teema-a }].
 theme. ϕ ACC theme-PAR
 「彼／彼女は、彼らに、テーマを選ぶ機会を提供しない。」

(30)は、分格 31 名、 ϕ 対格 0 名、両方 4 名だった。この文はアンケートの[13]にあたり、肯定文の(20)と対応する。

(30) Tuote ei tarjota mahdollisuut-ta [otta-a
 product.NOM NEG.3SG offer possibility-PAR take-AINF
 { turvallinen yhteys / turvallis-ta yhteyt-tä }].
 safe. ϕ ACC contact. ϕ ACC safe-PAR contact-PAR
 「製品は、安全に接続することを可能にしてくれない。」

肯定文では、(27)は ϕ 対格が優勢であり、(28)-(30)は n 対格と ϕ 対格が拮抗している。しかし否定文では、どの文でも圧倒的に分格が選ばれている。この SVO 文からも、肯定文と否定文とでの格選択の違いがはっきりと分かる。

これまでの例は ϕ 格か分格かがはっきりと分かれたが、主名詞が述語の場所格補部の文では、揺れが見られた。

(31) En ole iloinen komissio-n [aikomukse](#)-sta [teh-dä
 NEG.1SG be glad.NOM commission-GEN intention-ELA do-AINF
 {suositus / suositus-ta }].
 recommendation. ϕ ACC recommendation-PAR
 「私は、推薦をするという理事会の意向が嬉しくない。」

(31)は、アンケートの文[15]にあたる。主名詞 *aikomus* 「意図」が、形容詞述語 *olla iloinen* 「嬉しい」の出格補部である。結果は分格 20 名、 ϕ 対格 13 名、両方 2 名で、分格のほうが比較的多いが、これまでの文より判断が割れた。主名詞が動詞の場所格補部である例については、追加調査にて 11 名の母語話者に尋ねた¹²。(32)(33)はどちらも、主名詞が動詞の出格補部である。

(32) Oranssi ry ei ole luopu-nut
 Oranssi.NOM group.NOM NEG.3SG be give.up-ACT.PAST.PART.NOM
[hankkee](#)-sta-an [saa-da rakennus / rakennus-ta nuoriso-n
 plan-ELA-POSS.3 get-AINF building. ϕ ACC building-PAR the.young-GEN
 käyttö-ön].
 use-ILL
 「オランシグループは、若者が使うための建物を得るという計画を諦めなかった。」

(33) Jorose-lta kysy-tt-i-in miksi hei-lle ei ole
 Joronen-ABL ask-PASS-PAST-4 why they-ALL NEG.3SG be
 kerro-ttu [mahdollisuude](#)-sta [saa-da
 talk-PASS.PAST.PART.NOM possibility-ELA get-AINF
 uusi työntekijä / työntekijä-ä
 new. ϕ ACC employee. ϕ ACC employee-PAR
 oppi-sopimus-koulutukse-n kautta].
 learning-agreement-training-GEN through
 「見習い制度を通して新しい従業員を得る可能性についてなぜ自分達に話されないのかと、ヨロネンに質問された。」

(32)(33)は、ISK(891)で「否定の影響は、名詞句の一部である不定詞句には及ばない」として挙げられている ϕ 対格の例(34)(35)をもとにしている。

¹² その際に、否定以外の理由で分格が選ばれないように、はじめに目的語が ϕ 対格の肯定文を示し、その文が否定文になったら目的語の格は ϕ 対格と分格どちらになるかと質問した。

- (34) Oranssi ry ei ole luopu-nut
 Oranssi.NOM group.NOM NEG.3SG be give.up-ACT.PAST.PART.NOM
hankkee-sta-an [saa-da rakennus nuoriso-n käyttö-ön].
 plan-ELA-POSS.3 get-AINF building. ϕ ACC the.young-GEN use-ILL
 「オランシグループは、若者が使うための建物を得るという計画を諦めなかった。」
 ISK(891)

- (35) Jorose-lta kysy-tt-i-in miksi hei-lle ei ole
 Joronen-ABL ask-PASS-PAST-4 why they-ALL NEG.3SG be
 kerro-ttu mahdollisuude-sta [saa-da uusi
 talk-PASS.PAST.PART.NOM possibility-ELA get-AINF new. ϕ ACC
 työntekijä oppi-sopimus-koulutukse-n kautta].
 employee. ϕ ACC learning-agreement-training-GEN through
 「見習い制度を通して新しい従業員を得る可能性についてなぜ自分達に話されないの
 かと、ヨロネンは質問された。」
 ISK(891)

しかし、(32)(33)の母語話者の回答は、むしろ分格のほうが多かった。(32)は ϕ 対格3名、分格5名、両方3名（うち1名は、 ϕ 対格のほうがよさそうだとコメント）、(33)は ϕ 対格3名、分格7名、両方1名だった。どちらも分格のほうが多いが、分格が圧倒的だった主名詞が目的語や補語の場合に比べると、揺れがある。

上記の結果をまとめると、主名詞が文の主語、場所格副詞の場合には、A不定詞基本形の目的語は否定文でもその影響を受けず ϕ 対格である。一方、主名詞が文の目的語、補語、所有文の所有物の場合には、否定の影響を受けて分格になる。なお、否定文で主名詞自体が分格になるとA不定詞基本形の目的語も分格になる、という訳ではないことに注意されたい。補語自体は否定文でも分格にならないが、補語を主名詞とするA不定詞句内目的語は分格になるからである。規範文法では名詞修飾のA不定詞句内目的語は主文の否定の影響を受けず主格のはずだが、実際は、主名詞が主文の述語内にある場合は分格が選ばれている¹³。そして主名詞が主語や場所格補部の場合には、その主名詞句は否定の影響が及ぶ範囲外にあるため、 ϕ 対格のままである。主名詞が述語の場所格補部の場合には、 ϕ 対格か分格かで母語話者間にも揺れがあるが、場所格補部は動詞との緊密度が目的語ほど近くはないが場所格副詞ほど遠くはないためであろう。以上、実際の使用では、否定文におけるA不定詞

¹³ (32)(33)に対して、「日常の話し言葉では分格、仕事での書き言葉では ϕ 対格」というコメントが寄せられている。註8に記した通り、肯定文の ϕ 対格／n対格の対立では無標形式の ϕ 対格のほうが口語だと見なされているようだが、否定文の ϕ 対格／分格の対立では、 ϕ 対格が無標形式であるにも関わらず書き言葉だと見なされている。母語話者に、否定文では ϕ 対格のほうが規範であるという意識があることが分かる。

基本形の目的語の格は肯定文の場合とは別の理由によって選択されていることを示した。

4. 所有文・必須文的表現¹⁴

本節では、〈コピュラ動詞 on + 主名詞 + A 不定詞基本形〉という形式である所有文と必須文的表現を取り上げ、構造内部の結合度に関する段階性を、主名詞と A 不定詞基本形の目的語の格に注目して記述・整理する。従来、問題の構造における結合度の強弱は、2 節で扱った主名詞が文の目的語である文の A 不定詞基本形の目的語の格選択と関連づけて記述されてきた。本節では所有文と必須文的表現に目を向け、さらに主名詞の格も考慮に入れることで、結合度強弱の段階性を精緻化する。

A 不定詞基本形を含む所有文・必須文的表現について論じる前に、通常的所有文と必須文について再確認しておく（詳しくは 0 章 2.4.2 節、2.4.3 節参照）。「X には Y がある」「X は Y を持っている」という意味を表す所有文は、〈X-所格 + on + Y-主格／分格〉という形式で、X が所有者、Y が所有物である。on はコピュラ動詞 olla の 3 人称単数形で、X と Y も一致しない。所有物である名詞は、肯定文では主格 ((36a))、または名詞の種類によっては分格だが、否定文では一律に分格になる ((36b))。

(36) a. Minu-lla on pikku-sisko.

I-ADE be.3SG little-sister.NOM

「私には妹がいる。」

b. Minu-lla ei ole pikku-sisko-a.

I-ADE NEG.3SG be little-sister-PAR

「私には妹はいない。」

ただし、「寒気、食欲、空腹、のどの渇き、鼻水、咳、熱、アレルギー、痛み、持病」といった身体状況を表す場合 ((37)) や、否定が所有物ではなくその修飾語にかかる場合には、例外的に、否定文でも所有物は分格ではなく主格のままである。

(37) Minu-lla ei ole huono olo. (0 章(72)再掲)

I-ADE NEG.3SG be bad.NOM feeling.NOM

「私は気分が悪くはない。」

必須文は、「～しなければいけない」という意味を表すモダリティ表現である。行為者が属格で表され、täytyä や pitää といった第一動詞が 3 人称単数で、そして第二動詞が A 不定詞基本形で続く。包括目的語は ϕ 対格になり ((4a))、否定文では分格になる ((4b))。

それでは、〈主名詞 + A 不定詞基本形〉を含む所有文や必須文的表現では、主名詞や A 不

¹⁴ この節は、拙稿(2017 近刊)に、加筆・修正を加えたものである。

定詞基本形の目的語の格選択はどうなるだろうか。まず、所有文から見ていこう。前節で見たように、主名詞が文の目的語の場合には、主名詞が主文の動詞と助動詞的なまとまりを形成している場合に、A 不定詞基本形の目的語の格は ϕ 対格ではなく **n** 対格になった。先行研究では、むしろ所有文の場合に、結合した表現が多く見られると言われている。例えば *ISK*(: 502) は A 不定詞基本形の用法の箇所、確立された表現では、A 不定詞句はもはや主名詞句に属するのではなく動詞 **on** と述語を形成していると解釈できる、と述べている。そして例として、〈**on+oikeus** 「権利」〉や〈**on+toivo** 「望み」〉を挙げている¹⁵。だが、A 不定詞基本形の目的語の格選択に関しては、主名詞が文全体の主語、存在文・所有文における存在物・所有物、状況文の補語の場合、A 不定詞句内の包括目的語は ϕ 対格であるとしか記述されておらず (*ISK*: 895)、A 不定詞句が主文レベルにないかそれとも **on** と結びついて述語の一部となっているかという構造的違いと、それに密接に関係するはずの A 不定詞基本形の目的語の格選択とが結びつけられていない。確かに表面上は、主名詞が主文の主語や補語もしくは主文の動詞と結合していない目的語の場合も、所有文における場合も、同じ ϕ 対格になってしまうが、実際はその格選択の理由が異なるのである。前者において A 不定詞句内の目的語が ϕ 対格なのは、A 不定詞句が主名詞を修飾しており、主文レベルにないからである。それに対して、所有文で目的語が ϕ 対格なのは、そもそも所有文では主格の主語が主文に存在しないからだという、A 不定詞句の独立性とは別の理由によるものである。そして否定文では、目的語は必ず分格になる。

(38) a. 肯定文

Minu-lla on aikomus [osta-a auto].
 I-ADE be.3SG intention.NOM buy-AINF car. ϕ ACC
 「私は車を買うつもりだ。」

b. 否定文

Minu-lla ei ole aikomus-ta [osta-a auto-a].
 I-ADE NEG.3SG be intention-PAR buy-AINF car-PAR
 「私は車を買うつもりはない。」

¹⁵ Vilkuna(2003: 290)では、所有文での〈**on+aikaa** 「時間」〉は *ehtii* 「～する時間がある」に、〈**on+oikeus** 「権利」〉は *saa* 「～できる」に言い換え可能だとしている。ただし正確には、*ehtii* や *saada* は主格主語を持つ普通の文で用いられるので、SVO 文の場合とは違って、所有文の〈**on+主名詞**〉にそのまま置き換え可能な訳ではない。

- (iii) a. Minu-lla on aika-a [luke-a kirja].
 I-ADE be.3SG time-PAR read-AINF book. ϕ ACC
 「私は本を読む時間がある。」
 b. *Minu-lla ehti-i [luke-a kirja].
 I-ADE have.time-3SG read-AINF book. ϕ ACC
 「int. 私は本を読む時間がある。」
 c. Minä ehdi-n [luke-a kirja-n].
 I.NOM have.time-1SG read-AINF book-nACC
 「私は本を読む時間がある。」

続いて、さらに結合が進みモダリティ表現となった、必須文的なタイプについても見ていこう。必須文の *täytyy* や *pitää* といった第一動詞の代わりに〈on+主名詞〉が用いられた、(39)のような文である。用いられる名詞としては *ISK*(: 1503)に、*pakko*「強制」、*tarpeen* (*tarve*「必要」の属格)、*lupa*「許可」、*määrä*「量」、*syytä* (*syy*「理由」の分格)、*aihetta* (*aihe*「理由」の分格)、*aika*「時間」が挙げられている。

(39) a. 肯定文

Minu-n [on pakko] [luke-a kirja]. (cf. (4a))

I-GEN be.3SG necessity.NOM read-AINF book. ϕ ACC

「私は本を読まなければならない。」

b. 否定文

Minu-n ei [ole pakko] [luke-a kirja-a]. (cf. (4b))

I-GEN NEG.3SG be necessity.NOM read-AINF book-PAR

「私は本を読まなくていい。」

このパターンは、構文化が進んでいることが明らかである。目的語が存在しえない(36)のような通常の所有文と違って、通常の必須文でも包括目的語は ϕ 対格になるので、先程の所有文のパターン ((38)) より分かりやすい。〈on+主名詞〉が用いられている必須文的表現における包括目的語の格選択は、上述の普通の必須文の場合 ((4)) と変らない。すなわち、肯定文では ϕ 対格であり、否定文では分格になる ((39)の *kirja* / *kirja-a*「本」)。そして、所有文では所格だった文頭の名詞が、通常の必須文と同じく属格になっている ((39)の *minu-n*「私」)。〈on+主名詞〉で合成述語として結合しているため、否定文であっても主名詞は分格にならず ϕ 対格のままである ((39b)の *pakko*「必要」)¹⁶。否定文では主名詞が分格になる先程の所有文のタイプ ((38b)) より、〈on+主名詞〉が固定化していることが分かる。また、所有文のタイプは主名詞に修飾語を付けられるのに対して、この必須文的なタイプの主名詞には付けることができない(*ISK*: 1504)。このことも、結合度の強さを示している。この表現は、A 不定詞基本形による名詞修飾を含む所有文から発達したものだが、ここまで来ると、合成述語化がかなり進んでおり、もはや A 不定詞基本形による名詞修飾とは見なせないことは疑いもない¹⁷。

これまで、〈on+主名詞+A 不定詞基本形〉を含む構造について、所有文のタイプと必須文的なタイプに分けて見てきた。ここで、先程論じた所有文の中にも、結合がさらに進んだタイプがあることを指摘しておく。A 不定詞基本形を含む一部の所有文では、否定文であっても、主名詞が分格にならず ϕ 対格のままである。この事実は、*ISK*(: 853)の、A 不定詞基本形の項目ではなく所有文の項目で、ごく簡単に触れられている。ただし、否定文でも所有

¹⁶ 無論、肯定文でもともと分格の *syy-tä*「理由」と *aihet-ta*「理由」は、否定文でも分格である。

¹⁷ ただし本論文では説明の便宜上、on の後の名詞を、名詞修飾の場合と同様に主名詞と呼んでいる。

主名詞が主文の目的語の場合も含み、通常の名詞修飾①では、肯定文での A 不定詞基本形の目的語は ϕ 対格である。それに対して、主名詞が主文の動詞と結びつき助動詞的な働きをする②の SVO 文では、n 対格になる。ただし、この格選択には揺れがあり、両者を明確には線引きできない。②③④の所有文・必須文では ϕ 対格になるが、これはそれらの文に動詞と一致する主格主語が存在しないためで、〈主文の動詞＋主名詞〉の結合度とは関係がない。否定文の A 不定詞基本形の目的語は、①では ϕ 対格のままで、②③④では分格になるはずだが、実際は①でも主名詞が主文の述語内であれば分格が用いられる。否定文での主名詞の格に目を向けると、②と、③④の間に線が引ける。②の主名詞（SVO 文の O、所有文の所有物）は、否定文ではその影響を受けて分格になる。③の所有文と④の必須文的表現の主名詞は、〈on＋主名詞〉で合成述語的に固定化しているため、否定文でも主格のままである。また、②③は文頭名詞が所格であり所有文だが、④は属格で、モダリティを表す必須文的な構文になっている。

5 章 自動詞の A 不定詞基本形・受動現在分詞による修飾

2 章・3 章では、A 不定詞基本形と受動現在分詞の修飾用法全般について論じた。そして、これら不定形動詞と、それと意味的關係にある関連名詞は、たいていの場合「他動詞－目的語」という解釈上の文法關係にあることにも簡単に触れた。しかし同時に、不定形動詞が自動詞の例、すなわち「他動詞－目的語」の關係から逸脱した適格文も、文法書等に散見された。この種の文は、周辺のではあるものの、A 不定詞基本形・受動現在分詞による修飾の特徴をより明確にする上で重要であるが、先行研究ではほとんど看過されてきた。本章では、この種の文は不定形動詞と関連名詞とが「自動詞－場所格補部」「自動詞－側置詞項」の關係にある場合に觀察され適格性がやや不安定であること、そして、この不安定さはそれらの名詞の「準目的語」という性質に相關したものであることを確認する。そして、A 不定詞基本形と受動現在分詞による修飾用法について、その記述をより精密化する。

本章の構成としては、まず 1.1 節にて、典型的な不定形動詞と関連名詞の統語的關係を再確認し、そこからはずれた例も概観する。1.2 節では、母語話者による容認度判断のアンケート調査の内容と集計方法について説明する。そして、2 節では「自動詞＋場所格補部」をもとにする形容詞修飾、3 節では「自動詞＋側置詞句」をもととする形容詞修飾について、それぞれ論じる。4 節では、3 節で扱った文に関して、側置詞と不定形動詞の複合という別の観点から論じる。5 節はまとめて、A 不定詞基本形と受動現在分詞による修飾において、「動詞－目的語」という關係の制限が絶対的なものではなく、場所格補部等もある程度許容されることを述べる。

1. 「動詞－目的語」からの逸脱

1.1 不定形動詞と主名詞・関連名詞の解釈上の文法關係

本小節ではまず、これまで見てきたことをもとに、A 不定詞基本形と受動現在分詞の修飾用法の、不定形動詞と関連名詞との通常の統語的關係をまとめる。

A 不定詞基本形は、11 個ある用法のうち、動詞修飾と形容詞修飾の場合のみ、主文の名詞との間に「動詞－目的語」という統語關係がある。名詞修飾の場合は、主名詞の内容を補充する役割を果たし、統語關係にはない。動詞修飾では、所有文であれば所有物、存在文であれば存在物、または古い表現だが他動詞文であれば目的語が、A 不定詞基本形の目的語に相当する。形容詞修飾の場合、形容詞による叙述・修飾の対象となる名詞（主に主文の主語）が、A 不定詞基本形の目的語に相当する。A 不定詞基本形の主語の解釈は普通オープンだが、A 不定詞句内の属格主語で明示することもできる。ただし、2 章 3.2 節で扱った、名詞修飾的な形容詞修飾では、A 不定詞句内に目的語をとり、主文の名詞とは統語關係がない。

受動現在分詞の場合は、「受動」という名が示しているように、文法化が進んだ必須文的動詞連合以外の全用法で、関連名詞と「動詞－目的語」の關係にある。本論文で扱っている修飾用法について見てみると、名詞修飾の場合には、通常、主名詞が受動現在分詞の目的語

に相当する。ただし、3章 1.3 節で論じた状態構文の場合には、受動現在分詞が修飾している名詞ではなく主語といった主文の名詞が、受動現在分詞と目的語の関係にある。変格・様格での動詞修飾では、所有文であれば所有物、存在文であれば存在物、その他の自動詞文であれば主語、他動詞文であれば目的語が、受動現在分詞の目的語に相当する。変格での形容詞修飾でも、A 不定詞基本形の場合と同じく、形容詞による叙述・修飾の対象となる名詞（主に主文の主語）が分詞の目的語に相当する。受動現在分詞の主語は不特定か、または意味上の主語を向格名詞で表す。

以上のことを簡潔にまとめると、A 不定詞基本形と受動現在分詞による修飾（A 不定詞基本形による名詞修飾を除く）では、主名詞や主文の重要な項である関連名詞が、不定形動詞の目的語にあたる¹。

表 5-1 不定形動詞と主名詞・関連名詞の解釈上の文法関係

	A 不定詞基本形	受動現在分詞
名 詞 修 飾	統語関係なし	主名詞＝受動現在分詞の 目的語 ※状態構文： 主語等の主文の要素 ＝受動現在分詞の 目的語
動 詞 修 飾	所有文の所有物， 存在文の存在物， (他動詞文の目的語) ＝A 不定詞基本形の 目的語	所有文の所有物， 存在文の存在物， 自動詞文の主語， 他動詞文の目的語 ＝受動現在分詞の 目的語
形 容 詞 修 飾	SVC 文の主語， SVOC 文の目的語 ＝A 不定詞基本形の 目的語 ※名詞修飾的なタイプは 統語関係なし	SVC 文の主語， SVOC 文の目的語 ＝受動現在分詞の 目的語

しかし実際には、不定形動詞が自動詞で、関連名詞との文法関係が「動詞－目的語」ではない例も時々目にする。以下で、A 不定詞基本形、受動現在分詞の順に、それぞれの用法の例を挙げる。

A 不定詞基本形による名詞修飾では、そもそも「動詞－目的語」といった文法関係になく、A 不定詞基本形は主名詞の内容を補充する。動詞修飾に関しては、現在では、所有文や存在文のみで、かつ A 不定詞基本形は贈与や分配を意味する動詞に限定されるため、所有物や

¹ それに対して、A 不定詞変格による動詞修飾（＝目的構文）、MA 不定詞入格による動詞修飾と形容詞修飾では、主文の主語や目的語の名詞が、不定詞と「動詞－主語」の関係である。

存在物は与えられるものや分けられるものである。すなわち関連名詞は A 不定詞基本形の目的語に相当し、そこからはずれた例は作成しにくい。ただし、古い言い方では、以下の(1)のような例がある。

- (1) ... yksi Kokos-tehtaa-n ov-i-sta on
 one.NOM Kokos-factory-GEN door-PL-ELA be.3SG
 jäte-tty auki [kene-n tahansa kulke-a sisään tai ulos].
 leave-PASS.PAST.PART.NOM open anybody-GEN go-AINF in or out
 「ココス工場のドアの 1 つは、誰でも出入りできるように開けっ放しだ。」
 (1 章(30a)再掲, *ISK* 506)

この文の主語 yksi Kokos-tehtaan ovista「ココス工場のドアの 1 つ」は、A 不定詞句 kulkea sisään tai ulos「出入りする」の目的語ではなく、(2)のように出格補部に相当する。

- (2) kulke-a ove-sta sisään tai ulos
 go-AINF door-ELA in or out
 「ドアから出入りする」

次に、A 不定詞基本形による形容詞修飾に関しては、1 章 1.1 節で既述の通り、*ISK*(: 504) が A 不定詞基本形は移動を表す自動詞(liikeverbi)のこともあると述べている。

- (3) Hyvä ulkoilu-reitti on ... turvallinen [kulke-a].
 good.NOM outside-route.NOM be.3SG safe.NOM go-AINF
 「良い外のルートは行くのが安全だ。」
 (1 章(18)再掲, *ISK* 504)

(3)の例では、文の主語 hyvä ulkoilureitti「良い外のルート」が、A 不定詞基本形 kulkea「行く」の所格補部に相当する。

- (4) kulke-a hyvä-llä ulkoilu-reiti-llä
 go-AINF good-ADE outside-route-ADE
 「良い外のルートを行く」

ただし実際は、このような自動詞は移動を表す動詞に限らないことを、後の 2 節で示す。

続いて、受動現在分詞による修飾の例である。名詞修飾に関しては既に、3 章 1.1 節で、語彙化・形容詞化した受動現在分詞が場所格補部に相当する名詞を修飾するパターン、そし

て 1.2 節で、サイズを表す固定化した表現として受動現在分詞が場所格補部に相当する名詞を修飾するパターンを見てきた。受動現在分詞による修飾の統語的逸脱は、このような語彙化・形容詞化、固定化した名詞修飾に限定されず、動詞修飾や形容詞修飾でも不可能ではない。(5)は動詞修飾の例で、文の主語 *ovi* 「ドア」は、(1)の A 不定詞基本形の場合と同様、(2)のように受動現在分詞のもとの動詞 *kulkea* 「行く」の出格補部に相当する。

- (5) *Ovi on auki* [*kene-n tahansa kulje-ttava-ksi*]
 door.NOM be.3SG open anybody-GEN go-PASS.PRES.PART-TRA
 「誰でも通れるように、ドアは開いている」

(1 章(31a)再掲, *ISK* 506)

(6)は形容詞修飾の例で、文の主語 *Lepakon musiikki* 「レパッコの音楽」が、受動現在分詞変格 *nautittavaksi* のもとの動詞 *nauttia* 「楽しむ」の出格補部に当たる ((7))。

- (6) *Lepako-n musiikki on vaivattoman helppo-a*
Lepakko-GEN music.NOM be.3SG easily easy-PAR
 [*nauti-ttava-ksi*]
enjoy-PASS.PRES.PART-TRA
 「レパッコの音楽はとても楽しみやすい」

(*ISK* 543)

- (7) *nautti-a Lepako-n musiiki-sta*
enjoy-AINF Lepakko-GEN music-ELA
 「レパッコの音楽を楽しむ」

このように、動詞の不定形と主名詞・関連名詞との関係が「他動詞－目的語」ではなく「自動詞－場所格補部」のような例が、A 不定詞基本形と受動現在分詞の各修飾用法を扱った文法書の例文で散見される。本章ではこのような規準の文法関係からずれた例について考察するが、A 不定詞基本形による名詞修飾はそのような関係になく、動詞修飾も古い言い方のみ現れるため、A 不定詞基本形と受動現在分詞による形容詞修飾用法の文を例に論じる。

1.2 母語話者による容認度判断

A 不定詞基本形・受動現在分詞による修飾用法（既述の通り、A 不定詞基本形による名詞修飾は除く）において、不定形動詞と主名詞・関連名詞は、あくまで典型的には「動詞－目的語」という文法関係にある。そこからはずれた例外的な関係の文を中心的に扱った研究は管見の限りなく、文法書等で散発的に見られる例文だけでは、論じる材料としては不十分で

ある。さらに、この事例に限らず、文法書等に載っている例文であっても、母語話者が非文法的または不自然だと判断したものもある。本章で扱うのは非典型的な関係の文だからこそ、母語話者であっても容認度にばらつきがあるということが、十分に考えられる。そのため、このような文について論じるにあたって、中規模の母語話者への容認度調査を行った。

アンケート調査の回答者（計 35 名）、回答方法、実施時期等の概要は、4 章 1 節で既述してある。内容としては、文法書等の例文をもとに作例した文（論文末に付記したアンケート用紙の[23]-[37]）に関して、その容認度を、3 段階から選んでもらった。A は「自然」、B は「全く自然という訳ではないが、容認できる」、C は「不自然」である。それぞれの文について、35 人分の容認度を、A を 2 点、B を 1 点、C を 0 点として計算し、その平均点を出して、最後に小数点第 2 位を四捨五入した。「A または B」という回答は 1.5 点、「B または C」という回答は 0.5 点で計算した。以下、アンケートの例文は、容認度の記号 (*, ??, ?) の代わりに、この数値を左に付した。

2. 〈自動詞+場所格補部〉

本節では、A 不定詞基本形と受動現在分詞の形容詞修飾用法において、不定形動詞が自動詞で文の主語が不定形の場所格補部に相当する、4 つのペアについて見ていく。

まず、〈uskoa「信じる」+入格補部〉をもととする(8)の例から見ていこう。(8a)は論文末に付記したアンケート用紙の例文番号[23]、(8b)は[24]に相当する。

- (8) a. 1.3 Ufo-t² on vaikea asia [usko-a].
 UFO-PL.NOM be.3SG difficult.NOM thing.NOM believe-AINF
 「UFO は信じがたいものだ。」
- b. 1.2 Ufo-t on vaikea asia
 UFO-PL.NOM be.3SG difficult.NOM thing.NOM
 [usko-ttava-ksi].
 believe-PASS.PRES.PART-TRA
 「UFO は信じがたいものだ。」

容認度の結果は、(8a)が 1.3 点 (A:16 名, B:14 名, C:5 名)、(8b)が 1.2 点 (A:14 名, B:14 名, C:7 名) で、どちらもある程度許容されていることが分かる。この文で用いられている動詞 uskoa「信じる」は、入格補部を伴う自動詞としても分格目的語を伴う他動詞としても用いられるが³、両者には違いが存在する。入格補部を項としてとる場合、(9a)のように「〈対

² 主語 ufot は複数形で動詞 on は単数形だが、母語話者によると、口語では単数の ufo ではなく、集合的に複数形の ufot を用い、動詞は単数形にするほうが自然だという。

³ フィンランド語には、自他両方の用法がある動詞はさほど多くない。1 つの動詞に自他両方の用法がある場合でも、英語の open「開く／開ける」のように事態を両面から見るのではなく、believe in + N / believe + N のような、場所格補部をとるか目的語をとるかの違いである。

象〉の存在を信じる」, または(9b)のように「〈対象〉を全面的に信頼する」という意味で用いられる。それに対して, (10)のように分格目的語を項としてとる場合には, 「〈対象〉の言っていることが正しいと信じる」という意味になる。

(9) a. Usko-n ufo-i-hin / joulupukki-in / Jumala-an.

believe-1SG UFO-PL-ILL Santa.Claus-ILL God-ILL

「私は UFO／サンタクロース／神を信じている。」

b. Matti ei usko lääkäre-i-hin.

Matti.NOM NEG.3SG believe doctor-PL-ILL

「マッティは医者を信頼していない。」

(10) Matti usko-o aina Liisa-a, vaikka Liisa sono-isi

Matti.NOM believe-3SG always Liisa-PAR even.if Liisa.NOM say-COND.3SG

mi-tä tahansa.

what.ever-PAR

「リーサが何を言おうとも, マッティは常にリーサを信じる。」

(8)は, UFO の存在を信じるかどうかという話なので, ufo は(9a)のように入格補部に相当する。本来なら目的語相当の語が来るはずの主語位置に, 入格補部相当の ufo が来ている(8)だが, 容認度は割と高い。A「自然」を選んでいる回答者も半数近くいる。

続いて, 〈keskustella「話す」+出格補部〉をもととする(11)の例を見ていこう。(11a)はアンケート用紙の例文番号[34], (11b)は[35]に相当する。

(11) a. 1.5 Avioero on vaikea aihe [keskustel-la].

divorce.NOM be.3SG difficult.NOM topic.NOM talk-AINF

「離婚は話しにくい話題だ。」

b. 1.8 Avioero on vaikea aihe [keskustel-tava-ksi].

divorce.NOM be.3SG difficult.NOM topic.NOM talk-PASS.PRES.PART-TRA

「離婚は話しにくい話題だ。」

(11)は, 不定形の動詞 keskustella「話す」の目的語ではなく出格補部に相当する avioero「離婚」が, 文の主語になっている。

(12) keskustel-la avioero-sta / * avioero-a / * avioero-n

talk-AINF divorce-ELA divorce-PAR divorce-nACC

「離婚について話す」

しかしながら母語話者の容認度は高く、(11a)は 1.5 点 (A:21 名, A/B:1 名, B:9 名, C:4 名) で、(11b)に至っては、1.8 点 (A:30 名, B:3 名, C:2 名) であった。

次は、〈nauttia「楽しむ」＋出格名詞〉をもととする(13)の例である。(13a)はアンケートの[32]、(13b)はアンケートの[33]の文である。

- (13) a. 1.3 Klassise-n musiiki-n kappalee-t o-vat vaivattoman
 classical-GEN music-GEN piece-PL.NOM be-3PL easily
 helppo-j-a [nautti-a].
 easy-PL-PAR enjoy-AINF
 「クラシック音楽の曲はとても楽しみやすい。」
- b. 1.1 Klassise-n musiiki-n kappalee-t o-vat vaivattoman helppo-j-a
 classical-GEN music-GEN piece-PL.NOM be-3PL easily easy-PL-PAR
 [nautti-ttav-i-ksi].
 enjoy-PASS.PRES.PART-PL-TRA
 「クラシック音楽の曲はとても楽しみやすい。」

(13)で用いられている不定形の動詞 *nauttia* は、(8)・(10)の *uskoa* と同様、自動詞と他動詞両方の用法を持つ。自動詞をして用いられる場合には、「～を楽しむ、～がとても好きだ」という意味で、対象は出格補部で表される ((14a))。それに対して、他動詞として分格目的語をとる場合には、(14b)のように、主に「(食べ物等を) 摂取する」という意味で用いられる。

- (14) a. Nauti-n klassise-sta musiiki-sta / loma-sta.
 enjoy-1SG classical-ELA music-ELA holiday-ELA
 「私はクラシック音楽／休暇を楽しむ。」
- b. Nauti-n viini-ä ja oliive-j-a / lääke-ttä.
 ingest-1SG wine-PAR and olive-PL-PAR medicine-PAR
 「私はワインとオリーブを味わう／薬を飲む。」

nauttia の目的語に相当する語であれば、A 不定詞基本形と受動現在分詞による形容詞修飾の文の主語になるのは全く問題ないが、意味的に、(13)の主語 *klassisen musiikin kappaleet* 「クラシック音楽の曲」は、目的語ではなく出格補部に相当する。ただ、*klassisen musiikin kappaleet* が比喩的表現として目的語と捉えられるという可能性も考え、アンケート調査では、併せて以下の(15) (アンケートの[31]) の容認度も尋ねた。(15)は、*klassisen musiikin kappaleet* 「クラシック音楽の曲」を *nauttia* の分格目的語にした SVO 文である。

(15) 0.5 Nauti-n klassise-n musiiki-n kappale-i-ta.
 inject-1SG classical-GEN music-GEN piece-PL-PAR
 「私はクラシック音楽を賞味する。」

この(15)に関して、母語話者の容認度は 0.5 点 (A:4 名, B:10 名, C:21 名) と、かなり低かった。それにも関わらず、(13)になると容認度は上がる。(13a)は 1.3 点 (A:18 名, B:8 名, C:9 名), (13b)は 1.1 点 (A:17 名, B:6 名, C:12 名) である。つまり、klassisen musiikin kappaleet 「クラシック音楽の曲」は、SVO 文の目的語としては容認しづらいが、本来目的語が来うる不定形動詞による形容詞修飾の主語としてはいくぶん容認されやすい。

最後に、〈istua 「座る」 + 内格／所格補部〉をもととする(16)の例を見ていく。(16a)はアンケートの[36], (16b)は[37]の文である。

(16) a. 1.0 Piene-t tuoli-t o-vat vaikea-t [istu-a].
 small-PL.NOM chair-PL.NOM be-3PL difficult-PL.NOM sit-AINF
 「小さな椅子は座りにくい。」
 b. 1.2 Piene-t tuoli-t o-vat vaikea-t
 small-PL.NOM chair-PL.NOM be-3PL difficult-PL.NOM
 [istu-ttav-i-ksi].
 sit-PASS.PRES.PART-PL-TRA
 「小さな椅子は座りにくい。」

(16)の主語 pienet tuolit 「小さな椅子」は、(17)のように、不定形の動詞 istua 「座る」の目的語ではなく、内格補部または所格補部に相当する。

(17) istu-a tuoli-ssa / tuoli-lla / *tuoli-n / *tuoli-a
 sit-AINF chair-INE chair-ADE chair-nACC chair-PAR
 「椅子に座る」

動詞 istua 「座る」の目的語ではなく場所格補部に相当する語が主語になっている(16)だが、まったく容認されないわけではない。(16a)は 1.0 点 (A:11 名, B:14 名, C:10 名), (16b)は 1.2 点 (A:15 名, B:12 名, C:8 名) である。

以上見てきたように、本来であれば不定形動詞の目的語に相当する語が主語になる、A 不定詞基本形と受動現在分詞による形容詞修飾において、不定形動詞が自動詞で、その場所格補部に相当する名詞が主語になっている(8)(11)(13)(16)も、母語話者にある程度容認されることを明らかにした。もちろんもっとも自然な表現なのは、〈場所格名詞 + on + 形容詞 + A 不定詞基本形〉という A 不定詞基本形による主語用法の構造である。2 章 3.1 節で既述の通

り、A 不定詞基本形による形容詞修飾用法の文頭名詞は文の主語なので主格だが、主語用法の場合、文頭名詞には場所格名詞も全く問題なく来ることができる。例えば〈uskoa「信じる」＋入格補部〉を例にとると、(18b)のように、信じられる対象である ufo は入格補部のまま文頭に来ることができる。

(18) a. 形容詞修飾用法

?? Ufo-t on vaikea [usko-a].
 UFO-PL.NOM be.3SG difficult.NOM believe-AINF
 「UFO は信じがたい。」

b. 主語用法

[Ufo-i-hin] on vaikea [usko-a].
 UFO-PL-ILL be.3SG difficult.NOM believe-AINF
 「UFO を信じることは難しい。」

〈名詞＋on＋形容詞＋A 不定詞基本形〉という形式の場合、A 不定詞基本形の場所格補部に相当する名詞は(18b)のようにその格のまま文頭に来ることができるので、その分(18a)の容認度は低い。しかし、不定形動詞が受動現在分詞の場合は、文頭名詞を場所格にすることは不可能である。

(19) * [Ufo-i-hin] on vaikea [usko-ttava-ksi]. (cf. (8b))
 UFO-PL-ILL be.3SG difficult.NOM believe-PASS.PRES.PART-TRA
 「int. UFO を信じることは難しい。」

また、不定形動詞が A 不定詞基本形であっても、形容詞の後に名詞がある〈名詞 1＋on＋形容詞＋名詞 2＋A 不定詞基本形〉という形式の場合、または文頭名詞が複数で動詞・形容詞も複数で一致している場合には、A 不定詞基本形は主語用法たりえず、すなわち文頭名詞は場所格になれない。例えば(8a)は、名詞 2 (asia「もの」) が介在しているがために、A 不定詞基本形が主語用法にはとれない。主語用法だとすると、「UFO を信じること」＝「難しい物体」になってしまい、意味的におかしいからである。

(20) * [Ufo-i-hin] on vaikea asia [usko-a]. (cf. (8a))
 UFO-PL-ILL be.3SG difficult.NOM thing.NOM believe-AINF
 「lit. UFO を信じることは難しい物だ。」

(11a)も、同じ〈名詞 1＋on＋形容詞＋名詞 2＋A 不定詞基本形〉という形式である。また、(13a)(16a)は動詞・形容詞が複数形で、同じく複数形の文頭名詞は必ず文の主語として解釈

される。つまり、A 不定詞基本形は、形容詞修飾用法である。A 不定詞基本形が主語用法の場合は、動詞は常に3人称単数で形容詞も単数であるため、(13a)(16a)は主語用法にとれず、文頭名詞を場所格にすることはできない。

- (21) * [Klassise-n musiiki-n kappale-i-sta] o-vat vaivattoman
 classical-GEN music-GEN piece-PL-ELA be-3PL easily
 helppo-j-a [nautti-a]. (cf.(13a))
 easy-PL-PAR enjoy-AINF
 「int. クラシック音楽の曲を楽しむことはとても簡単だ。」

このように、主語用法として文頭名詞をそのまま場所格にするという選択肢がないため、(8)(11)(13)(16)のような言い方の許容度が上がっていると考えられる。もちろんこれらは、全く問題なく容認されている訳ではない。やはり、形容詞修飾文の主語になるのは、あくまで本来は目的語相当の語である。しかし一方で、ある程度は容認されているという事実も、見過ごすことができない。これらの場所格補部は、動詞句内の項であり広い意味での〈対象〉を表すという点で、目的語に準ずるものと考えられる。to 不定詞による形容詞修飾文で前置詞残留が起こる英語とは違って、フィンランド語では、場所格補部だった名詞が主格の主語になるので、動詞との意味的關係を示す格が失われてしまう。しかし、動詞が決まった格を項に要求する *rektio* (例えば *uskoa* 「信じる」であれば入格名詞) だからこそ、その格がなくても意味的關係は容易に復元できる。そのため、場所格補部でも、人によっては容認するのではないだろうか。なお、アンケート調査において、A 不定詞基本形と受動現在分詞の容認度の違いは、さほど現れなかった。

3. 〈自動詞＋側置詞句〉

前節では、〈自動詞＋場所格補部〉という動詞句をもととする形容詞修飾文について論じたが、本節では、〈自動詞＋側置詞句〉という動詞句をもととする形容詞修飾文を扱う。

フィンランド語には、前置詞としてののみ、後置詞としてののみ用いられる側置詞も、前置詞と後置詞どちらとしても用いられる側置詞もある。側置詞が従える名詞は属格や分格のことが多いが、場所格のこともある。(22)は、側置詞 *läpi* 「～を通して」＋属格名詞, *pitkin* 「～に沿って」＋分格名詞, *asti* 「～まで」＋入格名詞の例である。

- (22) a. Ajo-i-n tunneli-n läpi / läpi tunneli-n.
 drive-PAST-1SG tunnel-GEN through through tunnel-GEN
 「私はトンネルを通り抜けた。」

- b. Kulj-i-n Häme-e-n katu-a pitkin / pitkin Häme-e-n katu-a.
 go-PAST-1SG Häme-GEN street-PAR along along Häme-GEN street-PAR
 「私はハメ通りに沿って進んだ。」
- c. Oli-n kahvila-ssa yhte-en asti.
 be.PAST-1SG cafe-INE one-ILL till
 「私は1時までカフェにいた。」

yli 「～を超えて」も側置詞の一つで、属格名詞をとり、(23)のように用いられる。

- (23) Halua-n hypä-tä aida-n yli / yli aida-n.
 want-1SG jump-AINF fence-GEN over over fence-GEN
 「私はフェンスを飛び越えたい。」

(23)において、属格名詞 *aidan* 「フェンス」は、動詞 *hypätä* 「ジャンプする」の目的語でも場所格補部でもなく、側置詞 *yli* の項である。しかし、文法書 Penttilä(1963)の A 不定詞基本形の項目の一つ〈名詞+on+形容詞+A 不定詞基本形〉で列举されている例文の中に、以下の文(24)がまざれている。この文は、形容詞が *korkea* 「高い」で、A 不定詞基本形を主語用法だとすると「フェンスを飛び越えることは高すぎる」と意味的に変であるため、A 不定詞基本形は形容詞修飾用法に決まる。

- (24) Aita on liian korkea [yli hypä-tä].
 fence.NOM be.3SG too high.NOM over jump-AINF
 「フェンスは飛び越えるには高すぎる。」

(Penttilä 1963: 488)

この文に関して、Penttilä(1963)では全く説明がない。Penttilä(1963)は半世紀以上も前の文法書であり、1章2.1節で既述の通り、そこで挙げられている雑多な例文の中には現代の母語話者が容認しないものがある。しかし、もし(24)が本当に文法的だとしたら、A 不定詞基本形の目的語でもなく場所格補部ですらない語が、形容詞修飾文の主語として容認されるということになり、大変興味深い。そこで、母語話者にアンケート調査を行い、実際の容認度を確認した。(25a)はアンケート用紙の例文番号[27]、(25a)は[28]である。

- (25) a. 1.6 Aita on liian korkea [hypä-tä yli].⁴
 fence.NOM be.3SG too high.NOM jump-AINF over
 「フェンスは飛び越えるには高すぎる。」
- b. 1.8 Aita on liian korkea [yli hypät-tävä-ksi].
 fence.NOM be.3SG too high.NOM over jump-PASS.PRES.PART-TRA
 「フェンスは飛び越えるには高すぎる。」

それぞれの文の容認度は、(25a)が 1.6 点 (A:22 名, A/B:1 名, B:9 名, C:3 名), (25b)が 1.8 点 (A:32 名, B:0 名, C:3 名) で、どちらも高かった。側置詞の中には副詞としての用法も併せ持つものがあり、yli も副詞として用いられる場合がある。もし、hypätä yli で yli が副詞として用いられ、aita 「フェンス」が目的語になるようなことがあれば、目的語相当の aita が形容詞修飾文の主語になるのはごく当たり前である。だが実際は、hypätä と yli はそのようには用いられない。

- (26) * En halua hypä-tä yli aita-a.
 NEG.1SG want jump-AINF over fence-PAR
 「int. 私はフェンスを飛び越えたくない。」

(26)は、aita を側置詞 yli の項ではなく、動詞 hypätä の目的語にした作例である。肯定文では目的語が n 対格になり、側置詞が要求する属格と同形であってまぎらわしいため、目的語が分格になる否定文にした。母語話者によると、この文は非文である。すなわち、通常の文では aita は hypätä yli の目的語ではないのに、不定形動詞の目的語相当の名詞が主語になるはずの形容詞修飾文では、aita が主語としてかなりの程度容認される、ということになる。

これはかなり特殊な逸脱のように思えるが、hypätä yli aidan 一例だけではない。追加調査にて、同様の〈自動詞＋側置詞句〉をもととする作例の形容詞修飾文に関して、母語話者 3 名に 3 段階の容認度から選んでもらったところ、それらの文も(25)と同じく、ある程度容認されていた。(27)の主語 silta 「橋」と(28)の主語 kaide 「手すり」は、もともとは側置詞 yli がとる属格名詞であり、動詞句では目的語にはならない。それでも、(27a)は A:3 名、(27b)は A, B, C:1 名ずつ、(28a)は A:2 名, B:1 名, (28b)は A, B, C:1 名ずつという容認度判断だった。

⁴ Penttilä(1963: 488)のもとの文(24)とは、hypätä と yli の語順が異なる。予備調査で(24)について母語話者に尋ねたところ、数名が yli と hypätä の順番を逆に直したので、今回の調査では、hypätä yli の語順で容認度を聞いた。なお、予備調査で、(25b)の文の語順を hypättäväksi yli に直した回答者は 1 名もいなかった。

- (27) a. Silta on liian pitkä [kulke-a yli jalkaisin].
 bridge.NOM be.3SG too long.NOM go-AINF over on.foot
 「橋は徒歩で渡るには長すぎる。」
- b. Silta on liian pitkä [jalkaisin yli kulje-ttava-ksi].
 bridge.NOM be.3SG too long.NOM on.foot over go-PASS.PRES.PART-TRA
 「橋は徒歩で渡るには長すぎる。」
- (28) a. Kaide on liian korkea [nojautu-a yli].
 railing.NOM be.3SG too high.NOM lean-AINF over
 「手すりは身を乗り出すには高すぎる。」
- b. Kaide on liian korkea [yli nojaudu-ttava-ksi].
 railing.NOM be.3SG too high.NOM over lean-PASS.PRES.PART-TRA
 「手すりは身を乗り出すには高すぎる。」

この〈自動詞＋側置詞句〉の形容詞修飾を、以下で句動詞と結び付けて分析する。〈他動詞＋副詞〉の句動詞の場合、目的語をとる。これは、下の(30c)のように図式化できる。(29)では、動詞 *sanoa* と副詞 *irti* が「解雇する」という意味の句動詞を構成しており、2 *työntekijää* 「2 人の従業員」が目的語である。

- (29) Yritys sano-i irti 2 työntekijä-ä.
 company.NOM say-PAST.3SG off 2 employee-PAR
 「会社は2名の従業員を解雇した。」

それに対して〈動詞＋側置詞＋名詞〉は、〈側置詞＋名詞〉が側置詞句を構成しており、名詞は動詞の項ではない。これは、(30a)のように図式化できる。しかし、一部の〈句動詞ではないが、動詞との結びつきが強い〉〈動詞＋側置詞＋名詞〉は、名詞と側置詞が離れている形容詞修飾文では、動詞と側置詞があたかも句動詞のように結びついて、(30b)のような構造になっているのではないだろうか。この場合、名詞は〈動詞＋側置詞〉の項として捉えることができる。そしてそれは、〈動詞＋副詞＋目的語〉((30c))や〈動詞＋目的語／場所格補部〉((30d))と同じ構造である。

- (30) a. [動詞+[側置詞＋名詞]]
 b. [[動詞＋側置詞]＋名詞]
 c. [[動詞＋副詞]＋目的語名詞]
 d. [動詞 ＋目的語名詞／場所格補部名詞]

〈名詞+olla+形容詞+不定形動詞+側置詞〉がある程度容認されるのは、このような理由によると考えられる。

4. 〈側置詞 | 受動現在分詞+名詞〉

前節では〈動詞+側置詞句〉に相当する形容詞修飾を扱ったが、この〈hypätä yli aidan〉に関して、複合化という異なる観点からも調査を行った。フィンランド語は複合語が非常に多い言語で、yli が前部要素に来る複合動詞⁵も、いくつか存在する (yli|arvioida 「過大評価する」<arvioida 「評価する」、yli|mainostaa 「過剰宣伝する」<mainostaa 「宣伝する」など)⁶。では、yli|hypätä が「飛び越える」という意味の複合動詞として用いられることはあるのだろうか。母語話者への調査結果を以下に示す。

- (31) 0.6 En halua yli|hypä-tä aita-a.⁷
NEG.1SG want over|jump-AINF fence-PAR
「私はフェンスを飛び越えたくない。」

yli と hypätä が一語の動詞となり目的語として aita をとる(31) (アンケートの[25]) は、容認度が低かった。数値は 0.6 点で、A:3 名、B:15 名、C:17 名である。下の(32)は、不定形動詞に複合語 yli|hypätä を用いた形容詞修飾文である。(32a)はアンケートの[29], (32b)は[30]の文である。

- (32) a. 0.6 Aita on liian korkea [yli|hypä-tä].
fence.NOM be.3SG too high.NOM over|jump-AINF
「フェンスは飛び越えるには高すぎる。」
b. 1.5 Aita on liian korkea [yli|hypät-tävä-ksi].
fence.NOM be.3SG too high.NOM over|jump-PASS.PRES.PART-TRA
「フェンスは飛び越えるには高すぎる。」

A 不定詞基本形が用いられた(32a)の容認度は 0.6 点 (A:5 名、B:12 名、C:18 名) で、(31)と変わらない低さである。しかしながら、受動現在分詞変格が用いられた(32b)は、1.5 点 (A:22 名、B:7 名、C:6 名) で、多くの人が自然な文だと判断した。(31)と(32b)の容認度の違いから、通常は「飛び越える」という意味で yli|hypätä という複合動詞は用いられにく

⁵ 前部要素は側置詞であり、典型的な複合ではなく、派生に近い。

⁶ これらは、動詞+yli という別々の 2 語としては用いられない (cf. (29)(37))。

⁷ 母語話者によると、近年、「スキップする、とばす」の意味で、新語の複合動詞 yli|hypätä が用いられることがあるという。その意味での使用を排除するため、アンケートでは、(31)には The intended meaning is “En halua hypätä aidan yli.”, (25)(32)には The intended meaning is “Fence is too high to jump over.”という文言を付加して、「飛び越える」という意味で用いていることを明記した。

それに対して、句動詞の〈動詞＋副詞〉の場合、〈副詞 | 動詞〉という複合動詞にすることが出来る場合もある ((35c))。

- (37) Yritys irti|sano-i 2 työntekijä-ä. (cf. (29))
company.NOM off|say-PAST.3SG 2 employee-PAR
「会社は2名の従業員を解雇した。」

hypätä yli aidan は、(35a)と(35c)の中間に位置づけることができる ((35b))。動詞句では、側置詞 yli と名詞 aidan が側置詞を形成し、yli と hypätä が複合することはできない。しかし、動詞と側置詞の関係が通常の〈動詞＋側置詞句〉より密接であるため、形容詞修飾においては〈動詞＋側置詞〉があたかも句動詞のように機能し、その結果、〈側置詞 | 動詞〉という複合動詞も許容される。

しかしながら、(32a)のような複合動詞の A 不定詞基本形による形容詞修飾は、容認度が低い。この〈側置詞 | A 不定詞基本形〉による形容詞修飾と〈側置詞 | 受動現在分詞〉による形容詞修飾の容認度の違いは、A 不定詞基本形と受動現在分詞の複合語形成力の違いによるものである。A 不定詞基本形をはじめ不定詞は複合語形成力が弱い、受動現在分詞を含む分詞全般は、複合語形成力が強い。このことを、以下に示す。(37)の irti|sanoa 「解雇する」のような〈副詞 | 動詞 (A 不定詞基本形)〉といった複合動詞は少し存在するが、前部要素に主語、目的語、場所格補部といった項や場所格副詞をとる複合動詞は存在しない。

- (38) a. * 〈主語 | A 不定詞基本形〉
 * yhde-n |istu-a
 one-GEN |sit-AINF
 「int. 1 人が座る」
 b. * 〈目的語 | A 不定詞基本形〉
 * vere-t |seisautta-a / * ver-ten |seisautta-a
 blood-PL.ACC |stop-AINF blood-PL.GEN |stop-AINF
 「int. 止血する」
 c. * 〈目的語 | A 不定詞基本形〉
 * henke-ä |salva-ta / * henge-n |salva-ta
 breath-PAR |bar-AINF breath-GEN |bar-AINF
 「int. 息を止める」
 d. * 〈場所格副詞 | A 不定詞基本形〉
 * suu-sta |lada-ta
 mouth-ELA |charge-AINF
 「int. 銃口から装填する」

それに対して、分詞は、主語、目的語、場所格補部、場所格副詞等に相当する名詞を前部要素に取り込んで複合化できる⁹。

(39) a. 〈主語 | 受動現在分詞〉

yhde-n | istu-ttava (3章(7d)参照)

one-GEN | sit-PASS.PRES.PART.NOM

「1人掛けの」

b. 〈目的語 | 能動現在分詞〉

vere-t | seisautta-va

blood.PL.ACC | stop-ACT.PRES.PART.NOM

「止血する」

c. 〈目的語 | 能動現在分詞〉

henke-ä | salpaa-va

breath-PAR | bar-AKT.PRES.PART.NOM

「息を止める」

d. 〈場所格副詞 | 受動現在分詞〉

suu-sta | lada-ttava

mouth-ELA | charge-PASS.PRES.PART.NOM

「銃口から装填される」

目的語が分詞に複合する際の格も、注目に値する。動名詞や動詞由来名詞も主語、目的、場所格名詞を前部要素にとり複合化するが、目的語が複合する際は、もともとの格に関わらず、一律に属格になる¹⁰。下の例(40)において、動詞句(40a)で juoda「飲む」の目的語である kahvi「コーヒー」は分格だが、(40b)のように juoda の動詞由来名詞・動名詞と複合化すると、kahvi は必ず属格になる。(40c)のように分格のまま現れることはできない。

(40) a. juo-da kahvi-a

drink-AINF coffee-PAR

「コーヒーを飲む」

b. kahvi-n | juonti / kahvi-n | juo-minen

coffee-GEN | drinking.NOM coffee-GEN | drink-VN.NOM

「コーヒーを飲むこと」

⁹ 分詞の複合語に関しては、ISK(413-414)参照。

¹⁰ 〈属格名詞 | 動名詞／動詞由来名詞〉の複合語に関しては、Jaakola(2004)参照。

c. * kahvi-a |juonti / * kahvi-a |juo-minen
 coffee-PAR | drinking.NOM coffee-PAR | drink-VN.NOM
 「int. コーヒーを飲むこと」

それに対して、分詞の場合には、動詞句での目的語の格が複合語でも保持される。(39b)は t 対格, (39c)は分格の例である。このように、分詞は、動詞句の要素をそのまま引き継いで複合できる程に、高い複合語形成力を持っている。この分詞の複合語形成力の高さも、〈側置詞 | 受動現在分詞〉による形容詞修飾がある程度容認されることの一つの要因である。

5. まとめ

A 不定詞基本形と受動現在分詞変格による非典型的な形容詞修飾に関する本章の内容を、以下にまとめる。2 節では、形容詞修飾文の主語が不定形動詞の場所格補部に相当する名詞である例について、母語話者にアンケート調査を行い、いずれの文もある程度容認されている事実を示した。この逸脱が多少なりとも許容される理由としては、それらの場所格補部は動詞句内の項であり目的語に準ずるものと捉えられることと、動詞によって固定的に格が決定されている *rektio* であるためにその格がなくても動詞との意味的關係が容易に復元できることが考えられる。3 章では、〈動詞 *hypätä* + 側置詞 *yli* + 名詞 *aidan*〉に相当する形容詞修飾文を取り上げ、それらも実際に多くの母語話者に容認されていることを示した。通常の文においてはあくまで側置詞 *yli* と属格名詞 *aidan* が側置詞句を構成しているが、名詞と側置詞が離れていて同じ句内にない形容詞修飾文では、動詞と側置詞があたかも句動詞のように結びついているとみなされ、名詞がその項であるかのように、文の主語になっても、人によっては許容すると考えられる。4 章では、〈側置詞 | 受動現在分詞〉という複合が、形容詞修飾文において容認されるというアンケート結果を提示した。〈側置詞 | 動詞〉という複合動詞は容認されず、この〈側置詞 | 受動現在分詞〉という複合は、3 節で論じた形容詞修飾文における句動詞的なまとまり〈動詞 + 側置詞〉が前提である。また、同じ形容詞修飾文であっても、〈側置詞 | A 不定詞基本形〉の容認度は低いことから、受動現在分詞の複合力の高さを示すものでもある。

6章 結論

本章では、論文全体のまとめとして、1節で研究成果をまとめる。2節は、本論文では論考が不足していた、または取り扱えなかった問題を述べる。

1. 研究成果

本論文では、A 不定詞基本形と受動現在分詞による修飾用法に関して、網羅的な記述を目指し、観察を進めた。

2章では、A 不定詞基本形による修飾を扱った。1節の名詞修飾では、先行研究で記述のある主名詞の種類、主名詞句が現れる統語環境に加え、主名詞の意味補充という A 不定詞句の役割も示した。2節では、これまではっきりしなかった名詞修飾と動詞修飾の区別を明示した。動詞修飾は「～するために」という目的を表すが、名詞修飾も、目的を表す場合がある。しかし、名詞動詞修飾が主名詞の意味を補う必須要素であるのに対し、動詞修飾は補足的であり文の必須要素ではない。それと同時に、動詞修飾の A 不定詞句が主文から完全に独立している訳でもなく、主文の名詞（現代では所有文の所有物）と「動詞－目的語」の関係にある。3節では形容詞修飾に関して、〈主語+olla+形容詞+A 不定詞基本形〉と、〈主語+olla+形容詞+時や場所を表す名詞+A 不定詞基本形〉という2パターンに分けて論じた。前者のパターンでは、同形式のこともある主語用法との違いを考察し、形容詞修飾用法が主語名詞のカテゴリの属性を表す文であることを明らかにした。さらに、形容詞の後に名詞がある〈形容詞+名詞+A 不定詞基本形〉という名詞句に関して、形容詞修飾文の補語以外には用いられないという統語制約も示した。後者のパターンについては、形容詞修飾と名詞修飾の中間的な存在であることを論じた。

3章では、名詞修飾を中心に、受動現在分詞による修飾を扱った。名詞修飾は、受動現在分詞の主要な用法である。しかし、従来の研究では、「動詞－目的語」の関係からはずれた「受動現在分詞－主名詞」の修飾は、例外としてわずかに言及があるにとどまっていた。本論文では、この逸脱に関して、3パターンに分けて詳述した。これらはいずれも、受動現在分詞がモダリティ的意味を持っていることによる。1.1節は、語彙化・形容詞化した受動現在分詞についてである。1.2節は、サイズを規定する受動現在分詞についてである。このタイプは、1.1節とは違い受動現在分詞が単独で語彙化しているのではなく、受動現在分詞の主語に相当する属格名詞が、主名詞の潜在的属性叙述に不可欠な要素となっている。1.3節は、受動現在分詞とそれが修飾している *kunto*「状態」が、「動詞－項」の関係にすらない、非常に特異な事例を扱った。この受動現在分詞は、主名詞とではなく主語といった主文の要素と「動詞－目的語」の関係にあり、名詞句〈受動現在分詞+主名詞 *kunto*〉ではなく文全体で捉えて記述した。2節では動詞修飾、3節では形容詞修飾を扱った。形式が似ている〈主語+olla+形容詞+受動現在分詞変格〉と〈主語+olla+形容詞+受動現在分詞主格／分格〉に関して、両者は構造が異なり、後者が形容詞修飾ではないことも指摘した。

4章では、A不定詞基本形による名詞修飾を、A不定詞基本形の包括目的語と主名詞の格という観点から捉え直した。2節では、主名詞が肯定文の目的語である事例を扱った。A不定詞句が主名詞を修飾している通常の名詞修飾では、A不定詞基本形の目的語は ϕ 対格になる。しかし、主文の動詞と主名詞が結びついて助動詞的なまとまりを形成している場合、A不定詞基本形とその目的語は主文に組み込まれ、目的語はn対格になる。母語話者へのアンケート調査では、先行研究の通り、この ϕ 対格/n対格の選択に揺れが見られた。さらに、アンケート調査や追加調査によって、 ϕ 対格/n対格の対立がある場合、格の違いに反映される文の構造の違いによって、ニュアンスの違いが生じることを論じた。n対格の目的語は主文に組み込まれることによって、特定の対象を指示し、行為の完了が含意される。それに対してA不定詞句が主名詞の修飾句である ϕ 対格の場合は、 ϕ 対格目的語が不特定の対象を表す。3節では、否定文でのA不定詞基本形の格選択を扱った。先行研究では、通常の名詞修飾、つまり肯定文で ϕ 対格であれば、否定文でも基本的には ϕ 対格だとされている。しかし、アンケート調査によって、実際の使用では、否定の影響が広範な範囲に及び分格が広く用いられていることを示した。主名詞が主語、場所格副詞の場合には ϕ 対格が選ばれているが、(主文の動詞との結合度に関わらず)目的語、補語、所有文の所有物といった主文の述語内要素の場合は、圧倒的に分格が選択されていた。4節では、〈コピュラ動詞on＋主名詞＋A不定詞基本形〉という形式の所有文と必須的表現を取り上げ、構造内部の結合度の段階性を、主名詞とA不定詞基本形の目的語の格によって、記述・整理した。所有文は〈on＋主名詞〉がすでにある程度結合しているが、さらに結合が進むと、否定文になっても主名詞が分格にならず主格のままの固定的表現になる。さらに必須文的表現になると、構文として完全に固定化しており、もはやA不定詞句による名詞修飾とは見なせない。

5章では、「他動詞－目的語」という解釈上の文法関係から逸脱したA不定詞基本形・受動現在分詞と主名詞・関連名詞について、形容詞修飾文を用いたアンケート調査を通して、母語話者の容認度を明らかにした上で論じた。2節では、「自動詞－場所格補部」の関係にある形容詞修飾文も、あくまで逸脱ではあるものの、ある程度容認されている事実を提示した。これは、場所格補部が、動詞との関係において目的語に準ずる要素だからである。3節で扱ったのは、「自動詞－側置詞項」という特異な事例だが、これもアンケートでの容認度は高かった。本来は〈動詞＋側置詞＋名詞〉において、〈動詞＋【側置詞＋名詞】〉のように側置詞と名詞が側置詞句を構成しているが、動詞との結びつきが強い一部の場合、隣接していた名詞と側置詞が形容詞修飾文では切り離され、動詞と側置詞があたかも句動詞のように結びつき、〈【動詞＋側置詞】＋名詞〉のような構造となっているからだと考察した。さらに4節では、側置詞と不定形動詞が複合化した形容詞修飾文を扱った。通常の動詞句やA不定詞基本形の形容詞修飾文ではこの複合の容認度は低いが、受動現在分詞の形容詞修飾文では容認度が高かった。この容認度の高さは、3節で論じた、形容詞修飾文における動詞と側置詞の句動詞的な結びつきと、分詞の複合語形成力の高さによるものである。

2. 今後の課題と展望

本論文では考察が不十分であった、または取り扱えなかった問題は、以下の通りである。

2章1節と4章2節で論じたA不定詞基本形による名詞修飾に関しては、論考が不足していることを認めざるをえない。主名詞が文の目的語でA不定詞基本形の目的語の格選択に ϕ 対格/n対格の対立がある場合、 ϕ 対格目的語は不特定であると述べたが、通常の名詞修飾ではその限りではない。A不定詞基本形による名詞修飾の意味的特徴をさらに突き詰めなければならない。4章3節では、否定文でも主名詞が分格にならない所有文を取り上げた。しかし、どのような主名詞がこのパターンに含められるのかといったことは、明らかにできていない。また、「動詞－目的語」の関係からはずれた非典型的な修飾を扱った5章に関しては、逸脱が許される範囲を明らかにするまでは至っていない。場所格補部、側置詞の項であっても、容認度の高低が存在するはずである。より多くの例文でアンケート調査を行い、その範囲を明らかにし、記述を精密化する必要がある。これらは、今後の課題である。

今後の展望としては、不定詞に関して、A不定詞基本形とMA不定詞入格との比較研究を考えている。この2つの不定詞には、用法上対応する点も多く、興味深い。例えば、名詞修飾用法において、MA不定詞入格を従える動詞をもととする動詞由来名詞が主名詞の場合に、MA不定詞入格とA不定詞基本形の両方とも用いられる、またはA不定詞基本形のみが用いられることがある。形容詞修飾用法においては、文の主語が、A不定詞基本形ではその動詞の目的語、MA不定詞入格では主語に相当する。また、分詞に関しても、受動現在分詞のみならず、他の分詞も扱いたい。本論文をもとに、フィンランド語の不定形動詞の研究をさらに進めていきたいと考えている。

参考文献

- Hakulinen, Lauri. 1961. (translated by Atkinson, John.) *The Structure and Development of the Finnish Language*. Richmond: Curzon.
- Hakulinen, Auli & Fred Karlsson. 1975. "Suomen akkusatiivi: funktionaalinen näkökulma." *Virittäjä* 79. 339-363.
- Hakulinen, Auli. & Fred Karlsson. 1979. *Nykysuomen lauseoppia*. Helsinki: Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.
- Harjunen, Tero. 2013. *A-infinitiivin lyhyen muodon akkusatiiviohjettien variaatio perussubjektillisissa lauserakenteissa: Kyselytesti- ja korpus tutkimus*. Tampere University. Pro gradu.
- Haspelmath, Martin. 1994. "Passive Participles across Languages." Fox, Barbara. & Paul J. Hopper. eds. *Voice Form and Function*.: 151-177. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.
- Helasvuo, Marja-Liisa. & Maria. Vilkkuna. 2008. "Impersonal is Personal: Finnish Perspectives." *Transactions of the Philological Society*. 106(2): 216-245.
- Holmberg, Anders. 2010. "The Null Generic Subject Pronoun in Finnish: A Case of Incorporation in T." Teresa, Biberauer [et al] eds. *Parametric Variation: Null Subjects in Minimalist Theory*. :200-230. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ikola, Osmo. 1950. "Infinitiivin objektista: Suomen objektisääntöjen tarkistusta." *Virittäjä* 54: 468-474.
- Ilsa, Katariina., Hannu. Ottinen. & Aino. Piehl. 2012. *Kielenhuollon käsikirja*. Helsinki: Yrityskirjat OY.
- ISK: Hakulinen, Auli. [et al] eds. 2004. *Iso suomen kielioppi*. Helsinki: Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.
- Jaakola, Minna. 2004. *Suomen genetiivi*. Helsinki: Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.
- Koivisto, Helinä. 1987. *Partisiippien adjektiivistuminen suomen kielessä*. Helsinki: Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.
- Laitinen, Lea. 2006. "Zero Person in Finnish." Helasvuo, Marja-Liisa. & Lyle. Campbell. eds. *Grammar from the Human Perspective: Case, Space and Person in Finnish*.: 209-231. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.
- Nanni, L. Deborah. 1980. "On the Surface Syntax of Construction with Easy-Type Adjectives." *Language* 56 (3): 568-581. Linguistic Society of America.
- Pekkarinen, Heli. 1997. "Kieliopillistuva olla tehtävissä tyyppi." Lehtinen, Tapani. & Lea. Laitinen. eds. *Kieliopillistuminen: Tapaustutkimuksia suomesta*.: 66-88.

- Pekkarinen, Heli. 2005. “Sika on paha nyljettävä – mutta helppo ruokkia: Adjektiivin kanssa esiintyvien infiniittisten muotojen käytön tarkastelua.” *Elävä kielioppi: Suomen infiniittisten rakenteiden dynamiikka*: 127-145. Helsinki: Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.
- Pekkarinen, Heli. 2011. *Monikasvoinen TAVA-partisiippi: Tutkimus suomen TAVA-partisiipin käyttökonteksteista ja verbiliittojen kieliopillistumisesta*. Helsinki University. Doctoral Dissertation.
- Penttilä, Aarni. 1963. *Suomen kielioppi*. Helsinki: W. Söderström.
- Savijärvi, Ilkka. 1971. “Kirves on työkalu hakata puita: Havaintoja ensimmäisen infinitiivin lyhyemmän muodon käytöstä.” *Virittäjä* 75: 280-295.
- Timberlake, Alan. 1974. *The Nominative Object in Slavic, Baltic, and West Finnic*. München: Verlag Otto Sagner.
- Van Oosten, Jeanne. 1977. “Subjects and Agenthood in English.” *Chicago Linguistic Society* 13: 459-479.
- Vilkuna, Maria. 2003. *Suomen lauseopin perusteet*. Helsinki: Edita.
- 影山太郎. 2009. 「言語の構造制約と叙述機能」『言語研究』第 136 号: 1-34.
- 久保田樹. 2015. 「フィンランド語の受動現在分詞による非典型的な名詞修飾 — 「状態構文」を中心に —」『名古屋言語研究』第 9 号: 15-26.
- 久保田樹. 2017 近刊. 「フィンランド語の〈on+主名詞+A 不定詞基本形〉の構造を持つ所有文・必須文」『名古屋言語研究』第 11 号.
- 坂田晴奈. 2010. 『フィンランド語の不定詞について—使用実態から見る動詞性と従属度—』東京外国語大学大学院博士論文.
- 坂田晴奈. 2015. 「フィンランド語の A 不定詞変格形の用法—他動性からの再考—」『ウラリカ』第 16 号: 11-34.
- 寺村秀夫. 1993. 『寺村秀夫論文集 1 日本語文法編』東京: くろしお出版.
- 松村一登. 1992. 「フィンランド語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典第 3 巻 世界言語編』: 673-688. 東京: 三省堂.

辞書

- Hurme, Raija., Riirra-Leena. Malin. & Olli. Syväoja. eds. 2006¹⁵. *Uusi suomi-englanti suur-sanakirja*. Helsinki: WSOY.

例文収集資料

- Murakami, Haruki. 2012. (translated by Aleks. Milonoff.) *Norwegian Wood*. Helsinki: Tammi.
- Raamattu*. 2009¹⁶. Jongbloed: Piplia.

ウェブサイト

Tilastokeskus. フィンランド統計局

http://tilastokeskus.fi/tup/suoluk/suoluk_vaesto.html 2015/9/6

Vvks: Virtuaalinen vanha kirjasuomi. <http://www.helsinki.fi/vvks/> 2015/9/10

略号一覧

ABE	欠格	1	1 人称
ABL	離格	2	2 人称
ACC	対格	3	3 人称
ACT	能動	4	4 人称
ADE	所格		
AGENT	動作主		
AINF	A 不定詞		
ALL	向格		
COM	共格		
COMP	比較級		
COND	条件法		
ELA	出格		
ESS	様格		
GEN	属格		
ILL	入格		
IMP	命令法		
INE	内格		
INST	具格		
MAINF	MA 不定詞		
NEG	否定		
NOM	主格		
PAR	分格		
PART	分詞		
PASS	受動		
PAST	過去		
PC	小辞		
PL	複数		
POSS	所有		
PRES	現在		
REL	關係詞		
QP	疑問小辞		
SG	単数		
TRA	変格		
VN	動名詞		

KYSYMYSLOMAKE

SUKUPUOLI ☐ MIES ☐ NAINEN

IKÄ ☐ -19v ☐ 20-29v ☐ 30-39v ☐ 40-49v ☐ 50v-

Oletko suomen kielen opiskelija tai opettaja? ☐ Olen. ☐ En ole.

KYSYMYKS I

Valitse esimerkeissä (1)-(18) sopiva sijamuoto aaltosulkeissa olevista vaihtoehtoista. Jos molemmat sijamuodot ovat sopivat, valitse molemmat. Kirjoita kommentti, jos molemmat käyvät päinsä ja niiden välillä on jonkinlaisia eroja (esm. "kissa" on puhekielinen ja "kissaa" on kirjakielinen.)

- (1) { Orava ja jänis / Oravaa ja jänistä } ei ole helppo nylkeä.
- (2) Kansalaisia ei varmasti kiinnostaisi nähdä { Lipponen ja Aho / Lipposta ja Ahoa } vastakkain.
- (3) Heille ei ole riittävää valita { teema / teemaa }.
- (4) Minusta 16 vuotta on sopiva ikä aloittaa alkoholin { käyttö / käytön }.
- (5) Minusta 16 vuotta ei ole sopiva ikä aloittaa alkoholin { käyttö / käyttöä }.
- (6) Yrjö laati suunnitelman kaataa { karhu / karhun }.
- (7) Yrjö ei laatinut suunnitelmaa kaataa { karhu / karhua }.
- (8) Uhri menettää oikeutensa nostaa { syyte / syytteen }.
- (9) Uhri ei menetä oikeuttaan nostaa { syyte / syytettä }.
- (10) Hän tarjoaa heille tilaisuuden valita { teema / teeman }.
- (11) Hän ei tarjoa heille tilaisuutta valita { teema / teemaa }.

(12) Tuote tarjoaa mahdollisuuden ottaa { turvallinen yhteys / turvallisen yhteyden }.

(13) Tuote ei tarjoa mahdollisuutta ottaa { turvallinen yhteys / turvallista yhteyttä }.

(14) Olen iloinen komission aikomuksesta tehdä { suositus / suosituksen }.

(15) En ole iloinen komission aikomuksesta tehdä { suositus / suositusta }.

(16) Tämä on syy tavata { ystävä / ystävän }.

(17) Tämä ei ole syy tavata { ystävä / ystävää }.

(18) Aikomukseni tavata { opettaja / opettajaa / opettajan } ei rauennut.

KYSYMYS 2

Anna kustakin esimerkistä kielitajusi mukainen vaihtoehto hyväksyttävyyssasteikolla A–C:

A luonnollinen (= kielikorvani hyväksyy)

B ei täysin luonnollinen mutta hyväksyttävä (= menee jotenkuten läpi)

C epäluonnollinen

Jos vastauksesi on B, perustele kantasi lyhyesti (esim. “hieman vanhanaikainen”, “puhekielimäinen”, “Tuntuu paremmalta, jos ...” jne.).

(19) Karhun Yrjö laati suunnitelman kaataa. []

(20) Syytteen uhri menettää oikeutensa nostaa. []

(21) Teeman hän tarjoaa heille tilaisuuden valita. []

(22) Turvallisen yhteyden tuote tarjoaa mahdollisuuden ottaa. []

(23) Ufot on vaikea asia uskoa. []

(24) Ufot on vaikea asia uskottavaksi. []

(25) En halua ylihypätä aitaa. []

(The intended meaning is "En halua hypätä aidan yli.")

(26) Aitaa en halua hypätä yli. []

(27) Aita on liian korkea hypätä yli. []

(28) Aita on liian korkea yli hypättäväksi. []

(29) Aita on liian korkea ylihypätä. []

(30) Aita on liian korkea ylihypättäväksi. []

(The intended meaning of (27)-(30) is "Fence is too high to jump over.")

(31) Nautin klassisen musiikin kappaleita. []

(32) Klassisen musiikin kappaleet ovat vaivattoman helppoja nauttia. []

(33) Klassisen musiikin kappaleet ovat vaivattoman helppoja nautittaviksi. []

(34) Avioero on vaikea aihe keskustella. []

(35) Avioero on vaikea aihe keskusteltavaksi. []

(36) Pienet tuolit ovat vaikeat istua. []

(37) Pienet tuolit ovat vaikeat istuttaviksi. []

Kiitos paljon avusta!